# 森岳城跡

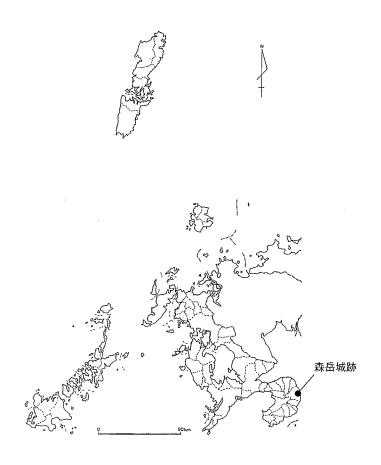
- 県立島原高等学校体育館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 -

2002

長崎県教育委員会

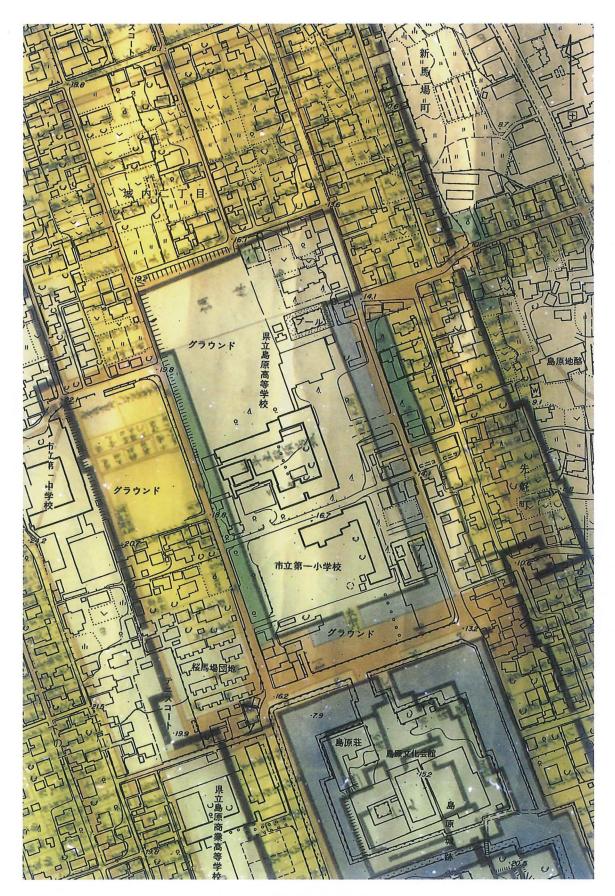
# 森岳城跡

- 県立島原高等学校体育館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 -



2002

長崎県教育委員会



森岳城内街区推定図(S=1/3,000)





平成 12 年度調査区空中写真(上:北から、下:東から)

## 発刊にあたって

本書は県立島原高等学校体育館改築工事に伴って実施した森岳城跡の発掘調査報告書です。

森岳城(島原城)は松倉重政が元和四年(1618)から7年3箇月を要して築城した平城で、以後約250年間にわたり島原藩の政治の中枢にありました。

城は東西 190 間,南北 660 間の外郭が,本丸・二ノ丸・三ノ丸のある 内郭を取り囲む壮大な構えをなし、北側には侍町,東~南側には町屋が 配されるなど、城下町としての整備にも大きな役割を果たしました。

今回調査が行われた三の丸は、内部の様子が絵図面に全く描かれていない城主の居住空間にあたり、現在は個人住宅や店舗等の他、島原市立第一小学校や県立島原高等学校の敷地となっています。

2年にわたる発掘調査では、三の丸の堀石垣、建物跡、石列、石積み溝、石敷き遺構の他、中世の集石遺構、土坑、掘立柱建物跡も確認され、不明な部分の多い三の丸の建物配置や施設の一部を垣間見ることができたのは、調査の大きな成果でした。

また,近世のみならず,中世にさかのぼる資料が得られたことは,城 下町島原の成立以前の様子を知るうえで大きな学術的価値があると思い ます。

そのような意味からも、今回の調査は世に言う『島原大変』によって封 印された歴史を解明するための糸口を見つけたといえるでしょう。

最後に、ご協力いただきました関係者の皆様方にお礼申し上げますとともに、森岳城跡の発掘調査成果が学術資料や地域の歴史教材として活用され、文化財への理解が深まることを祈念して発刊のあいさつといたします。

平成14年3月31日

長崎県教育委員会教育長 木 村 道 夫

## 例 言

- 1 本書は長崎県島原市城内二丁目に所在する森岳城跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は県立島原高等学校体育館建設と同窓会館建設に伴い、平成11年7月5日~7月30日に行われた範囲確認調査の結果をもとに、本調査を平成11年9月20日~12月10日と、平成12年7月3日~9月13日の2カ年にわたって実施した。
- 3 調査は長崎県教育庁文化課(現.学芸文化課)が主体となって実施した。
- 4 本書は本田秀樹・竹中哲朗・川口洋平・東貴之がそれぞれ分担執筆し、執筆者名は本文目次に記した。
- 5 遺構実測は基本的に調査担当者が行い、一部については本多義文・木村光江・宮崎保子・石本ア ヤ子・松崎幸吉・荒木恵子の協力を得た。
- 6 遺物実測は竹中哲朗・斉藤いづみ・網谷泰代・松尾美代子・近藤慶子・小林利恵子・濱本秀美が, トレースは斉藤いづみ・渡辺洋子が, 拓本は東貴之・小林利恵子・渡辺洋子が行った。
- 7 本書関係の写真撮影は、調査時の遺構については調査担当者が行い、空中写真については㈱埋蔵 文化財サポートシステムとアジア航測㈱に委託した。遺物写真は本田と竹中が撮影した。
- 8 本書に掲載した島原城関係絵図の写真撮影にあたっては、島原図書館の本多茂氏(肥前島原藩松平 文庫管理員・島原市文化財保護審議委員)に便宜を図っていただいた。なお、巻頭に掲載した森岳城 絵図と島原市内地図の合成については、㈱埋蔵文化財サポートシステムの技術協力を得た。
- 9 島原城に関する資料については、島原市役所総務課の平尾明氏より島原市火山資料館リスト、寛 政四年島原大変関連古絵図目録、寛政四年島原大変関連古絵図展の目録附属解説文、『九州地方にお ける近世自然災害の歴史地理学的研究』(九州大学教養部国史研究会・人文地理学研究室編)の提供を 受けた。

また,県立島原高等学校関係の写真については,長崎県立島原高等学校創立百周年記念誌編集委員会ならびに隈部啓氏(同窓会事務局),冨永貴稔氏(島原高等学校教諭)のご厚意で複写を許された。

- 10 本書で用いた方位はすべて磁北である。
- 11 本書で用いた遺構に関する表記は次のとおりである。

SA: 柱穴列・礎石列, SB: 掘立柱建物跡, SD: 溝跡・堀跡, SH: 石組遺構, SK: 土坑, SP: 橋脚, SS: 石敷遺構, SV: 石列, P: ピット

- 12 本書に関する遺物・写真・図面については、長崎県教育庁学芸文化課立山分室で保管している。
- 13 本書の編集は本田による。

# 本 文 目 次

第1章	はじめに	
第1節	調査に至る経過(本田)	······ 1
第2節	調査組織(本田)	2
		7
第2章	遺跡の立地と環境	
第1節	地理的環境(竹中)	····· 4
第2節	歷史的環境(竹中)	····· 4
第3章	調査の概要	
第1節	内容範囲確認調査の概要と基本層序(本田)	····· 6
第2節	平成 11 年度の調査概要と遺構(本田)	·····/8
第3節	平成 12 年度の調査概要と遺構(本田)	32
第4節	出土遺物	1 / / 1 / / W
1	土器・陶磁器類(川口)	39
2	窯道具(竹中)	
3	石製品(竹中)	
4	瓦(東・竹中)	
5	鉄製品·銅製品(竹中)	····· 76
第4章	まとめ(本田)	77
第5章	森岳城の歴史(竹中)	
第1節	研究史	······ 81
第2節	森岳城周辺の地形	82
第3節	森岳城の地割	····· 87
第 4 節	<b>絵図にみられる調本区周辺の保湿</b>	an

# 挿 図 目 次

	森岳城跡位置凶	とび
	森岳城内街区推定図(S=1/3,000)	巻頭
	平成 12 年度調査区空中写真	巻頭
第1図	森岳城跡調査区位置図①(S=1/2,500)	
第2図	森岳城周辺の主要遺跡(S=1/25,000)	5
第3図	森岳城跡調査区位置図②(S=1/1,500)	6
第4図	調査坑配置図(S = 1 / 500)	····· 7
第5図	森岳城跡全体遺構配置図(S = 1 / 500)	Q
第6図	平成 11 年度調査遺構配置図(S = 1 / 300)	Q
第7図	- 場跡 (SD01) (S = 1 / 150)	
第8図	三ノ丸堀関連土層図(S=1/40)	19
第9図	ニノル加房屋工層区(S-1/40) 溝跡(SD02)(S=1/60) ····································	
第10図	福納(SD02) (S=1 / 60) 石組み遺構(SH01)内,瓦出土状況(S=1 / 20)	
第11図	7 組 7 退 博 (SI 01 ) 7 地	15 • 16
第12図	石組み遺構(SH01), 礎石列(SA01), 石列(SV08)(S=1/60)	13 · 10
第13図	石列(SV01~04・09), 土坑(SK05), 不明遺構(SX01)(S=1/60)	
第14図		
	石列(SV05·06·10)(S=1/60)	
第 15 図	石列(SV07)(S=1/60)	22
第16図	土坑(SK01) (S = 1 / 20)	
第17図	土坑(SK 02) (S = 1 / 40)	
第 18 図	土坑(SK 03) (S = 1 / 40)	23
第 19 図	土坑(SK 04) (S = 1 / 50) 土坑(SK 05) (S = 1 / 50)	24
第 20 図	土坑 (SK 05) (S = 1 / 50)	24
第 21 図	土坑(SK 06) (S = 1 / 50)	
第 22 図	掘立柱建物跡全体図, 土坑(SK07・08)(S=1/100)	
第 23 図	掘立柱建物跡(SB01 ~ 04)(S = 1 / 100)	28
第 24 図	堀立柱建物跡(SB05 ~ 07)(S = 1 / 100)	29
第 25 図	橋脚(SP01)(S=1/80)	
第 26 図	橋脚(SP02)(S = 1 / 80)	
第 27 図	不明遺構(SX02 ~ 04)(S = 1 / 80) ···································	
第 28 図	平成 12 年度調査遺構配置図(S=1/200)	
第 29 図	溝跡(SD03)(S=1/80)	
第 30 図	堀跡(SD04)(S=1/80)	35
第 31 図	土坑(SK 09) (S = 1 / 40)	36
第 32 図	柱穴列(SA02·03)(S=1/80)	
第 33 図	7F~8F区遺構配置図,柱穴列(SA03),不明遺構(SX05)(S=1/80)	38
第 34 図	土坑(SK01)出土遺物(1~7), 2·3区出土遺物①(S=1/3) ····································	40
第 35 図	2 ・ 3 区出土遺物(2)(S = 1 / 3) ··································	41
第 36 図	2 · 3 区出土遺物③(S = 1 / 3)	43
第 37 図	4 · 5 区出土遺物, 8 · 9 区出土遺物(S=1/3) ····································	45
第 38 図	その他の出土遺物(S = 1 / 3) ··································	47
第 39 図	窯道具(S=1/3) ······	48
第 40 図	石製品(S=1/3)	
第 41 図	本瓦の部分名称	
第 42 図	軒丸瓦①(S=1/4)	
第 43 図	軒丸瓦②(S=1/4)	
第 44 図	軒平瓦①(S=1/4)	
第 45 図	丸瓦①(S=1/4)	59
第 46 図	鬼瓦①, 塀(目板)瓦(S=1/4)	60
第 47 図	軒丸瓦③(S=1/4)	
第 48 図	軒丸瓦④(S=1/4)	63
第 49 図	軒平瓦②(S=1/4)	67

第 50 図		瓦②(S=1/4) ····································					
第 51 図							
第 52 図							
第 53 図							
第 54 図	丸	瓦⑥,平瓦,鬼瓦②	,輪違い国	ī(S=1/	′ 4)	••••••	 ····· 73
第 55 図							
第 56 図							
第 57 図		_ , , _ , _ , _ , _ , _ , _ , _ , _					
第 58 図							
第 59 図							
第 60 図							
第61図							
第 62 図							
第 63 図							
第64図	森	岳城跡方格地割想定	図(S=1/	7,500)·			 89
第65図	森	岳城関連絵図(島原図	図書館松平	文庫蔵)	•••••		 91
			===	<b>-</b>	t	V/6-4	
			表		j	次	
第1表							
第2表							
第3表							
第4表	軒す	1瓦観察表②					 ····· 64
第5表							
第6表	森岳	岳城関連年表					 80
						_	
			図	版	目	次	
図版 1	1	森岳城とその周辺(	昭和 22 年	:国十州	地理院)		 95
図版 1	1 2		昭和 22 年	:国土地	<b>地理院)</b>		····· 95
	2	森岳城(平成11年)					
図版 1 図版 2	2 1	森岳城(平成 11 年) 森岳城遠景					
	2	森岳城(平成 11 年) 森岳城遠景 平成 11 年度調査区	(北から)				
	2 1 2 3	森岳城(平成 11 年) 森岳城遠景 平成 11 年度調査区 平成 11 年度調査区	 (北から) (東から)				
	2 1 2 3 4	森岳城(平成11年) 森岳城遠景 平成11年度調査区 平成11年度調査区 平成11年度調査区	(北から) (東から) (西から)				
	2 1 2 3	森岳城(平成 11 年) 森岳城遠景 平成 11 年度調査区 平成 11 年度調査区	(北から) (東から) (西から) (北から)				
図版 2	2 1 2 3 4 5 6	森岳城(平成11年) 森岳城遠景 平成11年度調查区 平成11年度調查区 平成11年度調查区 平成12年度調查区 平成12年度調查区	(北から) (東から) (西から) (北から) (北から)				····· 96
	2 1 2 3 4 5	森岳城(平成11年) 森岳城遠景 平成11年度調查区 平成11年度調查区 平成11年度調查区 平成12年度調查区 平成12年度調查区	(北から) (東から) (西から) (北から) (北から)				····· 96
図版 2	2 1 2 3 4 5 6 1	森岳城(平成11年) 森岳城遠景 ············· 平成11年度調查区 平成11年度調查区 平成12年度調查区 平成12年度調查区 平成12年度調查区 平成101)作業風	(北から) (東から) (西から) (北から) (北から) (北から) 景				····· 96
図版 2	2 1 2 3 4 5 6 1 2	森岳城(平成11年) 森岳城遠景 平成11年度調查区 平成11年度調查区 平成12年度調查区 平成12年度調查区 平成12年度調查区 平成(SD01)作業風 堀跡(SD01)①(南加	<ul><li>(北から)</li><li>(東から)</li><li>(北から)</li><li>(北から)</li><li>(北から)</li><li>景</li><li>流の</li><li>況(東から)</li></ul>				····· 96
図版 2	2 1 2 3 4 5 6 1 2 3	森岳城(平成11年) 森岳城遠景 平成11年度調查区 平成11年度調查区 平成12年度調查区 平成12年度調查区 平成12年度調查区 堀跡(SD01)作業風 堀跡(SD01)1.①(南加 堀跡(SD01)積石状	(北から) (東から) (西から) (北から) (北から) 景 よら) 況(東から)				····· 96
図版 2	2 1 2 3 4 5 6 1 2 3 4	森岳城(平成11年) 森岳城遠景 平成11年度調查区 平成11年度調查区 平成12年度調查区 平成12年度調查区 平成(SD01)作(南次 堀跡(SD01)①(南次 堀跡(SD01)②(南次 堀跡(SD01)②(南次	<ul><li>(北から)</li><li>(東から)</li><li>(北から)</li><li>(北から)</li><li>景 いた)</li><li>別(東から)</li><li>別(東から)</li><li>いた)</li><li>いた)</li><li>いた)</li></ul>				····· 96
図版 2	2 1 2 3 4 5 6 1 2 3 4 5	森岳城(平成11年) 森岳城遠景 平成11年度調查区 平成11年度調查区 平成12年度調查区 平成12年度調查区 平成12年度調查区 堀跡(SD01)作業風 堀跡(SD01)①(南加 堀跡(SD01)②(南加 堀跡(SD01)②(南加	<ul><li>(北から)</li><li>(東から)</li><li>(北から)</li><li>(北から)</li><li>景</li><li>況ら)</li><li>取ら)</li><li>から)</li><li>びから)</li></ul>				····· 96
図版 2	2 1 2 3 4 5 6 1 2 3 4 5 6	森岳城(平成11年) 森岳城遠景 平成11年度調查区 平成11年度調查区 平成12年度調調查区 平成12年度調調查区 平成(SD01)(南流 堀跡(SD01)(南流 堀跡(SD01)(2)(南流 堀跡(SD01)(2)(東流 橋脚(SP01·02)(東 溝跡(SD02)(西流	<ul><li>(北から)</li><li>(東から)</li><li>(北から)</li><li>(北から)</li><li>(北から)</li><li>東から)</li><li>東から)</li><li>から)</li><li>から)</li><li>から)</li><li>から)</li></ul>	)			····· 96
図版 2	2 1 2 3 4 5 6 1 2 3 4 5 6 7	森岳城(平成11年) 森岳城遠景 平成11年度調調査区 平成11年度調調調査査 平成12年度調調調調調調 堀跡(SD01)①(気石 堀跡(SD01)②(南 堀跡(SD01)②(南 堀跡(SD01)②(南 堀跡(SD01)②(西 大 堀跡(SD01)(西 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	<ul><li>(北東から)</li><li>(東から)</li><li>(北北から)</li><li>(北北から)</li><li>(東)</li><li>(か)</li><li>(本壁)</li><li>(本壁)</li><li>(本壁)</li></ul>	) S)			····· 96
図版 2 図版 3	2 1 2 3 4 5 6 1 2 3 4 5 6 7 8	森岳城(平成11年) 森岳城遠景 平成11年度調調査区 平成11年度調調調査査 平成12年度調調調調調調 堀跡(SD01)①(気石 堀跡(SD01)②(南 堀跡(SD01)②(南 堀跡(SD01)②(南 堀跡(SD01)②(西 大 堀跡(SD01)(西 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	<ul><li>(北東西北から)</li><li>(東西北北・ )</li><li>(東西北北・ )</li><li>(東)</li><li>(東)</li><li>(東)</li><li>(東)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)</li><li>(本)<!--</td--><td>) S) S)</td><td></td><td></td><td>····· 96</td></li></ul>	) S) S)			····· 96
図版 2 図版 3	2 1 2 3 4 5 6 1 2 3 4 5 6 7 8 1	森岳城(平成 11 年) 森岳城遠景 平成 11 年度調查 平成 11 年度調調 調調 12 年度調調調調調 12 年度調調調調調 12 年度 12 年度 据跡 (SD 01) ① (京本 12 年度) (SD 01) ② (西 14 年度) (SD 01) ② (西 15 年度) (SD 02) (西 16 年度) (SD 02) (西 17 年度) (SD 02) (SD 0	<ul><li>(北東の (北東の (北北) (大) (大) (大) (大) (大) (大) (大) (大) (大) (大</li></ul>	) ら) ら)			····· 96
図版 2 図版 3	2 1 2 3 4 5 6 1 2 3 4 5 6 7 8 1 2	森岳城(平成 11 年) 森岳城遠景 平成 11 年度 東度 11 年度度 東度 12 年度度 東京 12 年度度 東京 12 年度度 東京 12 年度度 東京 12 年度度 東京 12 年度度 東京 12 年度 東京	<ul><li>(1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1)</li></ul>	) ら) ら) から)			····· 96
図版 2 図版 3	2 1 2 3 4 5 6 1 2 3 4 5 6 7 8 1 2 3	森岳城(平成 11 年) 森岳城遠景查区 平成 11 年度 度 東度 度 東度 度 東度 度 東度 度 東度 度 東度 度 場 場 (SD 01)(① 積 (SD 01)(② (西 か)(SD 01)(② (西 か)(SD 01)( (西 の)( (本 は (SD 01)() (西 か)( (大 の)( (本 は (SD 01)() (西 か)( (大 の)( ()( ()( ()( ()( ()( ()( ()( ()( ()(	<ul><li>(1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1)</li></ul>	) ら) ら) から)			····· 96
図版 2 図版 3	2 1 2 3 4 5 6 1 2 3 4 5 6 7 8 1 2 3 4 4 5 6 7 8 1 8 1 8 1 8 1 2 3 4 4 7 8 1 8 1 8 1 8 1 8 1 8 1 8 1 8 1 8 1 8	森岳城(平成 11 年) 森岳城遠景	<ul><li>(1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1)</li></ul>	ら) ら) ら) から) から)			····· 96
図版 2 図版 3	2 1 2 3 4 5 6 1 2 3 4 5 6 7 8 1 2 3 4 5 6 7 8 1 2 3 4 5 6 7 8 1 8 1 8 1 2 3 4 5 7 8 1 8 1 8 1 2 3 4 5 7 8 1 8 1 2 3 4 5 7 8 1 8 1 2 3 7 8 1 8 1 2 3 7 8 7 8 7 8 7 8 7 8 7 8 7 8 7 8 7 8 7	森岳城域是平平平平平平平平平平平平平平平平平平平平平平平平平平平平平平平平平平平平	… (((((景)況)(南東北西西)内、北東西北北。)東)(南東北西西)内。 からららら からり かい ((()) (1) ののののののののののののののののののののののののののののののののの	ら) ら) ら) から) から)			····· 96
図版 2 図版 3	2 1 2 3 4 5 6 1 2 3 4 5 6 7 8 1 2 3 4 5 6	森岳城は11年) 一本岳城は11年年年 ででででででは、12年のでは、12年のでは、12年年年年年年年年年年年年年度で、12年ので、12	…((((()景)、沢)の(、南東北西西)内(東()、北東西北北。))()、北壁壁壁壁壁)、東南かかかかかか。)、東)らかららららか。)、ら北西南((()、田)ら))))。	) ら) ら) から) :状況(西	ゴから)		····· 96 ····· 97
図版 2 図版 3	2 1 2 3 4 5 6 1 2 3 4 5 6 7 8 1 2 3 4 5 6 7 7 7 8 7 8 7 8 7 8 7 8 7 8 7 8 7 8 7	森岳城は11年) 一本岳城は11年年年 ででででででは、12年のでは、12年のでは、12年年年年年年年年年年年年年度で、12年ので、12	…((((()景)、沢)の(、南東北西西)内(東()、北東西北北。))()、北壁壁壁壁壁)、東南かかかかかか。)、東)らかららららか。)、ら北西南((()、田)ら))))。	) ら) ら) から) :状況(西	ゴから)		····· 96 ····· 97

	3 石列(SV02)(南から)	
	4 石列(SV 03)(北から)	
	5 石列(SV05・06・10)(西から)	
	6 石列(SK 02)(北から)	
	7 石列(SK 03)(北から)	
	8 石列(SK 04)(東から)	
図版 6	1 土坑(SK05)(西から)	. 100
	2 土坑(SK06)(北西から)	100
	3 土坑(SK07)(東から)	
	4 掘立柱建物跡全景(北東から)	
	5 掘立柱建物跡(SB01・02)(北から)	
	6 掘立柱建物跡(SB04~07)(南から)	
	7 橋脚(SP01)(東から)	
	8 橋脚(SP02)(西から)	
図版 7	1 溝跡(SD03)①(西から)	101
凶/汉 (	2 溝跡(SD03)②(西から)	. 101
	3 溝跡(SD03)③(南西から)	
	6 堀跡(SD04)②, 柱穴列(SA02)②(西から)	
	7 堀跡(SD04)北石列①(南から)	
STILE O	8 堀跡(SD04)北石列②(南から)	100
図版 8	1 堀跡(SD04)北石列③(南東から)	· 102
	2 堀跡(SD04)南石列(北東から)	
	3 堀跡(SD 04), 土坑(SK 09) (西から)	
	4 土坑(SK09), 柱穴列(SA03)(東から)	
	5 土坑(SK09)(東から)	
	6 7F~8F区全景(北西から)	
	7 7F区(北から)	
	8 不明遺構(SX05)(南から)	
図版 9	1 遺物出土状況①	· 103
	2 遺物出土状況②	
	3 遺物出土状況③	
	4 遺物出土状況④	
	5 三ノ丸内 天文年間銘入りの石塔(手前)	
	6 常盤茶屋付近の石塔群①	
	7 桜門付近の御用清水	
	8 常盤茶屋付近の石塔群②	
図版 10	土坑(SK01)出土遺物(1~4), 2·3区出土遺物①(5~19)	
図版 11	2・3区出土遺物②(20~32・35)	· 105
図版 12	2・3区出土遺物③(33・34・36~46)	· 106
	4 ・ 5 区出土遺物 (48 ~ 52)	
図版 14	2・3区出土遺物④(46・47), 8・9区出土遺物(53~60)	· 108
図版 15	その他の出土遺物(61 ~ 66)	· 109
図版 16	窯道具(67・68),石製品(69・70),土師器(A・B:見込み外周の沈線,	
	C:外底部のヘラケズリ痕, D:糸切り底)	. 110
図版 17	軒丸瓦① $(1 \sim 5 \cdot 7 \sim 15)$	· 111
図版 18	軒丸瓦②(17 ~ 23 · 25 · 26 · 52 ~ 57) ···································	112
図版 19	軒丸瓦③(58~66)	· 113
図版 20	軒平瓦①(28 ~ 43)	· 114
図版 21	軒平瓦②(67 ~ 71 · 73 ~ 87)	
図版 22	丸瓦①(44 ~ 46 · 50 · 51 · 88 ~ 95)	
図版 23	丸瓦②(96 ~ 98), 平瓦(101), 輪違い瓦(104), 刻印付き瓦(105 ~ 109・111 ~ 114)・	· 117
図版 24	鬼瓦(47~49・103), 軒平瓦接合面拡大写真(72)	118

1

ı

ŧ

# 第1章 はじめに

#### 第1節 調査に至る経過(第1図)

森岳城は通称「島原城」と呼ばれ、島原市城内に所在する。大和国二見五条から島原藩主として入部 した松倉重政が、元和四年(1618)から7年3箇月を要して築城した平城である。

かつて森岳大権現を祀る標高 27m の霊山が当地にあったことから森岳の名は付いたと思われ、天正 12 年(1582)の沖田畷の戦いでは龍造寺隆信軍と対峙する有馬・島津連合軍の本陣にもなったと伝えられる。

森岳城の構えは内郭と外郭に大きく分かれる。外郭は東西 190 間(約 343m), 南北 660 間(約 1,190 m)の長方形をなし、周囲には城門 7 箇所、平櫓 33 箇所を備えた塀を巡らす。内郭は外郭の南に偏り、南側から順に本丸、二ノ丸、三ノ丸と配される。本丸と二ノ丸は堀で囲まれ、三ノ丸とは区別される。

今回調査が実施された三ノ丸は城主の居住区で、書院・広間・台所・庭園等があったと伝える。現在は長崎県立島原高等学校や島原市立第一小学校といった文教施設の敷地として利用されているほか、個人住宅や店舗等も建ち並ぶ。

発掘調査に至った主たる原因は城内に占地する学校関係施設の工事に伴うものであった。

平成11年4月,島原高等学校体育館改築に伴う埋蔵文化財の取扱いについて、県教育庁財務課施設班・財産管理班、県土木部建築課と文化課の間で協議が行われた。その席で財務課は既存の体育館解体発注を5月末に予定しており、遺跡の範囲確認調査を6月~8月の間でお願いしたいという申し出があった。

文化課としては学校が周知の埋蔵文化財包蔵地内にあり、これまで調査が一度も行われていないことから、内容範囲確認調査を工事区内の120㎡について実施する必要があり、その調査に要する日数は15日間であると回答した。また、調査は体育館解体後速やかに行う予定であり、遺構等が確認された場合は、再度協議の上で本調査を実施する旨を伝えた。

こうして平成11年7月5日から内容範囲確認調査が開始された。調査は町田利幸(県教育庁学芸文化課埋蔵文化財班主任文化財保護主事)と斉藤いづみ(文化財調査員)が担当した。調査は同窓会会館建設計画地も含めて28箇所,128㎡で行われ,全体の約7割にあたる部分で石垣等の遺構や遺物を検出した。また,本調査の対象となる面積は2,110㎡であることも確定した。

本調査は平成11年9月下旬から実施された。調査は確認調査を行った町田・斉藤が主に担当し、途中遺構実測の応援として福田一志(文化財保護主事)と高原愛(文化財調査員)が加わった。平成11年度は体育館改築を急ぎたいという学校側の意向で、同窓会会館建設計画地の調査は次年度とし、まず1,570㎡について本調査を実施した。

調査地点は森岳城の三ノ丸にあたり、歴代城主の屋敷があった場所である。調査では東側から三ノ丸の堀石垣の跡や弓矢場とみられる箱形の石積み遺構、木橋の橋脚跡など、藩主の居城の輪郭が明らかになった。調査内容については、平成11年9月30日付けの島原新聞や10月20日付けの毎日新聞紙上でも紹介された。

平成12年3月には県立島原高等学校記念館(同窓会館)工事に伴う埋蔵文化財の取扱いについて、県

財務課施設班・財産管理班と文化課との間で協議が行われた。財務課は学校側の意向として,7月~3月の中で記念館の建設完成を希望している旨を伝えたが,文化課は調査の準備期間として2~3箇月は必要であり,調査終了は早くても8月以降となる見通しを述べるにとどまった。

実際に発掘調査に着手したのは平成12年7月に入ってからである。調査は本田秀樹(文化財保護主事)を中心に、斉藤と竹中哲朗(文化財調査員)が交互に担当した。調査対象面積は540㎡である。

調査区は三ノ丸と田町御門の接点付近にあたり、屋敷地からは外れる。調査では東西方向に走る石列を4条、柱穴列を2条確認したが、それぞれの遺構の性格については不明で、今後は絵図との照会等検討を要する。この一帯は現在も湧水の豊富なところとして知られ、これらの遺構もそれに係わる施設である可能性も考えられよう。

### 第2節 調査組織

この調査は長崎県教育委員会が調査主体となり、県教育庁文化課(現. 学芸文化課)が調査を実施した。なお、各年度の調査担当者は次のとおりである。

#### ①平成11年度 範囲内容確認調査

- ・調査担当 長崎県教育庁文化課埋蔵文化財班 主任文化財保護主事 町田利幸(13 日間) 長崎県教育庁文化課埋蔵文化財班 文化財調査員 斉藤いづみ(15 日間)
- ·調査期間 平成11年7月5日~7月30日(15日間)
- ・調査面積 128m<sup>2</sup>

#### ②平成11年度 本調査

- ・調査担当 長崎県教育庁文化課埋蔵文化財班 主任文化財保護主事 町田利幸(57日間) 長崎県教育庁文化課埋蔵文化財班 文化財保護主事 福田一志(5日間) 長崎県教育庁文化課埋蔵文化財班 文化財調査員 斉藤いづみ(57日間) 長崎県教育庁文化課埋蔵文化財班 文化財調査員 高原 愛(23日間)
- ·調査期間 平成11年9月20日~12月10日(57日間)
- ·調査面積 1,570㎡

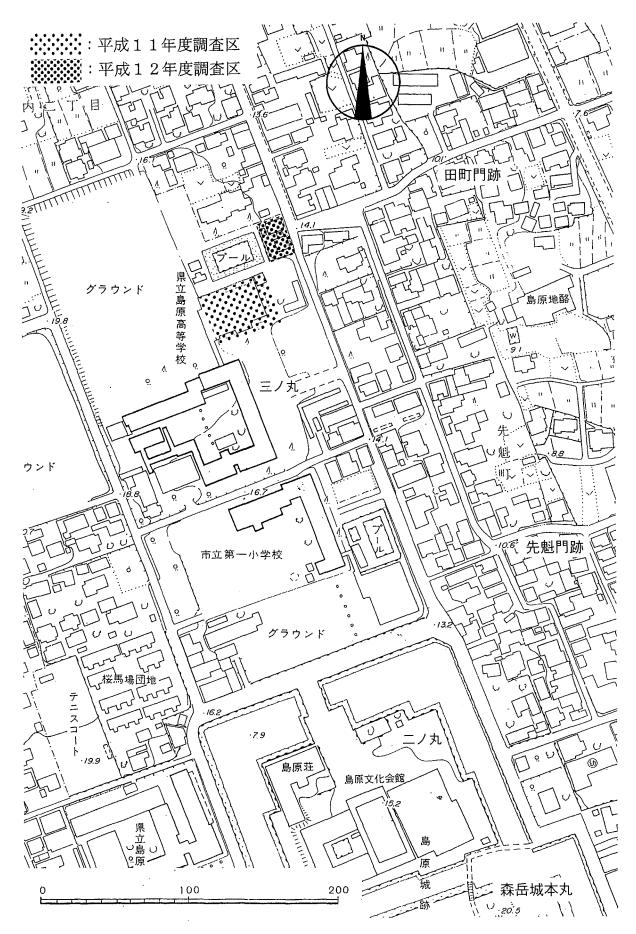
#### ③平成12年度 本調査

長崎県教育庁文化課埋蔵文化財班 文化財保護主事 福 長崎県教育庁文化課埋蔵文化財班 文化財保護主事 本 長崎県教育庁文化課埋蔵文化財班 文化財調査員 為 長崎県教育庁文化課埋蔵文化財班 文化財調査員 符

·調査期間 平成 12 年 7 月 3 日 ~ 9 月 13 日 (45 日間)

・調査面積 540m<sup>2</sup>

福田一志(1日間) 本田秀樹(37日間) 斉藤いづみ(28日間) 竹中哲朗(33日間)



第1図 森岳城跡調査区位置図①(S=1/2,500)

## 第2章 遺跡の立地と環境

#### 第1節 地理的環境

島原半島が東に張り出した中央付近が島原市で、森岳城はその中心にある。背後には雲仙岳が位置し、その麓からのびる扇状地扇端にのり、南方に眉山崩壊(寛政4年)による緩やかなスロープが広がり、近世から続く町並みが展開する。各所で雲仙山系の地下水が湧き出すため「水の都」と呼ばれ、温泉も湧き、観光客に親しまれる風光明媚な土地である。

築城以前に森岳と呼ぶ小山があり、そこに祠(現.猛島神社10)が祀られていたという。このため森岳城と呼ばれる。本丸に所在する三角点の標高は約29.1m、島原高等学校グラウンド北付近は約23m、調査地点付近道路は約16m、城外に当たる島原駅付近にある水準点は5.2m、諫早門の外にあたる北門付近畑地の等高線は10mを測る。森岳城の占地する地形は南北に長く、北と南に河川を配し、東に近世に開墾された田町新田、南は港・商業地、北の中尾川流域には水田が広がっている。

#### 第2節 歷史的環境(第2図,図版1,巻頭写真)

森岳城周辺での考古学的な調査は礫石原遺跡(縄文晩期),稗田原遺跡(3縄文晩期・古代・中世),畑中遺跡(2縄文早期・晩期,古代,中世),一野遺跡(縄文前期,弥生,古墳,古代),松尾遺跡(古代,中世),大手浜遺跡(7縄文,古代〜近世)等があり,縄文〜古代・中世の複合遺跡が目立つ。

畑中遺跡(2)では中世の遺構群が検出され、出土遺物には龍泉窯青磁の鎬連弁碗や白磁碗、常滑壺口縁部、東播系須恵器片などが出土している。遺構は掘立柱建物群と方位を同じくして建物群を囲む堀が出土している。遺跡は河口付近に位置し、標高は5 m 前後を測る。

稗田原遺跡(3)は県道拡幅に伴う7次の発掘調査が行われており、龍泉窯青磁、口禿の白磁、碁笥底の青花皿などの他、東播系須恵器などが出土している。また、遺構としては掘立柱建物が多数検出されており、中世のものも含まれるのであろう。このような中世に関する考古学的成果は、対岸の島津氏が対外的に活発な時期であることから、島原氏の動向が注目される。

他には中尾川上流から供給された火砕流路と思われる痕跡も検出されており, 古代・中世における 雲仙岳災害が浮き彫りになりつつある。

中世の城・館として考えられる丸尾城跡(4)や小山館跡(5), 浜の城跡(6推定円内)など, 森岳城築城前史に関わる遺跡も存在する。特に浜の城跡については絵図などにその所在地が記され, 森岳城以前の中心地として期待されている。

近世から現在まで続く森岳城を中心とした町並みは以上のような前史をふまえて存在する。

#### 参考文献

島原市史編纂委員会 1976 『島原の歴史』藩政編 島原市役所

外山幹夫ほか 1980 『日本城郭大系』第 17 巻 長崎・佐賀 新人物往来社

長崎県教育委員会 1994 『長崎県遺跡地図ー島原市・南高来郡地区ー』長崎県文化財調査報告書第 111 集

島原市教育委員会 1994 『畑中遺跡』島原市教育委員会

川口洋平・宇土靖之 1999 『稗田原遺跡Ⅲ』長崎県教育委員会

川口洋平 2000 『稗田原遺跡IV』長崎県教育委員会

土橋啓介 2001 「島原城外郭遺構について」『長崎県の城郭・城館特集号』西海考古第3号 西海考古同人会



第2図 森岳城周辺の主要遺跡(S=1/25,000)

# 第3章 調査の概要

#### 第1節 内容範囲確認調査の概要と基本層序(第3・4図)

調査は体育館改築および同窓会会館建設予定地区に 28 箇所の調査坑を設けて実施された。調査面積は  $128\,\mathrm{m}^2$ 。調査区はあらかじめプールとセミナーハウスの外郭線を基準に南北  $80\mathrm{m}$ ,東西  $80\mathrm{m}$  の範囲に  $10\mathrm{m}$  四方のメッシュをかけ,南北にA~H,東西に  $2\sim9$  の記号を付した。実際の発掘作業は, $2\mathrm{m}\times2\mathrm{m}\times2\mathrm{m}\times4\mathrm{m}$  の調査坑を体育館部分に 24 箇所,同窓会会館部分には 4 箇所設けて実施した。

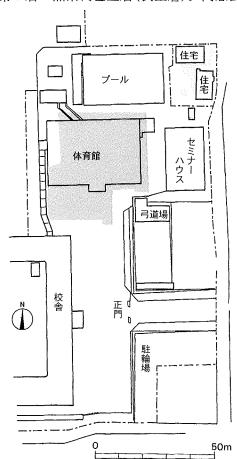
体育館予定地の調査では、11 箇所で石垣や建物基礎の石列が確認された。主なものを記すと、3 B 区では地山を円形に掘削した井戸状遺構が検出された。5 Cb 区では現地表より 80cm ほど掘り下げたところで石垣の裏込めを検出し、調査範囲を東へ2 m延長したところ、地表から2 mほどの深さで石垣遺構を確認できた。5 Da 区では建物の基礎と目される石垣が、高さ1.2m ほど遺存していることが判明した。重機で表土を掘削した6 C·6 D 区では,三ノ丸の外堀にあたる部分が確認された。

同窓会会館予定地の調査では、8 H 区で東西に延びる 2 列の石垣が確認されたほか、その他の調査 坑でも東西方向の石列が見つかっている。

遺物は近世陶磁器や瓦類が多数を占め、コンテナ4箱分、約3,000点が出土した。瓦の中には歴代 藩主松平家の家紋の入ったものもあった。

本遺跡の基本層序は次の通りで、大きく第 I 層~第 V 層に分けられる。

第 I 層: 黒茶褐色土層(表土層)。同窓会会館予定地で見られるパサパサの表土。



第3図 森岳城跡調査区位置図②(S=1/1.500)

第 I '層: 混礫灰褐色砂質土層(表土層)。体育館予定 地の表土で、建物の撹乱を受けた砂利層。

第Ⅱ層:混礫暗茶褐色土層(近世の遺物包含層)。緻密で締まりがよい。

第Ⅲ層:黒褐色土層。混礫で若干粘性がある。

第Ⅲ a 層: 黒灰褐色土層。 2~3 cm の厚さで薄く 堆積し、緻密で固く締まった硬化面をなす。広い範囲 には堆積せず、局所的にみられる程度である。

第Ⅲ b 層: 黒灰色土層(中世の遺物包含層)。微細な 白色軽石粒を多く含む火山灰層で、広範囲で堆積が見 られるが、第3層に似るため意識しないと区別し難い。

第Ⅲc層:黒褐色砂質土層。茶色味が強く、砂礫の 混入度は高い。

第17層:淡黄褐色砂質土層。地山の漸移層で、硬質。

第IV a層:明黃褐色粘質土層。

第IV b層:暗灰褐色粘質土層(潟土)。

第IV c 層: 淡灰色砂層(整地層か)。同窓会会館予定地の一部で確認される。

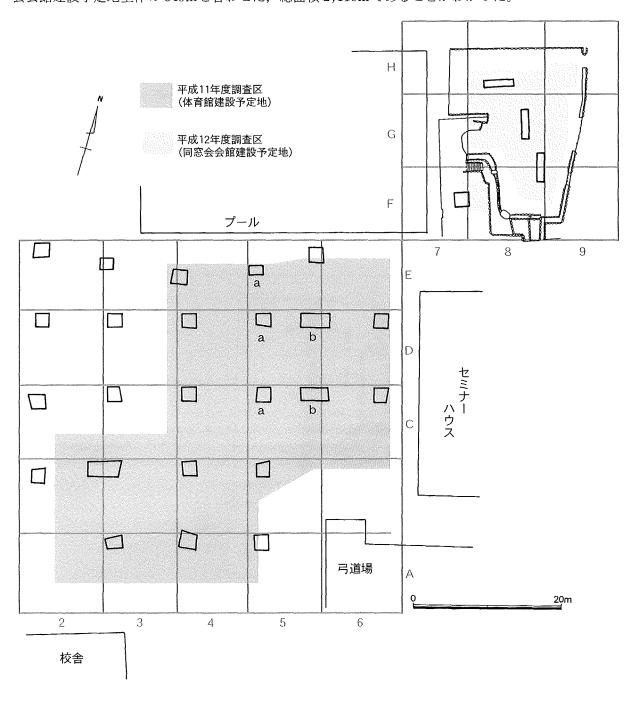
第 V 層: 淡褐色砂礫層(地山)。緻密で固く締まった砂礫の堆積層。

近世の遺物包含層である第 II 層は遺構上面でまんべんなくみられた。検出された遺構のほとんどが 第 II 層内にあり、上面は削平され、基底部の石材のみを残す状態でみつかっている。

第Ⅲ層の堆積は調査地点によってバラつきがあり、一様ではない。中世の遺物も出土していたが量的に少なく、当該期の遺構が存在することについてはこの段階では確認されていない。

第IV b 層の潟土は6 C 区・6 D 区で確認され、5 Cb 区~5 Eb 区でみつかった石垣と相まって、 三ノ丸を囲む堀石垣が南北約 40m にわたって遺存しているであろうと推測された。

結果として、西端の 2 区を除くほぼ全域で遺構や遺物を確認できたことから、本調査は避けられない見通しとなった。調査を必要とする範囲は、体育館改築予定地の約 7 割にあたる 1,570 ㎡と、同窓会会館建設予定地全体の 540 ㎡を合わせた、総面積 2,110 ㎡であることがわかった。



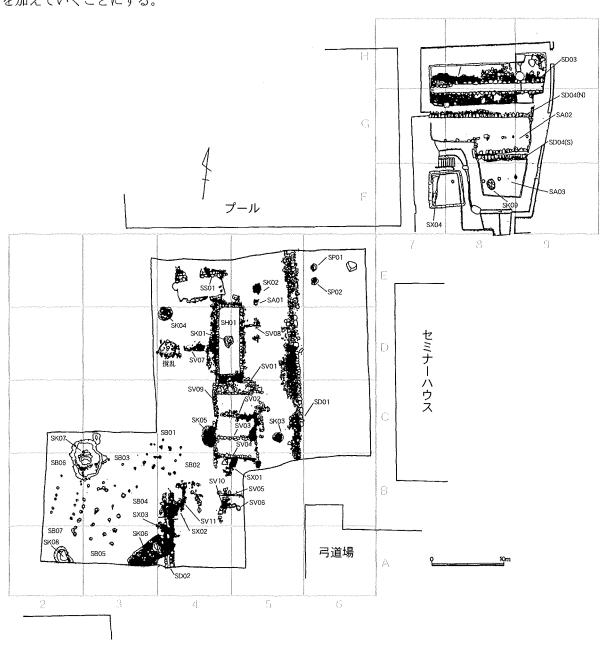
第4図 調査坑配置図(S=1/500)

## 第2節 平成11年度の調査概要と遺構 (第5・6図, 図版1・2)

調査は体育館建設予定地の1,570㎡を対象に実施した。調査区は森岳城の三ノ丸にあたり、かつては書院や広間、台所、庭園等があったと伝えられる城主の居住空間である。明治期には南高来郡役所がこの場所に置かれ、明治33年に旧制島原中学校、昭和5年には現在ある県立島原高等学校のゴシック式鉄筋コンクリート建物が建設されている。調査地点は学校敷地の一角にあたり、これまで多様な施設があったが昭和42年以降は体育館として利用されている。

調査は50m四方のメッシュで囲まれた範囲内で行われた。体育館の建物基礎が埋設されているため、 表土部分は重機で剥ぎ、その後は人力で掘り下げながら東側から順に調査を進めていった。

検出された遺構としては、堀跡1基、溝跡1基、石組み遺構1基、石敷き遺構1基、石列11基、礎石列1基、土坑8基、橋脚2基、中世の掘立柱建物跡7棟、不明遺構3基がある。以下、遺構ごと説明を加えていくことにする。



第5図 森岳城跡全体遺構配置図(S=1/500)

#### 堀跡(SD01)(第7図, 図版3)

調査区の5区で南北に走る石垣と裏込めを確認した。石垣前面の6区最下層に還元度の強い暗灰 褐色粘質土層(潟土)が堆積していたことから、三ノ丸の堀石垣と判断される。残存長は29.6mを測る。 堀石垣の主軸方位はN10°Wをとる。

石垣は根石と裏込めの栗石が部分的に遺存するだけで、築石部の石積みも高さ 1.3m を残すにすぎない。石垣南端の 4.7m と中央付近 10.5m は根石まで欠失しており、それらの部分については裏栗しか確認できなかった。石面から裏込めまでの幅は平均 1.5m を測る。

堀石垣は石面を東に向けて揃え置く。根石は石を安定させるために小礫を介するだけで、そのまま 据え置かれる。根石は粗割石を用いているのか石材の加工度は低く、大きさも様々で規格化はみられ ない。石の据え方も横に並べたり、控えが長かったりと定まっていない。

詳細に見ると, 北端の 2.2m は根石に 50 ~ 60cm の塊石を用い, 中央付近の 2.7m は根石は 30 ~ 40cm



第6図 平成11年度調査遺構配置図(S=1/300)

と小振りになり石の控えも長くとる、という具合である。

堀石垣の石積みを一連のものとするには築石の大きさや加工度にばらつきが多く,計画性や規格性の意識は薄いような感がある。一方,根石や石の据え方の異なる部分が,堀石垣修築の痕跡とすれば,2ないし3時期の改修は想定できそうである。

裏込めの栗石は基本的に拳大くらいのものが多く、時折人頭大以上のものも散見された。建物の基礎工作物で裏込めを一部欠損する部分もあり、部分的に栗石の範囲が広がっているのも、石垣崩壊時に荒らされたためかと思われる。

堀石垣の石積みの調査後,サブトレンチを入れて根石下の土層観察を行った。その結果,根石は黒色土層のうえに直接据え置かれ,その下には明黄褐色粘質土層,暗灰褐色粘質土層(潟土),淡褐色砂礫層(地山)の順で堆積していることが判明した。

明黄褐色粘質土層は根石の東側に幅 1.0m ほどの帯状をなして堆積している。石垣普請で地山を掘削・整形した際に、掘り残された部分であろうか。もしくは、石垣の基底部を構築する際に搬入されたものか判然としない。

堀の中の明黄褐色粘質土層を全て取り除いたところ,石垣前面で柱穴 18 個が検出された。柱穴は根石から  $0.3 \sim 1.0$ m の範囲にあり,いずれも径 20cm 前後,深さは 10cm 程度しかない。根石に近いところの柱穴は柱間 1.3m と 2.0m を測り,石垣と平行して直線的に配されているように思われる。それより離れたところの柱穴については柱間も不規則で, 3 個以上は連続しない。根石を配石する際に水杭を設けた跡とも想像できようが,現在のところ性格不明である。

次に、土層の堆積状況から三ノ丸東辺堀の埋没について検討してみたい。

6  $C \sim E$  区では森岳城三ノ丸を囲む堀が検出された。絵図では南と東とに堀がみられ、現在でも高低差 1.5m 程の石垣が残る。ここでは土層観察を行い、堀の埋没過程を復元していく。

調査前の標高は約16.4m を測り, $2A\sim6$  F区,7 F区・8 F区はほぼ水平に保たれ,旧体育館が建設されていた。第8 図上は旧体育館東端,セミナーハウスの前庭として利用されていた部分である。

第8図上のk12以上は第8図下のk5以上と同じ傾斜を示し、急激に埋められた状況が復元される。 また、k6上面からはコンクリート片が出土し、瓦片は1a内部から多数出土している。セミナーハウスは昭和58年、体育館建設は昭和42年の完成である。そのため、k12以上は近代の埋土である。

 $1a \cdot 2$  は瓦・角礫の出土が多く、5 C~E区の石垣付近では厚く堆積するが、石垣から離れるにつれて、徐々に薄く水平に堆積する。6 B 区東端では角礫が多く出土し、多くの瓦片も混在していた。調査区は離れるものの $7 \cdot 8$  F 区の1a と近似し、一連の堆積と考えられる。

第8図上では1a直下に堀底に溜まったと思われる3aが位置し、1a・2は堀の機能が停止した後に 堆積したものである。このため1a・2は三ノ丸が廃棄される明治初年頃の埋土と思われる。

3a は底に堆積した潟土と判断され、石垣根石下からのびた 3b は、土層面よりも北側の石垣では根石との間にⅢ b層(中世遺物包含層)を挟んで確認されることから、中世以前の遺物包含層と判断される。

4 は地山への漸移層(第IV層地山への漸移層)である。堀底地山は標高約 14m 付近を最深とし、3b・3c・4 などを一部残しながら、堀が掘り込まれ、底浚いされていたことが理解できる。

次に7・8F区で1a直下に確認された整地層(▲部分)を検討する。

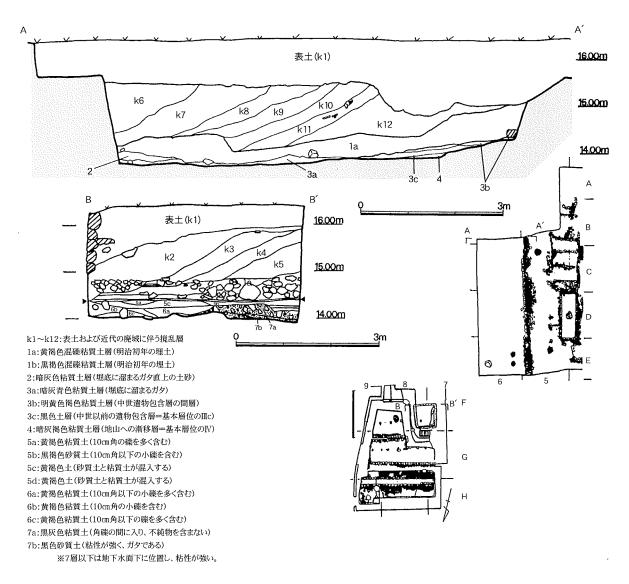
第7図 描跡 (SD01) (S=1/150)

堀内と思われる  $6 \text{ C} \sim \text{E}$  と違って堀の外に位置し、地山の標高は 14.2m で、整地層の標高は 14.5m を測る。堀底地山とのレベル差があり、遺物の出土は確認されない。

整地層下の5は西から東へ傾斜し,SX05(第8図)の埋設および整地層下面の確保を目的としたものと思われる。土層図の東端のSX05直上では水平方向の土層 $(5C\cdot D)$ が確認でき,人為的に埋められた感が強い。

さらに整地層上面の 1a からは瓦片・陶磁器片が多数出土し、それ以下では出土が確認されないことなどから、整地層は森岳城関連の遺構として考えられる。絵図では堀の東に平行して通路が描かれ、整地層は9 F 区以東では確認されないことから、道路遺構と判断しておきたい。

堀の規模については断言できる資料が得られなかったが、 $5 \, \text{C} \sim \text{E} \, \text{区}$ で確認された堀石垣の対面となる石垣は、道路遺構部分を除く $7 \, \text{F} \, \text{区西半の中に存在するであろう}$ 。そのため規模は南北長さ $30 \, \text{m}$ 以上、東西幅 $10 \, \text{m} \, \text{以} \, \text{L} \, 17 \, \text{m} \, \text{未満に復元される}$ 。



第8図 三ノ丸堀関連土層図(S=1/40)

#### **溝跡(SD02)**(第9図,図版3)

4 A~4 B区にかけて検出された石組の 溝跡である。残存長 10.4m, 幅約 30cm, 深 さ 30cm を測り, 主軸方位は N9°W をとる。 北側をコンクリートの建物基礎で, 南側 は調査区外のため総延長は確認できない。

石列の両側石は割石を横積みし、石面を 向かい合わせて整然と並べられている。途 中、土管埋設により側石が抜き取られてい る部分もあった。

石材は石面幅を 50cm 程度,高さを 30cm にほぼ揃えており,規格性がうかがえる。 西側の石列は石材の加工に斉一性がみえる のに対し,東側は高さは揃えながらも,長 さや幅はそれほど一定せず,配石も乱れて いる。詰石や介石のあり方も東側と西側で は若干異なっているようだ。東側の石列は 西側以上に補修の手が加えられていると思 われる。

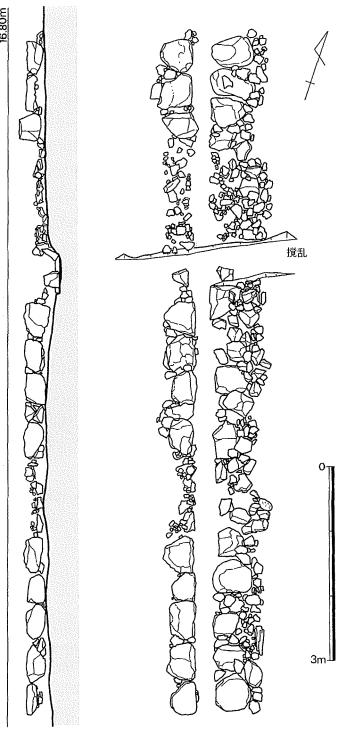
溝を構成する石列は上端の高さが揃えられていることから、蓋石を載せて暗渠としていた可能性も考えられよう。

ただし、溝底の状況は判然としない。検 出時は撹乱土層が入り込んでいたようで、 実際に水が流れていたり、排水溝として機 能していたかどうかは不明である。

#### 石組み遺構(SH01)

(第 10·11 図, 図版 3·4)

 $4~\mathrm{D}\sim5~\mathrm{D}$  区にかけて検出された箱形の 遺構である。地山を掘り下げ、四方の壁面



第9図 溝跡(SD02)(S=1/60)

には石垣を築く。平面プランは南北に細長い長方形を呈す。

長辺 9.5m, 短辺 2.85m, 遺存する深さは平均で  $1.3\sim1.4m$  を測り, 主軸方位は N7  $^{\circ}$  W をとる。

石材は長辺  $40 \sim 45$ cm,短辺  $30 \sim 35$ cm 大のものを多用し,ほぼ規格性がみられる。石の控えは  $40 \sim 50$ cm ほどで,それほど長くない。各壁面の基底石は天端の高さがほぼ水平になるように調節して置かれているのに対し,二段目以降は布目崩しのように,据え方が乱れている。これは東壁面で顕著に見られる。以下,壁面の築石についてそれぞれみていくことにする。

東壁面は南側基底部に主石を3個据え、これに従って石積みを行っているのがわかる。ここから2.7m ほどは横目地が通る整然とした布目積みが行われ、それより北になると縦目地が入り、急に石積みが乱れてくる。石の積み直しが行われたものと思われる。

北側も3.4m までは本来の石積みが残されているようだが、2~3段目の一部は積み直しの可能性もある。また、中間付近は石積みが乱れ、落とし積みが行われており、補修された可能性が高い。東壁面は全体としてみると、3つの異なる石積みが施されていることがうかがえる。

一方, 西壁面は北側 2.3m ほどに落とし積みがみられ, 石の積み直しがあった可能性が高い。それより南では2段目まで本来の石積みが残るものの, 3段目以降は積み替えられたと考えられる。南側の 1.2m 付近も全体に積み直しがあったようで,「八つ巻」のような特異な石積みが見られる。

15.20m

第10図 石組み遺構(SH01)内, 瓦出土状況(S=1/20)

北壁面では北西角の80cm ほどに積み直しの痕がみえ,北東隅は割と本来の石積みを残しているように思われる。

南壁面は南東角以外は石積みが大きく乱れており、積み直しの可能性は高い。その南東角の床面直上では丸瓦3枚が横に並べ置かれていた。瓦は玉縁を北側に向けた状態で出土している。(第10図)

各壁面とも基底部付近まで石の積み直しのあとがみえ、築造時の姿をとどめる部分は少ない。一方、 底面は出土した瓦がほぼ原位置を保っていたと考えると、石敷きや板敷きの可能性は低く、当初のま まの状態であったと推察される。

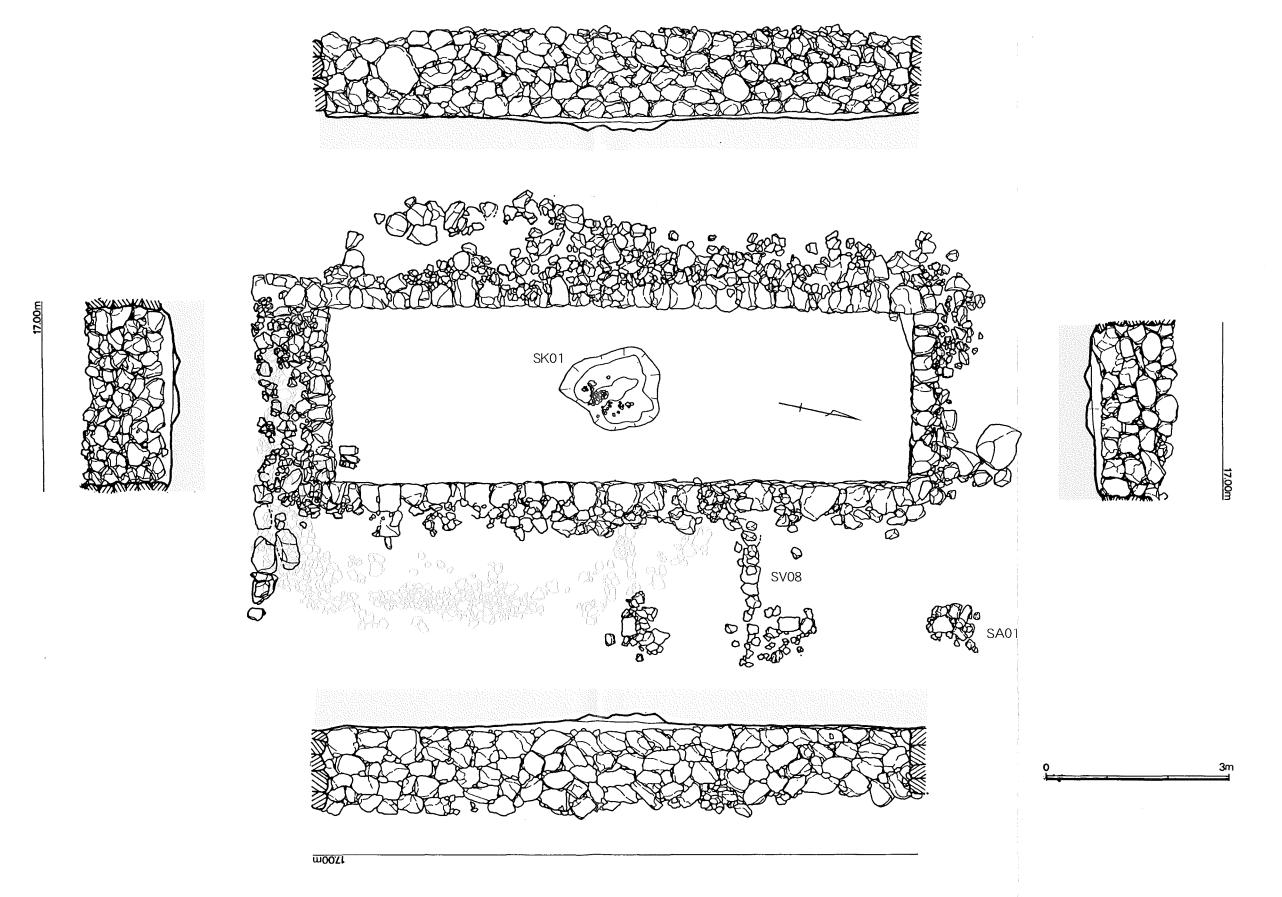
遺構の床面積は27㎡を測るが、底面ではこの瓦の他に出土遺物はない。1m 大の巨石2個が瓦の1~2m ほど北にみられたものの石組みを構成する石材ではなく、他所から運ばれたものか、あるいは廃棄時に投げ込まれたと考えた方が妥当であろう。

#### 礎石列(SA01) (第 11 図)

石組み遺構(SH01)の東に隣接して、5 D 区に3 個の礎石を確認した。礎石の間隔は約2.5m を測り、主軸方位はN8  $^{\circ}$  W をとる。

礎石に用いられた石は長辺が  $30\sim35$ cm, 短辺が  $25\sim30$ cm の長方形で,上面は平坦をなす。礎石上面はいずれも標高 15.8m 前後で,ほぼ同一レベルにあった。

礎石は SH01 と平行して、南北に連なる。ただし、礎石上面のレベルは SH01 の石垣天端より低い位置にあり、遺構に伴うものであるかは不明である。SH01 との先後関係についても、判別できなかった。 礎石の周囲  $0.7 \sim 1.0 \text{m}$  には人頭大から拳大の礫が集中し、礎石上面から $-15 \sim 20 \text{cm}$  の間に礫は詰められていた。礎石を据えるために  $0.8 \sim 1.0 \text{m}$  の楕円形ピットを掘って礫を詰め込んでいたと推測される。



第11図 石組み遺構(SH01), 礎石列(SA01), 石列(SV08)(S=1/60)

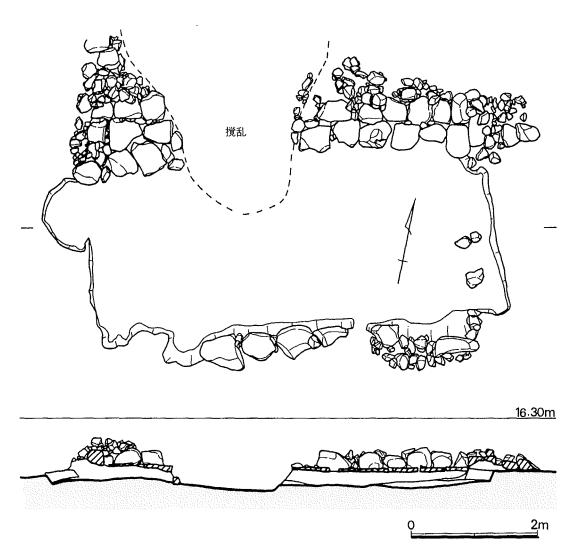
#### 石敷き遺構(SS01) (第12図, 図版4)

4 E 区で検出された遺構である。敷石部分や北側石垣の一部を建物基礎の撹乱により欠失するため、遺構規模は  $5.5 \text{m} \times 7.3 \text{m}$  までしか確認できなかった。ただし、北東隅と北西隅は遺存しており、長さは内法で 5.6 m、幅は内法で 3.3 m を測る。遺構の平面プランは長方形を呈すると思われる。主軸方位は 1.8 m とをとる。

低い石垣によって区画された内部は石が敷かれていたようで、敷石には  $40\text{cm} \times 50\text{cm}$ 、厚さ 5 cm ほどの平石が用いられている。

敷石に付随した石垣は1段分しか確認できなかった。石垣は石面を全て内面に向け、敷石を囲むようになっている。石垣に用いた石材は長辺  $40 \sim 50 \, \mathrm{cm}$ , 短辺  $30 \, \mathrm{cm}$  と大きさは概ね揃っているものの、据え方は不規則で、縦に置いたり、横に置いたりと統一されていない。石垣の上端が水平に通っていないことから、もうあと数段の石積みがあったと考えられる。北東隅の石垣には裏込めの栗石が比較的残っていた。

石敷きが施してある底の部分は、地山が 20cm 程度平坦に掘り下げられている。遺構築造に伴うものか、撹乱によるものかは不明であった。



第12図 石敷き遺構(SS01)(S=1/60)

#### 1号石列(SV01) (第13回, 図版5)

 $4C \cdot 4B \sim 5C \cdot 5B$  区にかけて、SH01 と主軸方位をちょうど 90° 異にした石列が 4 本検出され、北から順に SV01  $\sim$  SV04 と番号を付けた。以下、それぞれの石列について概要をみていくことにする。

SV01 は現存長は 5.0m を測り、遺存している高さは 60cm ほどである。主軸方位は N80° E で、石列は東西に走る。石面は南を向き、基底部には 60cm × 35cm ほどの石材を横におく。

基底部の石は据えられている。東側は基底部の石材を欠き、拳大の礫を不安定に積み上げていることから、後から継ぎ足されたのであろう。本来の石列を残すのは西から 2.8m までと考えられる。

2 段目の石積みは乱れており、構築当初からあったものとは言い難い。SH01 の南に隣接することから、SH01 の南壁石積みの修築時に手が加えられた可能性もある。

#### 2号石列(SV02) (第13回, 図版5)

SV01 との間隔は 3.3m を測る。主軸も SV01 と同じくし、平行して東西へのびる。石列の残存長は 4.7m、遺存している高さは 50cm を測り、石面は南を向ける。

基底部には 60cm × 35cm の大きめの石は1つだけで, 西から 2.2m までは人頭大くらいの礫を据えるなど, 石列としては不揃いの感がある。控えが非常に短く不安定であることから, 上に石を積むのは困難であろう。

SV01 と同様に、基底部の石は第 II 層の混礫暗茶褐色土層に置かれる。

#### 3号石列(SV03) (第13回, 図版5)

SV02 との間隔は 2.9m を測る。主軸を SV01・SV02 と同じくし、残存長は 5.0m、遺存する高さは 40cm を測る。石面は北を向き、SV02 とは向き合うようになる。

SV02 と SV03 の検出上面には別の集石列があり、東側部分でそれぞれの石列に取り付く格好になっていたようである。内部を区画する意図があったかどうかは不明。

基底部西側は石材の大きさが  $40 \sim 50$ cm  $\times 30 \sim 40$ cm と揃っているものの,それより東側では大きさも一様ではない。積み直しがあったものか。

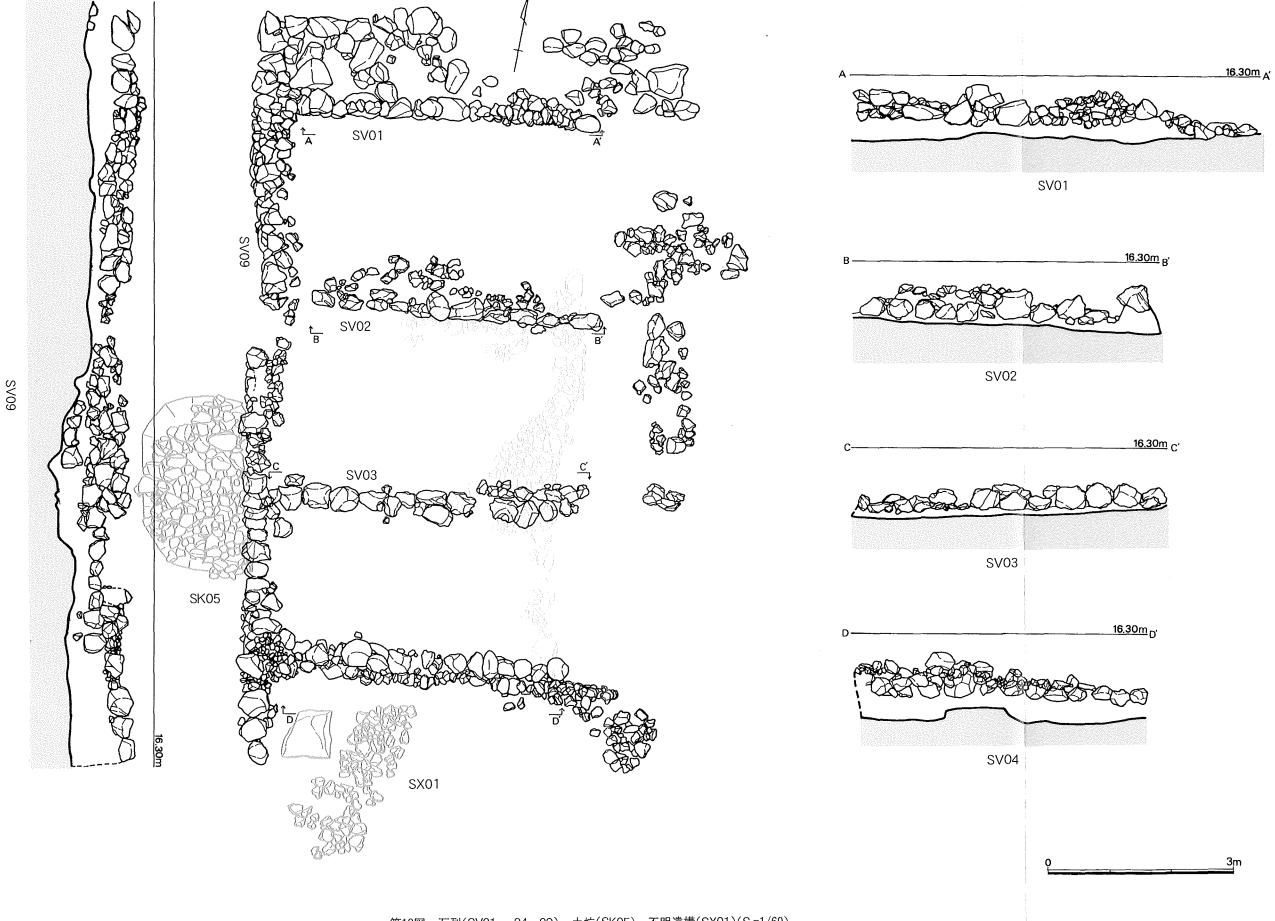
#### 4号石列(SV04) (第13図, 図版5)

SV03 との間隔は 3.2m を測る。主軸は SV01  $\sim$  SV03 と共通し、石列は平行に走る。残存長は 4.9m、遺存する高さは 60cm を測る。石面は南を向くと調査担当者は判断している。

石面に沿うように拳大の礫が施されているが、石列との関係は不明。

基底部には  $40 \sim 50$ cm 大の石材を用い,第 II 層の混礫暗茶褐色土層内に据えている。置き方は統一されていない。 2 段に石積みを行うところがあるものの,石の座りは不安定で,本来の置き方ではないのであろう。

以上,SV01~04まで主軸方位,残存長,残存高ともほぼ共通する。石面を揃える方向や石積みの 仕方等に若干の相違はあるものの,ほぼ同時期の築造と考えられよう。内部を隔壁で仕切る建物遺構 かとも思えるが判然としない。



#### 9号石列(SV09) (第13回, 図版5)

 $SV01\sim04$ の西端に接して南北に走る石列がある。石面は西に向き, 2 段ないし 3 段に石積みを行う。残存長は 12.3m,遺存する高さは最大で 80cm を測る。主軸は N13  $^{\circ}$  W をとり, $SV01\sim04$  とはほぼ直角に交わるようにみえる。

石積みには乱れがみられ、構築当初の姿をとどめているとは言い難い。石列は一直線にはならず、SV01とSV02、SV03とSV04の間が一部途切れ、ズレが生じている。詳細に見ると、北半分の石列は中央が孕み不安定で、南半分の石列は西側に20cmほどせり出す。

石列は基底部に  $40 \sim 50$ cm 大の石材を用い、控えを長くとって据えるのを基本としているようである。しかし、SV01 と SV02 間は石の大きさも不揃いで、石積みは粗雑である。補修された可能性が考えられる。また、SV04 以南の数石は基底部より 30cm ほど上面に据えられており、後から継ぎ足されたものと解釈されよう。

 $SV01 \sim SV04$  との先後関係であるが、ほぼ同時期の遺構ながら、接合部分の石積みの在り方から SV 09 が後出すると考えられる。

#### 5号石列(SV05)(第14回, 図版5)

SV04 の 5.0m 南に位置する。

主軸を $SV01 \sim 04$  とほぼ同一のN81° Eにとる。残存長は2.6m,遺存する高さは30cm ほどである。

石面は北に向くとみられ,人頭 大くらいの礫を横に置く。石の並 びは不揃いで規則性がない。

#### 6号石列(SV06)

(第14図, 図版5)

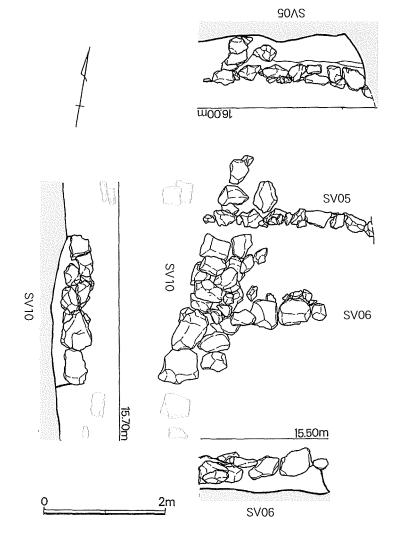
SV05の南に位置し、両者の間隔 は 1.9m を測る。現存長は 2.4m で、 東側は欠失し、遺存高は 50cm を測る。

主軸は N80°Eで, これも SV05 同様, SV01 ~ 04 に従う。

石面は南を向くと思われる。基 底部の石材は SV05 より大振りで,  $40\sim50$ cm 大の塊石を用い,石を 横にして据えられている。

#### 10 号石列(SV10)

(第14図, 図版5)

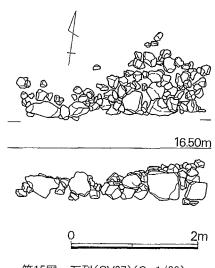


第14図 石列(SV05·06·10)(S=1/60)

SV05・SV06の西端に接して斜めに走る石列がある。主軸方 位はN9°Eで、残存長は3.8m、遺存高は50cmを測る。石積 みは2段目まで残る。

石列の石面は西を向き, 基底部の石は控えを長くとって縦に 置かれる。南端の基底石は大振りで、石も横置きするなどこの 石列内では特異であるが、下端は他とレベルを揃えている。同 時期の構築か、補修後の継ぎ足しであるかは判断し難い。

SV10 は SV09 とは主軸を異にし、中世期の遺構と考えられ る。また、SV05 は SV10 の上を横切るように配石しているこ とから、時期的に後出するといえる。SV06 は SV10 に接して 終結しており、同時期か先行するものであろう。



第15図 石列(SV07)(S=1/60)

#### 7号石列(SV07) (第 15 図)

4 D区にあり、SH01 の西側に位置する。石列西側を近現代の撹乱で欠失し全長は知り得ないが、 残存長 2.8m, 遺存高は 40cm を測る。東側は SH01 の裏込め部分に接して終結する。主軸方位は N81° Eで、SV01~06と共通する。

石面を南に向け、石積みは一部が2段目まで残っていた。基底部に据える石の大きさはまちまちで、 概ね横にして並べられている。裏込めは幅1mで,拳大の栗石が詰められている。石列が SH01 に規 定されていることから、これに付随する施設か、時期的に SH01 より先行する遺構であろう。

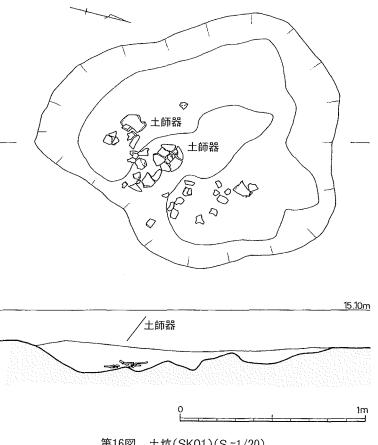
#### 8号石列(SV08) (第11図)

5 D 区にあり、SH01 の東側に 位置する。石列東側は SA01 で, 西側はSH01の裏込めに切られた ようになって検出された。主軸方 位はSV07と同じくし、残存長 2.1m を測る。

石面は北に向けるようで, 石積 みは2段目までを残す。石材の大 きさも SV07 とほぼ共通する。時 期的に SA01 や SH01 に先行する 遺構となると、SV07やSV01~ 06の築造もほぼ同様に考えた方 がよさそうである。

#### 1号土坑(SK01)

(第16図, 図版4)



第16図 土坑(SK01)(S=1/20)

土坑は $4 \text{ D} \sim 5 \text{ D}$  区にまたがる SH01 の床面中央にある。 基底面の検出作業中、地山を掘り込んだ土坑が確認された。 平面形は $1.6\text{m} \times 1.3\text{m}$  の不整形円をなし、深さは $15 \sim 20\text{cm}$  を測る。主軸は北北東である。

底面は起伏があり、レベルも一定しないことから、大小2つの土坑が重複関係にあったとものと推測される。西側の土坑が東側の土坑を切り合ったためにできたのであろう。

土坑内からは擂鉢と土師器の坏2~3個体分が出土した。 遺構の性格は、SH01の中央部に位置することから、築造に 際しての地鎮祭祀の跡と考えるのが妥当であろう。ただ SH01 は度々修築が行われていたようで、遺構がいつの時点で存在 したかについては検討する余地がある。

# E 16.00m

第17図 土坑(SK02)(S=1/40)

#### 2号土坑(SK02) (第17回, 図版5)

土坑内に大量の礫が充填された集石遺構である。5 E 区で確認された。土坑の平面形は菱形を呈し、一辺は 1.0m 前後、深さは20cm を測る。掘方は不明瞭で、底面中央が10cm 程窪む。

東辺と西辺の両側辺に拳よりやや大きめの石を並べ、両辺の間は小礫で埋め尽くす。小礫に混ざって瓦片が出土した。断面を観察すると、土坑の中央部に礫が厚く堆積するようになっている。中世の土坑かと思われる。

#### 3号土坑(SK03) (第18図, 図版5)

 $5~\mathrm{C}$  区で確認された土坑である。平面形は径  $1.3\sim1.5\mathrm{m}$  の不整円形をなす。内部には多くの礫が詰

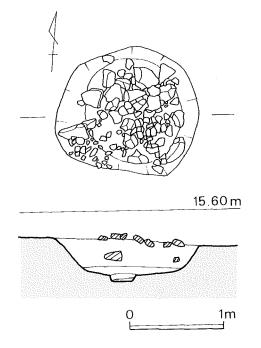
められていた。断面は逆台形状で、底面は二段掘りになっており、40cm×60cmの楕円形ピットが下部にある。底面までの深さは平均35cmで、土坑の北寄りにあるピットの深さは10cmを測る。

礫は下部にピットを有する北側に人頭大の礫が、南半分は小礫が配される。大きめの礫はピットに伴うものであろう。礫は土坑上面に多く、内部にまでは詰められていない。中世期に属する土坑であろう。

#### 4号土坑(SKO4) (第19回, 図版5)

4 D 区内で検出された土坑で、SK02 や SK03 と同様 に集石を持つ。掘り方はやや大きく、平面形は  $2.3m \times 1.8m$  の楕円形を呈す。

二段掘りになっており、底面にも  $1.3m \times 1.0m$  の精



第18図 土坑(SKO3)(S=1/40)

円形土坑があった。深さは一段目が 40cm, 二段目 までは 70cm を測る。

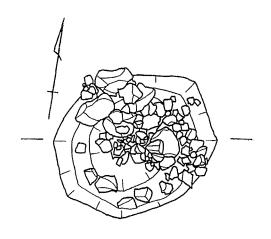
土坑内の礫はまばらで、北西側にある大振りの石 材は後から投げ込まれたような格好になっていた。 北東から東側には人頭大から拳大の礫がある。二段 目の土坑周縁部にも北西側を除き人頭大の礫が配さ れている。中世の土坑と推測している。

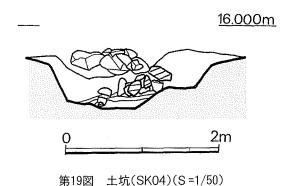
#### 5号土坑(SK05) (第20図, 図版6)

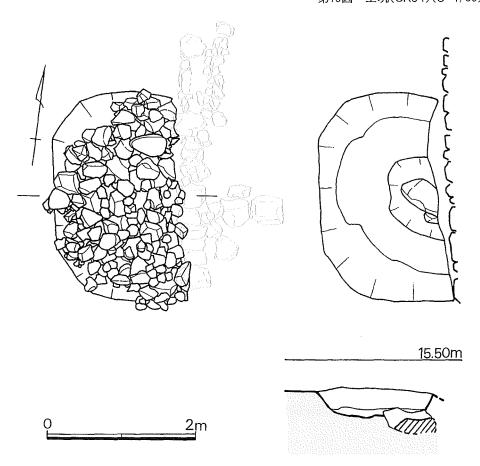
4 C区にあり、SV09 で遮断され完掘できていないが、平面形は隅丸長方形をなすと思われる。長径で 2.8m を測る。

土坑は二段掘りになっていて、二段目の底面には  $70\text{cm} \times 35\text{cm}$  の長方形の平石が置かれていた。深 さは 1 段目が 40cm で、二段目までは 60cm を測る。

内部は大小の礫が上面から底面まで密に充填されていた。遺構の性格は不明であるが, 時期的には中世に属するものと思われる。







第20図 土坑(SKO5)(S=1/50)

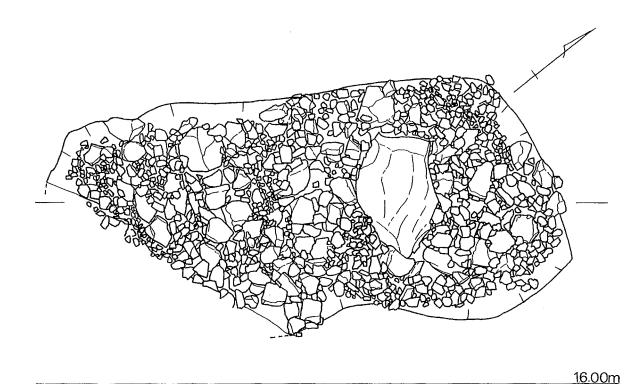
#### 6号土坑(SK06) (第21 図, 図版6)

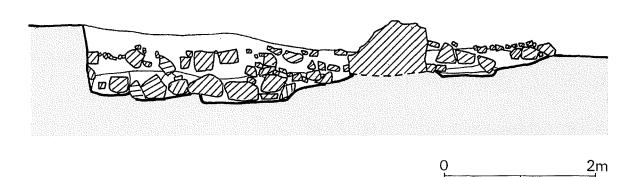
巨大な岩の周囲に大小の礫を多数詰め込んだ集石土坑で、3A~4A区で検出された。平面形は長 楕円形ないし不整長方形を呈す。確認できた長さは6.9m、幅3.2m、土坑最深部までは90cmを測る。 断面はすり鉢状で、南西部にいくにしたがって次第に深さを増すようだ。

底面は平坦ではなく、起伏があることから、その都度掘り返されていたと考えられる。当初、集石 は巨石周辺だけだったものが、次第に南西方向へ拡張されていったのではなかろうか。大きさの異な る礫の入り具合からすると、少なくとも3回は掘り直されたと想定される。

礫は土坑北側の巨石を破砕したもので、周りに穴を掘って砕石を埋め込んだ割石廃棄土坑であるとの見方をしていたが、表面観察では巨石の割石とは別種の石材や礫が多数を占めていた。大小様々な 礫がそれぞれまとまりをもって集められているようで、選別する意図があったかどうかは不明。

土地利用の際に障害となる巨石を破砕して廃棄したり、石垣用の割石採取のために用いられたものか。本遺構が SD02 に先行することは確実で、中世まで遡る可能性もある。





第21図 土坑(SK06)(S=1/50)

#### 7号土坑(SK07) (第22回, 図版6)

2 B~3 B区にかけて検出された遺構である。大量の砂で埋められていたことから、井戸跡と推察されていた。遺構の掘り方は長径 5.7m×短径 4.3m を測り、平面形は南北に長い不整楕円形をなす。

内部は二段に掘り下げられていた。一段目は底面が割と平坦で、深さは  $40 \sim 50$ cm を測る。二段目は 1.9m × 1.5m の東西に長い楕円形をなし、底面までの深さは 15cm を測る。掘り方の周囲は 70cm 幅で礫が取り巻き、北側は人頭大くらいの礫が、南側は拳大の礫が配されていた。

図では示されてないが、遺構の底面中央には直径1 m ほど土が灰褐色を呈する部分があった。礫は変色した部分を中心として径2 m の範囲には全く見られず、その外側を取り巻くように配されていた。

遺構は井戸の可能性が最も高いといえようが、周辺は湧き水が豊富で、上水は容易に得やすい所であり、井戸の必要性はないように思われる。また、遺構の最下層で水が染み出ることもなく、井戸としての機能を果たせたのか甚だ疑問である。よって、現時点では遺構の性格は判別し難く、不明としておきたい。周囲は近世遺構の空白地帯で、掘立柱建物跡群と同じ中世の遺構かと考えられる。

#### 8号土坑(SK08) (第22図)

調査区南西隅の2A区で確認された土坑で、掘立柱建物跡群の南側に位置する。全形を知り得ない ものの、長さ3.0m以上、幅1.9m、深さ20cmを測り、平面は楕円形をなすと思われる。

底面に2箇所, 礫の集中が見られた。それぞれ人頭大や拳大の礫8~10個で構成される。 SK07同様に性格は不明で, 掘立柱建物跡群に伴う時期の遺構であろうと考えられる。

#### 1号掘立柱建物跡(SB01)(第22·23 図, 第1表, 図版6)

4 B 区で確認された桁行 2 間, 梁行 1 間の狭長の建物である。実長では桁行 4.2m, 梁行 2.7m を測る。調査区では最も規模の小さな建物跡である。主軸の方位は N9°E で, 北~北北東を示す。 西側桁の中央は石が柱穴に対応する。柱穴の周囲や内部には小礫の混在がみられた。 柱穴の掘方は径 30~40cm で, 残存する深さは 30cm 前後である。覆土は黒色土を呈す。

#### **2号掘立柱建物跡(SBO2)**(第22·23 図, 第1表, 図版6)

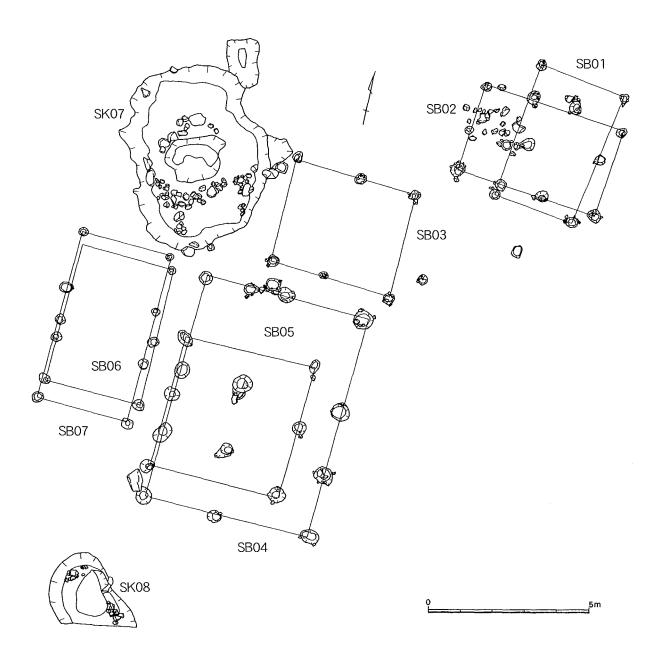
 $3 B \sim 4 B 区 の SB01$  と同じ場所にある、桁行 2 間、梁行 2 間の建物である。実長で桁行 4.5 m、梁行 2.7 m を測る。南北桁の柱間が離れているところがあり、建物の規模については検討を要する。

主軸の方位は N84  $^{\circ}$  W で、西~西北西を示す。SB01 と同規模の建物がほぼ 90 度回転していたような感がある。柱穴の掘方は概ね径 30  $\sim$  40cm で、残存する深さは  $10\sim$  60cm と一様ではない。

柱穴の覆土は黒色土を呈す。柱穴の底面に石を据えたものも幾つかあった。建物中央の梁には3つの柱穴がみられ、柱の据え替えが行われたことも考えられる。

#### 3号掘立柱建物跡(SB03)(第22·23 図, 第1表)

3 B 区にあり、SK07 の東に隣接する桁行 2 間、梁行 1 間の建物である。実長では桁行 3.6m、梁行 3.3m を測る。梁行を長くとるのが特徴か。柱穴の掘方は径  $30 \sim 40$ cm で、残存する深さは  $20 \sim 30$ cm ほどである。北西隅の柱穴は底面に石を据えてあった。覆土は黒茶灰色土をなす。



第22図 掘立柱建物跡全体図, 土坑(SK07·08)(S=1/100)

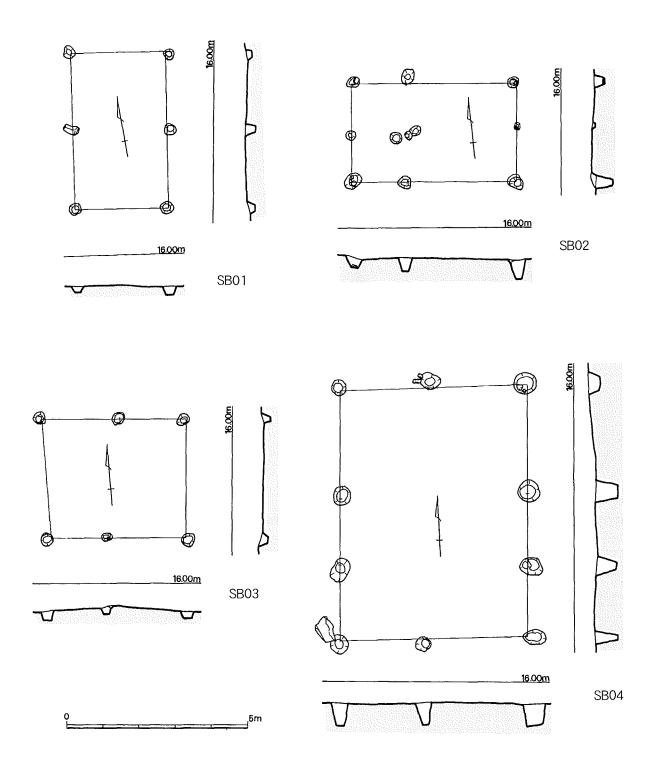
遺構番号	規模	方向	桁行		梁	行	方 位	生毒物	
退得街り	退冊甘ヶ	7	71 HJ	実 長	柱間寸法	実 長	柱間寸法	)) 1 <u>1</u> L	床面積
SB01	2間×1間	北	4.2m(14尺)	7尺・7尺	2.7m(9尺)	9尺	N 9°E	11.34m³	
SB02	2間×2間	西	4.5m(15尺)	10尺・5尺	2.7m(9尺)	4尺・5尺	N84°W	12. 15m²	
SB03	2間×1間	西	3.6m(12尺)	7尺・5尺	3.3m(11尺)	11尺	N85° W	12. 38m²	
SB04	3間×2間	北	6.9m(23尺)	7尺・6尺・10尺	5.1m(17尺)	8尺・9尺	N 3°E	35. 19m²	
SB05	2間×1間	北	4.2m(14尺)	7尺・7尺	4.2m(14尺)	14尺	N 3°E	17.64m²	
SB06	3間×1間	北	5.4m(18尺)	6尺・6尺・6尺	3.0m(10尺)	10尺	N 3°E	16. 20m²	
SB07	2間×1間	北	4.2m(14尺)	7尺・7尺	3.0m(10尺)	10尺	N 3°E	12.60m²	

第1表 掘立柱建物跡計測表

主軸の方位は N85 $^{\circ}$  W で,西~西北西を示す。SB02 と同主軸をもち,時期的に併存するものであろうか。ただし,梁行の長さや覆土等,異なる要素もあり,検討が必要である。

#### 4号掘立柱建物跡(SB04) (第22·23 図, 第1表, 図版6)

 $3~A\sim3~B$  で確認された、桁行 3 間、梁行 2 間の建物である。SB03 の南に隣接して建てられている。実長で桁行 6.9m、梁行 5.1m を測り、調査区では最も規模の大きい建物跡である。



第23図 掘立柱建物跡(SB01~04)(S=1/100)

柱穴の掘り方も径  $40\sim60$ cm と大きい。ただし,楕円形の柱穴が柱の抜き取り痕である可能性を考えると,本来の柱穴は 40cm 内外かと推察される。残存する柱穴の深さは  $30\sim70$ cm と一様ではない。覆土は黒色土であった。建物の主軸方位は N3°Eで,ほぼ磁北を示す。

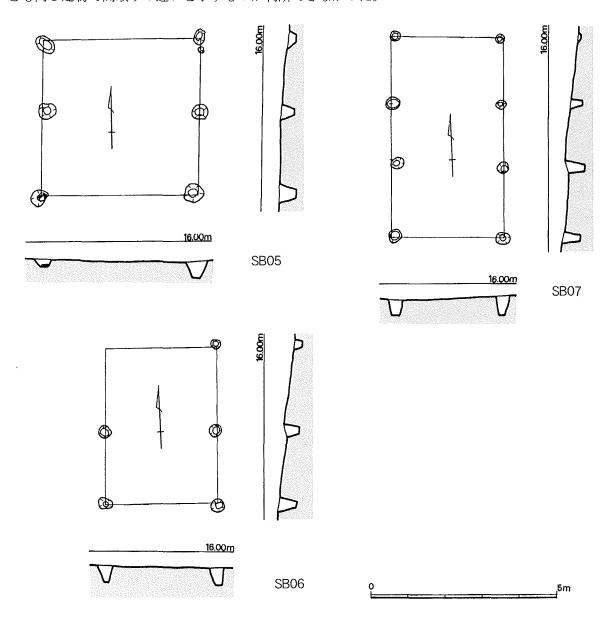
建物中央の桁方向には2つの柱穴があり、間仕切り用のものかと思われる。

# 5号掘立柱建物跡(SB05)(第22·24 図, 第1表, 図版6)

SB04 と同じ場所にある桁行 2 間,梁行 1 間の建物である。実長で桁行 4.2m,梁行 4.2m を測り,平面はほぼ正方形をなす。SB03 と同様に、梁行が長いのを特徴とする。

柱穴の掘り方は径  $40\sim50$ cm を測り、残存する深さは  $20\sim50$ cm と一様ではない。覆土は黒色土である。

主軸方位は N2  $^\circ$  50  $^\prime$  E で,SB04 と同一方向をもつ。SB05 と SB04 はそれぞれ別の建物跡か,それとも同じ建物で間取りの違いを示すものか判断できなかった。



第24図 掘立柱建物跡(SB05~07)(S=1/100)

#### 6号掘立柱建物跡(SB06) (第 22 · 24 図, 第 1 表, 図版 6)

2 B 区にあり、SK07 の南隣、SB04 の西隣に位置する。桁行 3 間、梁行 1 間の狭長の建物である。 実長では桁行 5.4m、梁行 3.0m を測る。桁行 3 間の建物にしては、規模はそれほど大きくない。SB03 と同様に、梁行が長いのを特徴とする。柱穴の掘り方は径  $30 \sim 40$ cm と、ほぼ平均化している。北側 で地山掘削が著しく、残存度に差はあるものの、深さは大方  $40 \sim 60$ cm である。覆土は黒色土を呈す。 主軸方位は  $N2^\circ$  50 ' E で、SB05 と同じ磁北を向く。

## 7号掘立柱建物跡(SB07) (第22·24 図, 第1表, 図版6)

2 B 区にあり、SB06 より南側に少し移動した場所に占地する。桁行 2 間、梁行 1 間の狭長の建物で、 実長では桁行 4.2m、梁行 3.0m を測る。SB03 とほぼ同規模で、梁行が長いのも共通する。

柱穴の掘り方は径  $30 \sim 40$ cm で、ほぼ平均化している。北東隅の柱穴は調査では確認できていない。 SB06 同様に地山掘削は北側で著しいが、深さは 50cm 前後残存していた。覆土は黒灰色土を呈する。

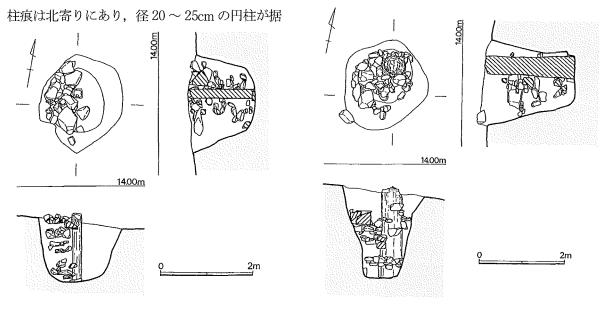
主軸方位は N3  $^{\circ}$  E で、SB05・SB06 と同じ磁北を示す。また、SB06 と SB07 は同地点で建て替えが行われた可能性が高いと推察される。

#### 1号橋脚(SP01) (第25回, 図版6)

柱穴は  $1.1 \text{m} \times 0.9 \text{m}$  の南北に長い楕円形を呈し、深さは  $60 \sim 70 \text{cm}$  を測る。断面は U字形をなす。柱痕は中央やや北寄りにあり、一辺約 10 cm の角柱を据えてあった。柱は建築部材の転用品と思われ、材質はスギである。柱材は上位に人頭大の礫を、中~下位は拳大の小礫を周囲に詰めて支えられている。SP01 の 5 m ほど東には 1.5 m 程の巨石があり、上面が平坦に加工されている。この石も礎石としての役割をもっていたのではと推測される。SP02 との柱間は約 1.9 m を測る。

# 2号橋脚(SP02) (第26図, 図版6)

柱穴は径1 m程の不整円形をなし、深さは1.1 mを測る。断面は逆台形状もしくはロート状をなす。



第25図 橋脚(SP01)(S=1/80)

第26図 橋脚(SP02)(S=1/80)

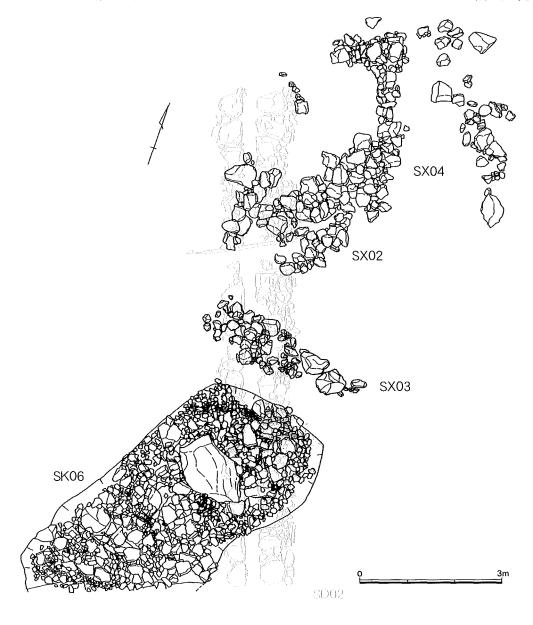
えられていた。材質はスギである。柱穴の中位には人頭大の礫が,下位には拳大の礫が詰められ,柱 材を支えている。

# 不明遺構(SX01 ~ 04) (第 13 · 27 図)

SX01 は SV04 の南にある集石列で、主軸を N10 $^\circ$ E にとる。現存長は 2.5m、幅は 1 m 前後を測る。 磔の大きさは不規則で、石面を揃えることもない。時期的に SV04 に先行し、森岳城築城以前の遺構 と判断される。

SX02 は小振りの石材を用い、石面を東と北に揃えた石列は鋭角的に連続する。残存長は東側で4.0m、北側は1.7mを測る。主軸方位は東側石列がN10°W、北側石列はN64°Eにとる。

 $SX03 \cdot SX04$  は不明集石遺構である。SX03 は残存長 4.5m,現存幅 1.5m を測り,SX02 に接して終結する。主軸は N36  $^{\circ}$  E をとる。SX04 は残存長 3.2m,残存幅 1.0m を測り,主軸を N110  $^{\circ}$  E にとる。ともに礫の大きさは不規則で,石面もあまり揃っていない。 $SX02 \cdot SX03$  は SD02 より時期的に先行する。



第27図 不明遺構(SX02~04)(S=1/80)

# 第3節 平成12年度の調査概要と遺構(第28回,回版2)

調査は同窓会会館建設予定地の540㎡を対象に実施した。前年度の調査区は三ノ丸の内側であったが、本年度は三ノ丸の外郭部分と想定される場所での調査である。当該地は平成10年まで2軒の木造家屋が建っていた場所で、それ以前にも池が造られていた等、構築物が幾度も建て替わっている。これらの基礎構造は、地下の遺構にも少なからず影響を及ぼしていたのではないかと推測された。

調査方法は昨年度同様、確認調査時のグリッド番号に倣って発掘区を設定し、順次掘り下げを行った。調査区内は 10m 毎に南北は  $F\sim H$ 、東西は  $7\sim 9$  の記号を付け、呼び倣わすようにした。

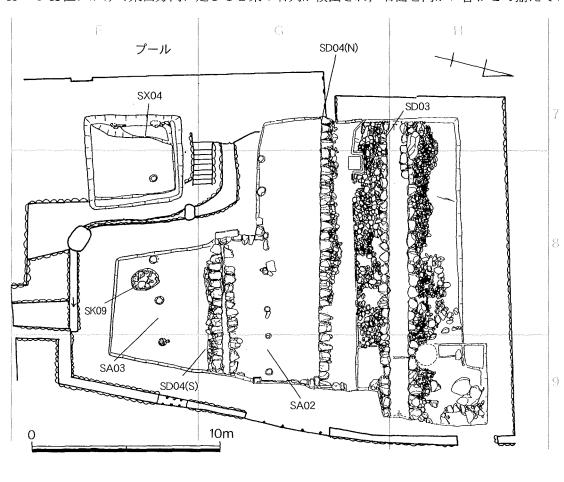
実際の発掘調査にあたっては表土部分を重機で除去し、南西隅の高台部分から掘り進めていった。 また、北東隅も先行して調査し、その後は埋め戻して重機等の置き場とした。

今回の調査で検出された遺構としては次のようなものがある。溝跡1基、堀跡1基、柱穴列2基、 土坑1基、不明遺構1基という内訳である。調査区の北側では比較的遺構や包含層の残りは良かった が、中央~南側では地山近くまで撹乱が及び、遺存状況は思わしくなかった。

以下、各遺構について説明を加えていくことにする。

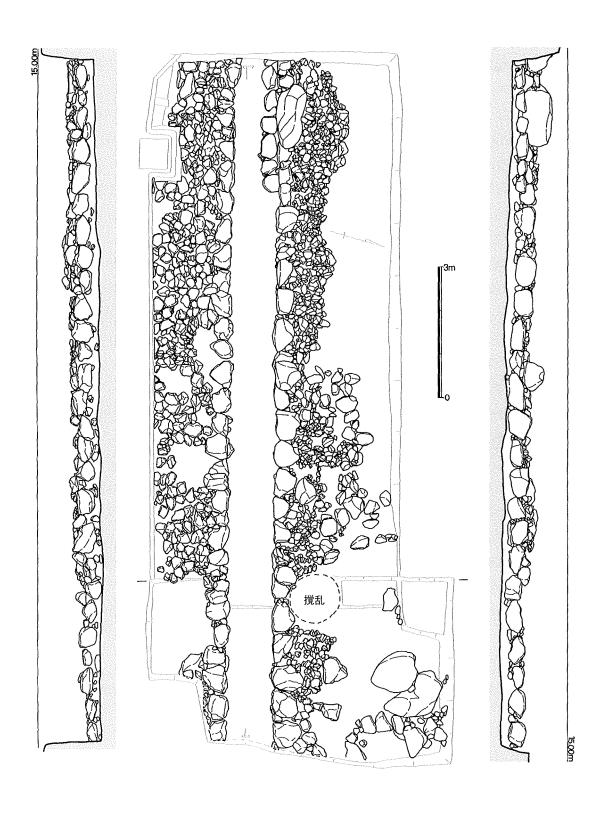
# **溝跡(SD03)**(第29図,図版7)

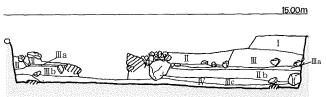
7 H~9 H区にかけて東西方向に延びる2条の石列が検出され、石面を向かい合わせて揃えている





第28図 平成12年度調査遺構配置図(S=1/200)





第29図 溝跡(SD03)(S=1/80)

ことから溝跡と判断した。検出長は 16.0m, 幅 1.0m, 深さ 60cm を測り, 主軸を N74°E にとる。 石列は概ね 2 段まで遺存していた。石は石面を内に向け横方向に整然と並べ置かれ, 控えは短い。 基底部は石の間に小礫を介して石の座りをよくするとともに, 上端が水平になるよう高さを調整している。石材の加工度は SV04 ほど高くないものの, 概ね 60cm 前後で揃えられているようだ。石列の 裏込めは幅 1.3m ほどあり,拳大の栗石が第Ⅲ層に詰められていた。積石はあまり高いものではなかったように思われる。

基底部の石は第Ⅲ層の黒褐色土層を掘り込んだ上に据えられ、溝底は砂礫層が堆積していることも 判明した。溝の埋土からは砂礫に混じって軒平瓦や軒丸瓦が出土した。潟土やシルト層がみられない ことから、排水溝というよりは清流を流していたのであろう。

北側石列の西端では、長さ 1.5m、幅 60cm、高さ 70cm の巨石を横長に用いる部分が見られた。控えも短いため、この部分だけは裏込めが厚くなっている。この巨石の前面に取り付くように別の石列があり、石段状になっている。石段は 1 段で、検出幅は 3.1m、踏幅は 40cm、蹴上高は 20cm を測る。石段の石面はそれほど揃っていない。石段には上面が平らな石材が 7 個 +  $\alpha$  使用されており、洗い場等に使用する目的であったのか不明である。

一方,南側石列は東端から3.8mまで,後世の撹乱を受けて配石が乱れている。

南側石列の裏込めは北側のそれとは異なり、人頭大の栗石が詰められる。裏込めの幅は 1.8m ほどあるが、栗石の密度はそれほど高くない。

裏込めの栗石も石面を南に向けて列をなす部分が見られた。複数回にわたって栗石を詰めていったのであろうか。あるいは北側石列と南側石列とでは微妙に築造時期が異なることも考えられる。最終的に2つの石列が溝として機能したことも視野に入れる必要があろう。そうすれば、北側石列西端の石段も別の用途が考えられそうである。

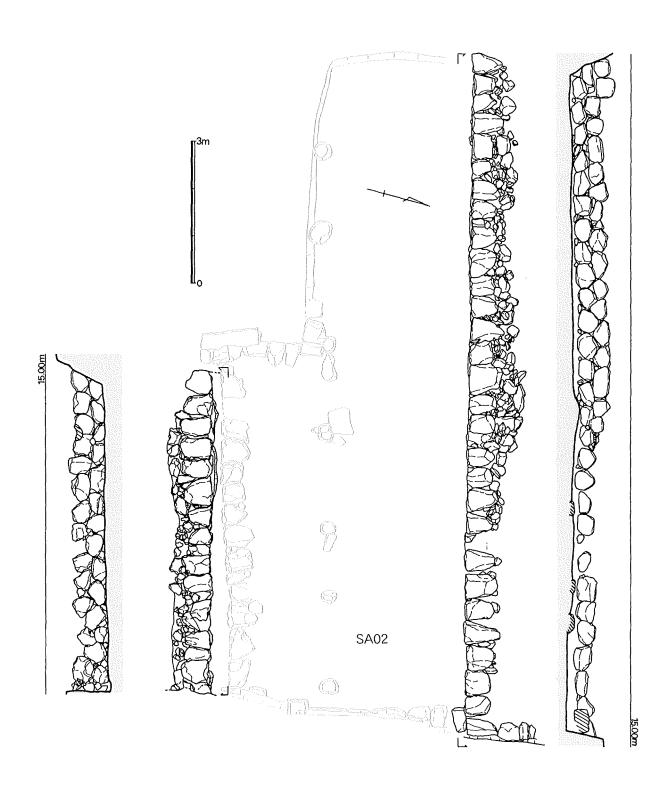
石列の北側には第Ⅲ層の良好な堆積がみられた。ただし一様ではなく、部分的に硬化面があった。 硬化面は厚さ3 cm 程度で、黒色土に微細な軽石の白い粒子が混在した火山灰と判断される。第Ⅲ層 の硬化面上層からは、青磁片や胎土目唐津等が出土しているものの、下層では遺物の出土はなかった。

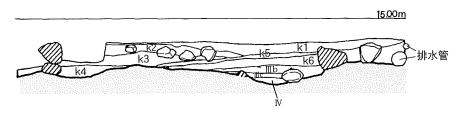
## 堀跡(SD04) (第30図, 図版7·8)

7 G ~ 9 G 区の北で東西に走る石垣を検出した。石積みを一部 3 段まで残していたため堀石垣と判断し、堀跡とした。検出長は 14.6m、遺存する高さは最大で 90cm を測る。石面を南に向け、主軸は N75° E にとる。石材には小面を 40cm × 50cm、控えを 60 ~ 70cm に揃えた加工石を用いている。

石積みは横目地が通る布目積みで、小面は端持ちで合わせている。石の控えは長く、石尻には栗石が詰められる。撹乱の著しかった東側では基底部の石しか遺存していなかった。裏込めの厚みもそれほどなく、あまり高い石垣ではなかったと推測される。

南側は2段の石積みを残す石垣で、検出長7.0m、遺存高さは65cmを測る。小面は北に向き、北側石垣と向き合うようになっている。石材はほぼ規格化された加工石を用い、主軸方位はN75°Eをとる。石積みも横目地が通り、石面の合端は端持ちで合わせていた。基底石は上端を揃えるため地山の一部を浅く掘り下げ、若干整形を施してから据えられている。北側と共通する要素が多く、同時期の構築と思われる。両石列の間隔は5.4mを測り、18尺となる。





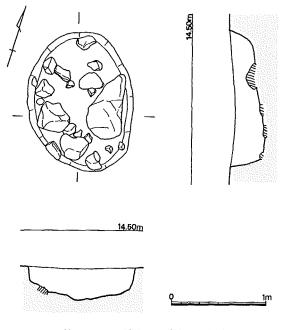
第30図 堀跡(SD04)(S=1/80)

調査当初は南側石列と向かい合うもう一つの石列があり、3条の石列の関係に頭を悩ませた。この石列は石面を南に揃え、石材も同様のものであった。両石垣間は幅40cmを測る。ただ、石積みが1段しかなく、裏込めを持たないことや基底部の石の据え方も不安定で違和感をもっていた。

調査が進行するにしたがい、東側の石面に「タタキ」とよばれる塗り壁の痕跡が残ることや、石尻の部分に近現代の遺物が混入するなど、明治期以降に手が加えられたものであることが判明した。現在南側へ迂回させている湧水の導水路か、水利施設に係わる遺構と思われる。

南北石垣間の土層を観察したところ、基底石の上端まで撹乱を受け、その直下の土層でも近現代の 遺物や板材が混入していることがわかった。一部に瓦や陶磁器類がまとまって出土したが、遺物は 18 世紀代のものがほとんどであった。

最下層には潟土が堆積し、その下は地山の砂礫層となる。潟土からは瓦類に混ざって彰州窯系の大 皿片が出土したものの、比較的新しい遺物も混在していた。地山上面では出土遺物はほとんどない。



第31図 土坑(SK09)(S=1/40)

南側石垣付近は最近まで掘り返されていたことが明らかで、時期的に古くは遡り得ない。北側石垣もほぼ同時期の構築である可能性が高く、SD04はSD03に後出する遺構といえる。

# 9号土坑(SK09)(第31図, 図版8)

8 F 区の黒色土層内に掘り込まれていた遺構である。 覆土は淡灰褐色砂質土をなす。

平面形は不整形な楕円形を呈し、長径 1.5m, 短径 1.1m, 深さ 30cm を測る。主軸方位は N26°W をとる。掘り込みは垂直に近く、断面は U 字形をなす。底面は平坦ではなく、かなり起伏があった。土坑内部からは瓦片が大量に出土し、底には礫もみられた。廃棄土坑かと思われる。

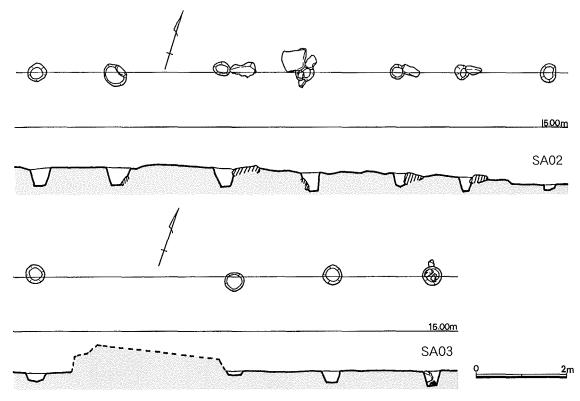
### 柱穴列(SA02) (第 32 図, 図版 7)

8 G ~ 9 G 区の SD04 内で確認された。柱穴は7個あり、いずれも礫混じりの硬い地山面に掘り込まれ、東西方向へ一直線に並ぶ。検出長は11.28m で、柱穴は東端の1つを除き、径 30 ~ 40cm、深さ 30 ~ 40cm を測る。主軸方位はN74°Eをとり、SD03 や SD04 と軸線が共通する。

柱間は東側から順に、1.8m(6 R)、1.5m(5 R)、2.0m(6 R 6 寸)、1.8m(6 R)、2.4m(8 R)、1.8m(6 R)と様々で、一定しない。

### 柱穴列(SA03) (第 32 図, 図版 8)

8 F ~ 9 F 区にかけての SD04 南側で,第III層の黒色土層に掘り込まれた 4 個の柱穴を確認した。 柱穴は東西方向の直線上に並び,検出長は 8.7m を測る。柱穴の覆土は淡灰褐色砂質土であった。柱穴は径 40cm,深さ 20cm を測り,主軸方位は N71 ° E をとる。



第32図 柱穴列(SA02·03)(S=1/80)

柱間は東側から2間目までが各 $2.1m(7\mbox{R})$ を採り、 $3間目は4.5m(15\mbox{R})$ となる。ただし、 $3間目の柱間は現在の水路部分にあたり調査不能で、本来ならここには柱穴が想定される。そうであれば、柱間は全て<math>2.1m(7\mbox{R})$ で揃うことになる。東端の柱穴内ではほぼ完形の丸瓦が礫とともに出土した。柱に沿わせるようにしていたものか。西側の柱穴は掘り込みが浅かった。

SA02 と SA03 はそれぞれ主軸方位が若干異なり、柱穴が対応する関係にないことから、別々の遺構と考えたほうがよさそうである。

## 不明遺構(SX05)(第33図,図版8)

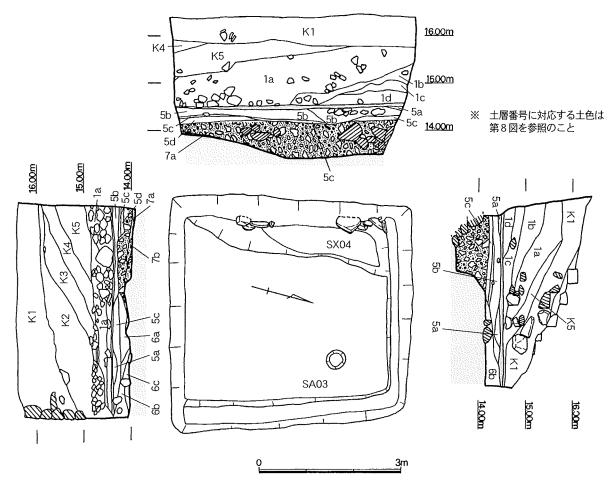
7 F 区西側の精査で検出された遺構である。遺構の一部を確認しただけで、全形を知れない。磁北 に沿って南北に伸びるようであるが不明遺構とした。

遺構は地山を直に掘り込み、断面はU字形をなす。深さは80cmを測る。内部には拳大の礫が大量に詰められていたものの、遺物の出土はなかった。遺構上面は礫が多数混在していたが下にいくにしたがって礫は少なくなり、底面では黒茶色粘質のシルト層が堆積していた。この一帯は湧水のあるところとして知られ、この遺構も水を流す暗渠のような施設であろうかと推測している。

#### 7F~8F区(第33回, 図版8)

調査区の中では他よりも地表面が 1.5m ほど上にあり、石面を東に揃えた 6~7段の石垣を残していたことから、当初は遺構検出の可能性が高いと期待されていた場所である。本調査では確認調査時の調査坑南壁を利用し、土層観察を行いながら慎重に掘り進めた。

土を徐々に掘り下げると、現在露見している石垣の裏込めはなく、ガラス瓶など新しい遺物が混入



第33図 7F~8F区遺構配置図,柱穴列(SAO3),不明遺構(SXO5)(S=1/80)

する客土であることが判明した。このことにより三ノ丸の遺構ではないことが確認され、石垣を取り 除いて地下の遺構を探る調査へと移行した。

 $7 F \sim 8 F$  区全体を掘り下げると北西側から南東側にかけて土層の傾斜がみられ、SD01 の土層堆積とよく似た状況があらわれた。黄色粘質土層は北東隅から南東方向に広がり、その外側には拳大から人頭大の礫も広がるなど、一気に埋められた様子がうかがえる。埋没時期は SD01 とほぼ同じなのであろう。

礫を除去したところ、整地層かと思われる灰色砂層が一面にあらわれた。SD01 には整地層の砂層が みられないことから、この部分だけ一時期利用されていたか、遺構廃絶に伴って砂を敷き詰めたと推 測する。

平成12年度調査区全体から遺構をみると、北側で遺構の残りが良く、南にいくにしたがって遺存状況は悪くなっていく。撹乱も地中深くまで及び、遺構に伴う遺物は皆無に等しかった。遺構の時期決定の決め手になる資料も得られておらず、各遺構の存続期間等は不明である。

主軸方位をほぼ同じくする SD03 と SD04, SA02, SA03 でさえ、積石や柱間寸法等に相異がみられ、時期差があることは明白である。少なくとも 2 ないし 3 時期の遺構変遷はあると考えられ、これについては第 4 章のなかで再度検討していきたい。

# 第4節 出土遺物

## 1 土器・陶磁器類

## 土坑(SK01)出土遺物(1~4)(第34図, 図版10)

1~4は土師器の杯である。極めて薄いつくりで製作技法が共通している。1は口径13.8cm,底径6.8cm,器高2.6cmを測り、内外面とも口縁部から体部にかけて白っぽい肌色、見込と底部外面は煤色状に暗灰色を呈する。胎土は細いが、少量ながら石英・長石・雲母が混じる。焼成は良好で、堅緻に焼け、叩くと乾いた音がする。見込、体部、口縁部にはロクロ水挽きの痕がのこり、底部は丁寧にヘラケズリされている。見込外周には沈線が巡る。2は口径13.8cm,底径7.0cm,器高2.8cmを測り、1とほぼ同じ法量で、成形上の特徴も1と同様である。3は口径12.0cm,器高2.2cmで、丸底のため底部と体部の境が明瞭でない。成形、胎土に関しては1・2に共通するが、法量が小さいこと、底部を丸くヘラケズリすること、及び底部が黒化せず白いことにおいて異なる。4は口径12.2cm,器高2.6cmで、丸底のためやはり底部と体部の境は明瞭でない。特徴はすべて3に共通する。

 $1 \sim 4$ の類例は諫早の沖城<sup>(1)</sup>、大村の玖島城<sup>(2)</sup>で出土している。地域的な偏りから、この地方のいずれかに生産地があると推測される。また、瀟洒な特徴から京都系土師器の影響も考えられ、複数の研究者にその是非を質問したが、様々な意見があり<sup>(3)</sup>確たる傍証は得られなかった。今後の出土状況の把握と継続した検討が必要であろう。

## 2·3区出土遺物(5~47) (第 34~36 図, 図版 10~12·14)

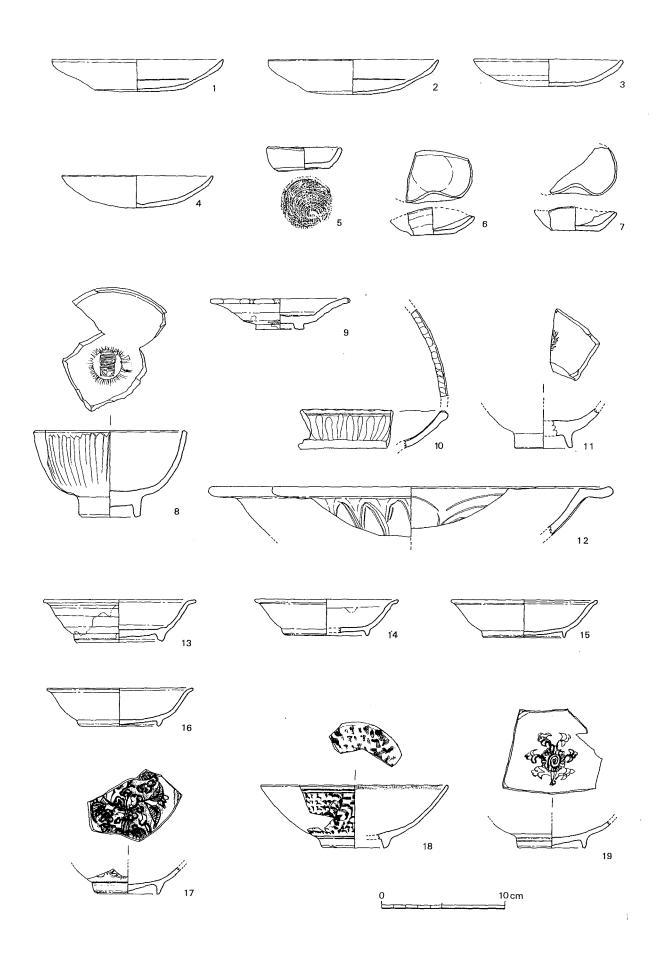
出土層位はことわりがない限り $\square$ 層からの出土である。5は3区から出土した土師 $\square$ で体部から口縁部にかけて逆ハの字状に立ち上がる。茶褐色で砂粒を含む。 $6\cdot 7$ は両側をから圧力を加えた土師 $\square$ で成形技法,胎土,焼成は $1\sim 4$ の杯に共通している。底部外面が黒化している。

8は青磁碗で3区から出土した。貫入の多いガラス質の淡緑色釉がかかる。高台内は露胎,見込には文字と周囲にお日様のような文様がスタンプされる。体部外面には細い蓮弁が線刻されるいわゆる細蓮弁文碗(4)である。胎土は白灰色で、焼成はやや甘い。9は青磁輪花皿で3区から出土した。貫入の多い淡青緑灰色がかかる。畳付けから高台内と見込が露胎となっている。胎土は暗灰色を呈し、やや粗い。10は青磁稜花皿で3区から出土した。ガラス質の暗緑色釉がかかり、胎土は精良で灰色を呈す。口縁部は端部上面が連続してヘラ彫りされ、稜花状となる。体部内面は、蓮弁状にヘラ彫りされる。11は青磁碗で3区から出土した。貫入の多いガラス質の淡青緑色釉がかかる。高台内は露胎で、見込に放射状のスタンプが認められる。8と同類の可能性もある。12は青磁盤で3区から出土した。ガラス質の暗緑色釉がかかる。体部外面には蓮弁、内面には円弧状の文様がヘラ彫りされる。

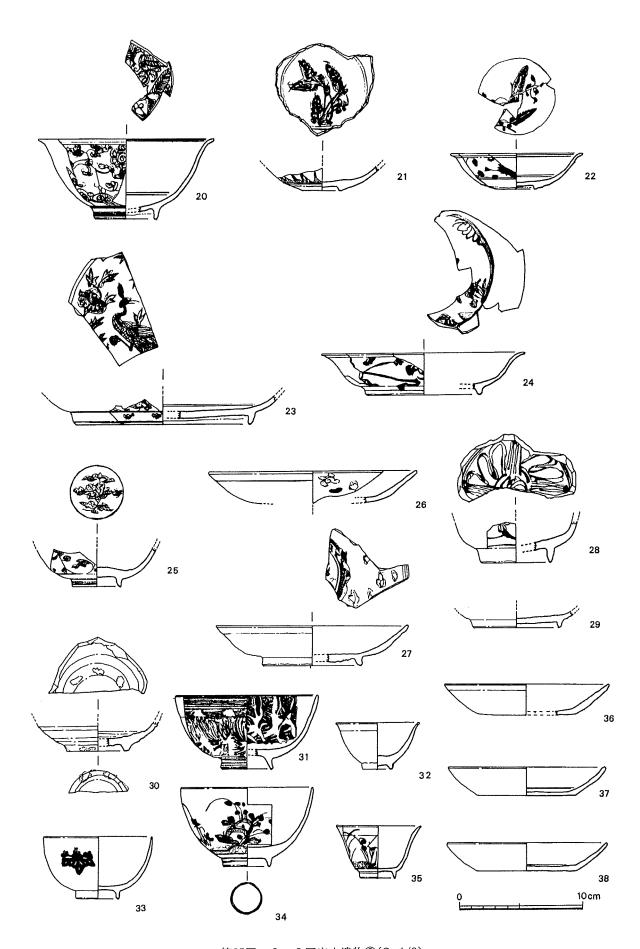
 $13 \sim 16$  は白磁皿で3区から出土した。半光沢の乳白色釉がかかり、畳付けが露胎となっている。小野正敏分類 $^{(5)}$ の白磁皿 C 群に相当し、氏の年代観では 16 世紀代を中心に位置づけられている。

17~19 は青花碗で17 は3区、18・19 は2~3区から出土した。いずれも見込が丸く窪み、畳付け露胎の高台がやや内傾して付く。小野分類の青花(染付)碗 C 群に相当し、16 世紀前葉から中葉を中心に位置づけられている。

20 は青花碗で3区から出土した。口縁部は外反し、畳付露胎の高台がやや内傾して付く。小野分類の青花(染付)碗B群に相当し、15世紀前葉から中葉を中心に位置づけられている。



第34図 土坑(SK01)出土遺物(1~7), 2·3区出土遺物①(S=1/3)



第35図 2·3区出土遺物②(S=1/3)

21 は青花皿で2区から出土した。底部は碁笥底で、畳付けが露胎となっている。小野分類の青花皿 C 群に相当する。22 は青花皿で3区から出土した。底部碁笥底で、畳付けが露胎となっている。小野分類青花(染付)皿 C 群と考えられるが、口縁部が外反している。皿 C 群は、16 世紀前葉から中葉に位置づけられている。

23 は青花皿で3区石列4(SV04)から出土した。畳付けが露胎であるが、高台外面に葉状の文様が描かれる。やや厚いつくりで、胎土は灰白色でやや粗く黒色粒を含んでいる。24 は青花皿で3区から出土した。口縁部が外反し、畳付けが露胎で砂が付着している。小野分類青花(染付)皿B2群に相当すると考えられるが、呉須の発色がやや悪い。

25 は青花碗で3区から出土した。乳白色釉がかかり、呉須が滲んで発色する。畳付けが露胎で砂が付着している。器肉は厚く粗製の磁器質で、見込の周囲に段がつき、饅頭心風になる。森毅分類 F 1 に相当する<sup>(6)</sup>。

26 はいわゆる呉須赤絵の皿で3区から出土した。白濁釉が全面に厚くかかり、体外面下部に砂が付着している。内面には、赤と緑で草花文が描かれる。胎土は粗製の磁器質で灰白色を呈し、黒色粒を含む。2次的に火を受けている。27 も呉須赤絵の皿で、3区から出土した。畳付けに砂が付着しており、その他の特徴には26と共通している。

28 は青花碗で3 区から出土した。厚い粗製の磁器質で、畳付けを除き濁った灰色釉がかかる。呉須の発色も悪く、見込に花文を描く。漳州窯系のものであろう。

29 は青釉皿で3区から出土した。内面から高台外面にかけて鮮やかなコバルトブルーの青釉がかかり、高台内には半透明の黄色釉が薄くかかる。器肉は粗製の磁器質で灰色を呈し、黒色粒を含む。2次的に火を受けている。

30 は韓国産の杯で3区の石列7(SV07)から出土した。緑灰色釉が全面にかかり、畳付けと見込に目跡がのこる。胎土は陶質で灰色を呈し、黒色粒を含む。

31 は肥前陶器碗で3区から出土した。チョコレート色の褐釉がかかり、乳白色の刷毛目文が化粧掛けされる。胎土は暗黒灰色で精良、焼成も良好である。現川焼である可能性が高い。

32 は肥前の白磁小杯で3区から出土した。乳白色釉がかかり、畳付けから高台内が露胎となっている。胎土は白灰色で黒色粒を含み、焼成はふつうである。

33 は肥前染付碗で3区から出土した。貫入の多い白色釉がかかり、体下部にコンニャク印判で桐文が3箇所スタンプされる。胎土は白色精良で焼成はふつうである。34 も肥前染付碗で3区から出土した。畳付け露胎で体部に梅樹文を描く。35 は、肥前染付小杯で2区から出土した。畳付け露胎で草花文を描く。

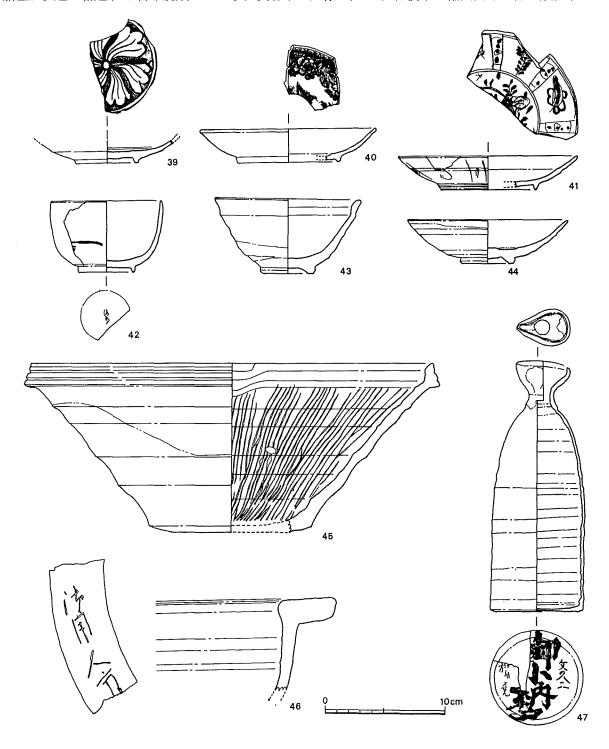
36~38 は土師質土器の杯である。36 は口径13.4cm,底径8.0cm,器高2.5cmで3区から出土した。器表は肌色を呈すが,底部外面と見込は黒灰色となっている。胎土は精良であるが細かい雲母粒を含む。風化のためか見込の沈線は認められない。37 は口径12.8cm,底径7.8cm,器高2.3cmで3区から出土した。器表はやや暗い肌色で見込みと底部が黒灰色となっている。胎土精良で雲母粒を含む。見込に外周に沈線がある。38 は口径13.0cm,底径7.8cm,器高2.3cmで3区から出土した。やや暗い肌色を呈し,底部と見込は黒灰色となっている。胎土精良で細かい雲母粒を含む。見込に沈線がある。

39 は肥前染付皿で2区-Ⅱ層から出土した。畳付け露胎で見込みに花文を描く。胎土は白灰色で黒

色粒を含む。大橋康二の年代観によるⅡ期<sup>(7)</sup>に位置づけられよう。

40 は西洋陶器で3区のⅡ層から出土した。いわゆる銅板転写皿で外面は白色、外面に青味の強い西洋呉須で絵がプリントされている。文様は外周にバラを、見込に山水と人物を確認することができるが、具体的な情景は不明である。胎土は白灰色で精良、焼成も良い。岡泰正の論攷<sup>(8)</sup>から、19世紀前半のイギリス製と考えられるが、パターン名は不明である。

41 は肥前染付皿で3区から出土した。素地は灰色で呉須は暗青色に発色し、畳付けが露胎となる。 胎土は灰色で黒色粒を含み焼成はふつう。芙蓉手の文様で、17世紀後半の輸出向け磁器に類似する。



第36図 2·3区出土遺物③(S=1/3)

42 は京焼風の肥前陶器の筒形碗で3区から出土した。貫入の多い黄灰色釉がかかる。体部には山水 文の一部と考えられる文様が認められる。高台外から高台内にかけて露胎、高台内には清水と思われ る落款がスタンプされている。胎土は黄味がかった灰色で精良、焼成はふつうである。

43 は天目茶碗で肥前産と考えられる。3 区から出土した。黒褐色釉が内面から外面中位にかけてかかるが、火を受けたためか黄色がかった灰色に変色している。胎土は黒灰色でやや粗く、砂粒を含む。44 は肥前陶器皿で3 区の Ⅱ 層から出土した。暗緑色釉がかかり、見込は蛇ノ目釉剥ぎ、畳付けから高台内にかけて露胎となっている。胎土は灰色で精良、焼成はふつうである。内野山窯の製品であろう。

45 はすり鉢で3区のII層から出土した。褐色釉が口縁部から体部外面中位にかけてかかる。胎土は粗く砂粒を含む。とくに長石粒が多く、信楽産の可能性がある。46 は土製の甕の口縁部で3区のII層から出土した。茶褐色で焼成はやや甘く、胎土に金雲母を含む。口縁部上面に「御用人方」と刻書される。47 は徳利で3区のII層から出土した。頸部から口縁部にかけて青緑色釉、体部に黄灰色釉がかかる。底部は露胎で「文久二 御納戸 口口」と墨書される。胎土は黄白灰色で黒色粒を少量含む。産地は不明である。

### 4・5区出土の遺物(48~52)(第37図,図版13)

- 4・5区で図化した遺物はすべてⅢ層からの出土である。
- 48・49 は中国産白磁皿で5区から出土した。乳白色釉がかかり、畳付け露胎となっている。小野分類の白磁皿C群に相当する。50 は中国製の粗製磁器碗で4区から出土した。圏線のほかに文様はなく、胎土は灰色で黒色粒を含む。17世紀前葉のものか<sup>(9)</sup>。

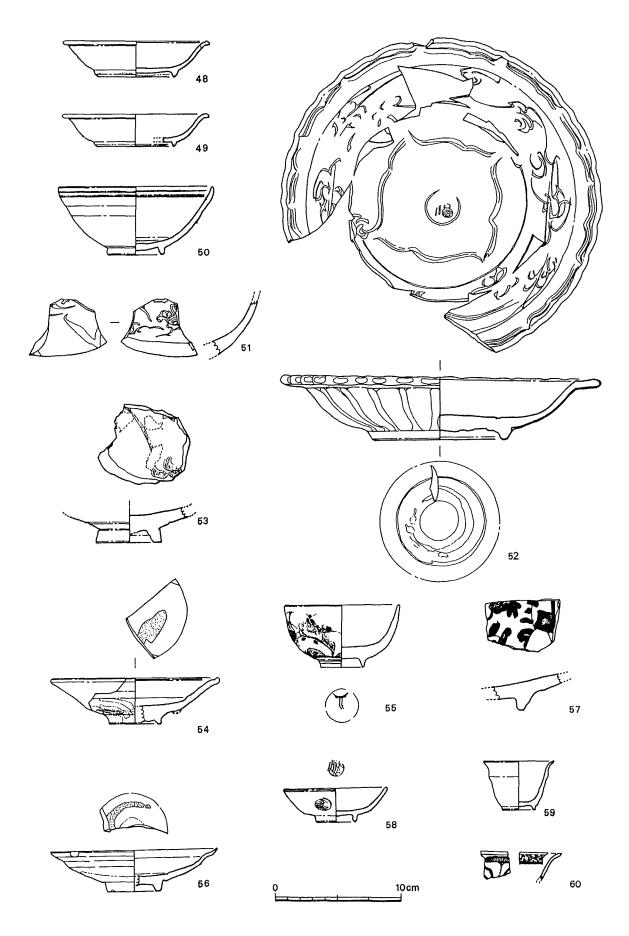
51 は青磁碗または盤の一部で5区から出土した。内外面にヘラ彫りで文様を施す。胎土は灰色でやや粗い。52 は青磁盤で5区から出土した。ガラス質の暗緑色釉が厚くかかり,高台内が蛇ノ目釉剥ぎになっている。体外面は蓮弁、内面には草花文がヘラ彫りされる。口縁部は稜花となっている。胎土は白灰色で精良である。

### 8・9区出土遺物(53~60) (第37図, 図版14)

53 は肥前陶器で、鉄絵を描くいわゆる絵唐津である。見込に目跡がのこる。54 は肥前陶器で、見込に砂目の跡が残る。口縁部が屈曲して外反する折縁皿である。55 は肥前磁器で、梅樹文を描く染付碗である。18 世紀に大量生産されたもの。56 は青磁皿で、見込を蛇ノ目釉剥ぎする。口縁端部がやや内湾気味である。波佐見系か。57 は漳州窯系の大皿の底部で胎土は赤褐色で陶質、呉須の発色は暗青色を呈する。底部に砂が付着。58 は 18 世紀代の肥前の染付皿で、体部に丸文を描く。59 は肥前の白磁小杯で 17 世紀中葉に多くみられる。60 は明青花碗または鉢で口縁部が外反する。

## その他の出土遺物(61~66)(第38図,図版15)

61~66 は瓦質の火鉢である。61 は3区のⅢ層から出土した。外面に連続して凹凸がみられる。雲母を多く含み、外面は燻されて黒灰色、内面は灰褐色を呈する。62 は型押し成形のもので3区から出土した。体部に窓絵風の区画の中に波文が施される。雲母を多く含み赤みがかった黄褐色を呈する。63 は底部で3区のⅡ層から出土した。やはり雲母を多く含むが焼成がやや甘く、赤みを帯びた暗褐色



第37図 4·5区出土遺物, 8·9区出土遺物(S=1/3)

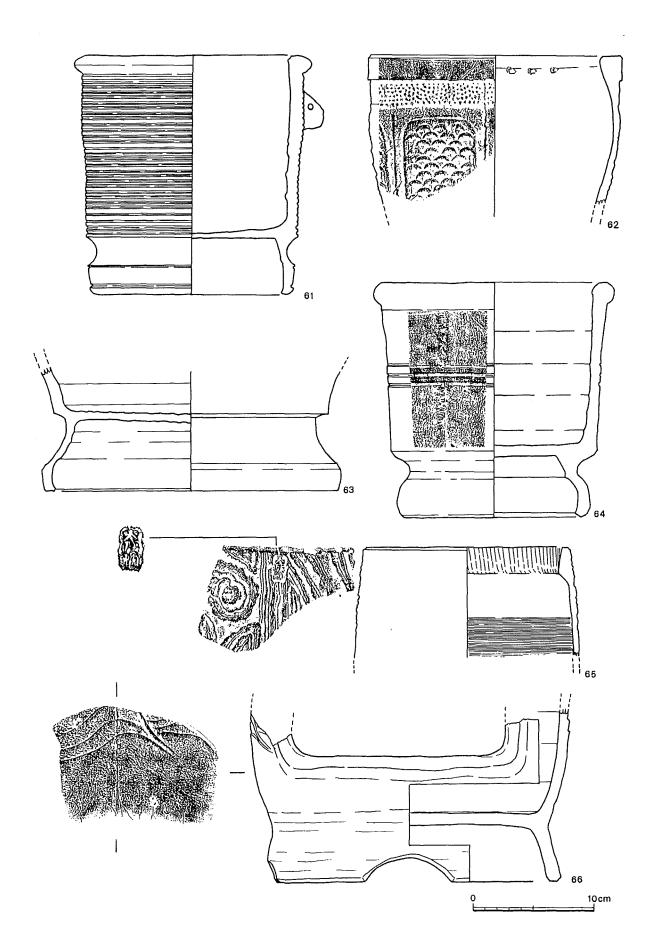
を呈する。**64** は型押し成形のものでⅢ層から出土した。体部に縦に継ぎ目があることから半分ずつ型押しで成形し、合わせたものと考えられる。雲母を含み赤みを帯びた黄褐色を呈する。

65 はも型押しによるもので1区のⅡ層から出土した。外面には装飾的な文様が施される。雲母を含み赤みを帯びた黄褐色を呈する。口縁部内側が肥大し、内面にはハケメがのこる。66 は体部下半に窓をもつタイプで3区から出土した。赤みを帯びた黄褐色を呈する。

以上は、層位的な共伴関係が明らかではないが、製作技法からみて比較的新しい時代のものと考えられる。近代のものである可能性もあろう。

#### 註

- (1) 諫早市教育委員会 2000 『沖城跡』諫早市文化財調査報告書第 14 集, 42 頁の土師質土器 24。
- (2) 長崎県教育委員会 2002 『玖島城跡』として刊行予定。筆者が調査を担当し、確認した。
- (3) 九州土器研究会・鹿児島大会(2000年6月)において、畿内の研究者の間でも京都系土師器の影響の有無について意見が分かれた。基本的に京都系土師器は手づくね成形である点で異なるが、薄く洗練された成形や底部をヘラケズリするなど、在地ではみられない特徴を備えていることが問題となった。
- (4) 亀井明徳 1980「日本出土の明代青磁椀の変遷」『鏡山猛先生古希記念古文化論攷』による。
- (5) 小野正敏 1982「15~16世紀の染付碗・皿の分類と年代』「貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会による。
- (6) 森 毅 1995「一六・一七世紀における陶磁器の様相とその流通」『ヒストリア』第 149 号 大阪歴史学会による。
- (7) 大橋康二 1993 『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社による。
- (8) 岡 泰正 2001「出島・護岸石垣出土のヨーロッパ製陶器について」『国指定史跡 出島和蘭商館跡』長崎市教育委員会による。
- (9) 長崎遺跡群の袋町(『栄町遺跡』長崎県教育委員会 2001)のVI層(17世紀前半の層)でまとまって出土している。

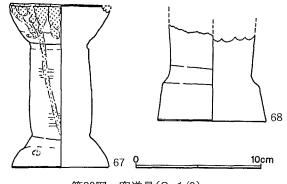


第38図 その他の出土遺物(S=1/3)

# 2 窯道具(67・68)(第39図, 図版16)

67 は完形品で台部から脚部にかけて自然釉が流れており、台部上面は全面に付着している。台部上面はやや傾斜しており、基部は脚部に対してほぼ直角である。高さ約12.5cm、基部直径約7.8cm、台部直径約7.7cm、重量約525gを測る。SD03内覆土出土品である。

**68** は上半を欠損しており、残存長約 7.5cm, 基 部直径約 7.8cm, 重量約 390g を測り、明確なくび



第39図 窯道具(S=1/3)

れをもち、基部は台形状に広がっている。SD03 内覆土出土品である。また、三ノ丸外庭で天明元年(1781) 窯を開いたことが伝えられ、製品の一部は島原城展示館で公開されている。

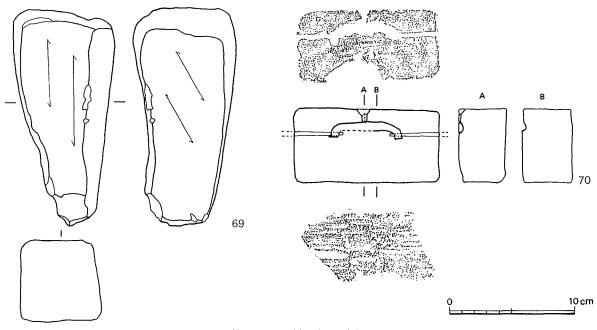
## 3 石製品(69·70)(第40図, 図版16)

69 は凝灰岩製の砥石で、砥面は2面確認され、図の上面にあたる部分を最も多く利用しており、緩やかに減りくぼんでいる。

70 は網錘の鋳型で凝灰岩製である。長さ 1.5cm, 幅 5.9cm, 厚さ 3.8cm, 重さ 500g を測る。錘の形は片面に彫られ, 裏面は拓本に見るように細く鑿状工具痕が残る。錘は長さ 5.4cm, 中央幅 0.7cm, 深さ 0.35cm を測る。両端に内に傾く幅 0.25cm の溝が彫られ, 錘の両端に孔を作るためである。湯口は背側中央に漏斗状(上端直径 0.7cm, 深さ 0.6cm)に堀込まれ, 湯道は幅 0.4cm, 長さ 0.6cm, 深さ 0.2cmの断面 V 字状で錘背面にいたる。県内の資料では下県郡美津島町水崎遺跡出土した鉛製沈子 1 例(長さ約 10cm, 太さ約 1.0cm) がある(福田 2000)。他に報告事例では 3 点確認されている(吉田 1996)。

#### 参考文献

福田一志 2000 『水崎(仮宿)遺跡』美津島町教育委員会 吉田 寛 1996 『府内城三ノ丸北口跡』大分県教育委員会

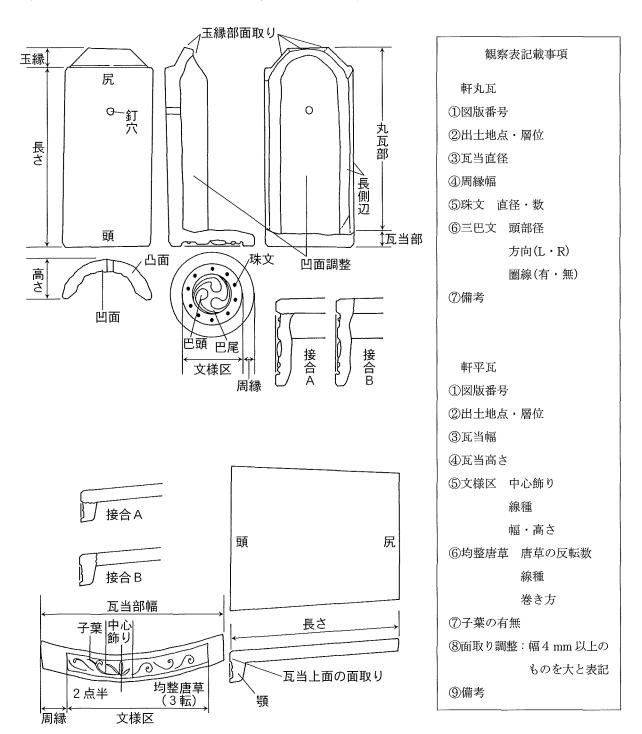


第40図 石製品(S=1/3)

## 4 瓦

瓦の部位・名称に関しては以下の第41図に準じる。出土した瓦は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、鬼瓦、塀瓦(目板瓦)である。観察表については軒瓦片のみを対象に作成した。

軒丸瓦瓦当の三巴文は巴尾部の方向を基準に左巻きを「L」,右巻きを「R」とし,観察表ではその略号で記述した。珠文は現存数をもとに,推定数を括弧内に記述した。圏線はその有無を確認し,観察表に記述した。瓦当面との接合については「A」「B」の二種が確認され,判断できないものについては「一」を記述した。均整唐草の巻きについては,「強」「弱」の二種でのみ記述した。



第41図 本瓦の部分名称

**軒丸瓦(1~27)** (第 42·43 図, 第 2 表, 図版 17·18)

1は試掘調査出土。色調は暗黄橙色を呈し、焼成は良好。文様は三巴文。巴は左巻きとなっており、 尾部が互いに接して圏線をなす。珠文は残存9、推定16と考えられる。丸瓦部凸面はヘラ状工具によ る調整が施される。凹面は布面痕・コビキAが確認される。丸瓦部の長側辺は面取りによる調整が施 される。

2はⅡ層出土燻し瓦。色調は暗青灰色を呈す。焼成はやや甘い。文様は三巴文を有し、巴の方向は 左巻き。巴尾部は互いに接し、圏線をなしている。珠文は11。丸瓦部の残存状況は悪く、調整等は不 明。瓦当裏面はナデ調整が施されている。

3はⅡ層出土燻し瓦。色調は暗青灰色、焼成は良好。文様は三巴文を有し、巴方向は左巻き。巴尾部は互いに接触しており、圏線をなす。珠文は10。瓦当全体の形は不整形。丸瓦部は欠損しており、調整等は不明。瓦当裏面はナデ調整が施される。瓦当部にはつなぎを良くするための刻みが施される。これは接合Bの痕跡であることがわかる。

4はII層出土燻し瓦。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好。文様は三巴文を有し、方向は左巻き。 巴尾部は互いに接触しており、圏線をなす。珠文は9。瓦当上部の珠文と周縁の間には凸状の線が確認される。丸瓦部は欠損しており、調整等は不明。瓦当裏面はナデ調整が施される。また瓦当裏面には接合Bが確認され、弧状の刻みが施されている。

5はⅡ層出土燻し瓦。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好。文様は三巴文と考えられ、尾部も接触していることから、圏線をなしていると思われる。瓦当は砂の付着が確認される。瓦当形成時に砂をまぶすことによって、笵のはがれを良くしたものと考えられる。瓦当裏面はナデ調整。

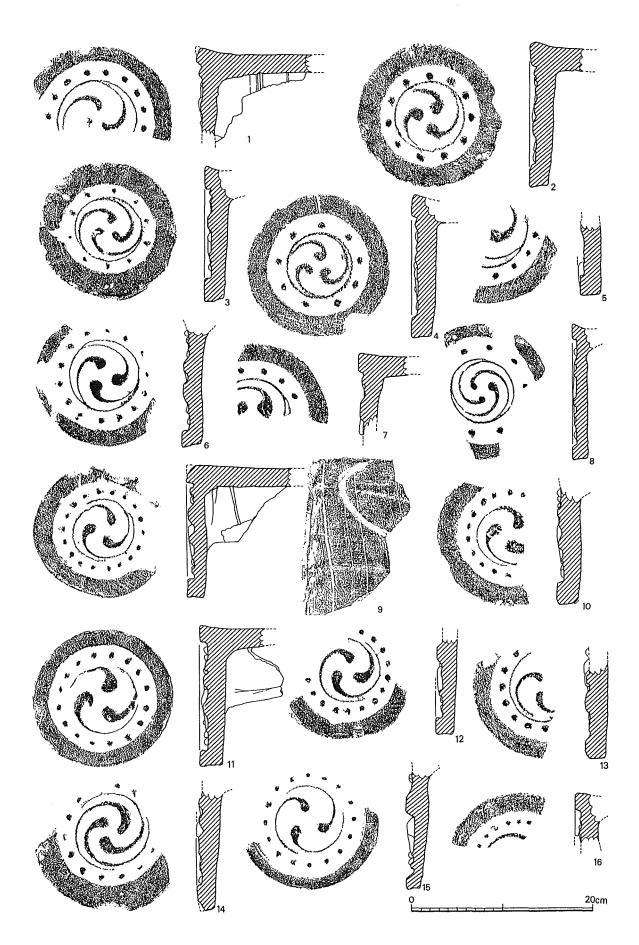
6 はⅡ層出土燻し瓦。色調は暗青灰色を呈す。色調は良好。文様は三巴文を有し、巴尾部は互いに接触して圏線をなす。周縁幅は瓦当全体に対して幅が狭い。また、周縁から文様までの高低差があり、全体的に掘りが深い印象がする。巴頭部は調整が加えられており、その断面はカマボコ形になっている。珠文は14。瓦当裏面はナデ調整が施される。周縁上半部分は欠損しており接合 A が確認される。接合痕には弧状の刻みが施される。

7は試掘調査出土。色調は暗青灰色を呈す。焼成は良好。文様は三巴文で、方向は左巻き。部分的であるが、巴尾部の接続痕が確認される。おそらく圏線をもつものと考えられる。周縁から瓦当面にかけて直線が数条確認され、繊維痕の可能性が考えられる。スタンプが木製であったことがいえる。 丸瓦部は欠損しているため不明。瓦当裏面はナデ調整が施される。

8はSV01出土燻し瓦。色調は暗黄橙色を呈す。焼成は堅緻。文様は三巴文を有し、方向は左巻き。 巴尾部は互いに接触し圏線をなす。珠文は残存6、推定10。巴は他の瓦当に比して細く、文様は全体 的に掘りが深い印象がする。瓦当は砂ハギの痕跡が残る。瓦当裏面はナデ調整。接合Bの痕跡が確認 され、瓦当の中心に向かって刻みが施される。

9 は SD01 Ⅱ層出土燻し瓦。色調は暗青灰色。焼成は良好。文様は三巴文。方向は左巻き。巴尾部は互いに接触しており、圏線をなす。瓦当は砂ハギの可能性が考えられる。珠文は 18。瓦当裏面は指ナデ調整が確認される。丸瓦部凸面はヘラ状工具による調整が施される。凹面は布目痕・吊り紐痕が確認される。凹面にはコビキ A の痕跡も確認される。丸瓦部長側辺には面取りが施される。

10 はⅡ層出土燻し瓦。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好。文様は三巴文。巴方向は左。巴尾部は



第42図 軒丸瓦①(S=1/4)

圏線をなす。珠文は残存部分で11,推定17。周縁と珠文・珠文と巴尾部との間には凸状の線が確認される。瓦当裏面は指ナデ調整が施される。瓦当上半部分には接合Aの痕跡が確認される。

11 は SV06 出土。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好。文様は三巴文を有し、方向は左巻き。巴尾部は互いに接触し、圏線をなす。瓦当成形時直後に巴文の面取りを行っている。珠文は 16。文様そのものは掘りが深い印象がする。瓦当裏面はナデ調整が施される。丸瓦部凸面はヘラ状工具による調整が確認される。凹面には僅かに布目痕・コビキ B が確認される。丸瓦部長側辺は面取りが施される。

12 は試掘調査出土燻し瓦。色調は暗青灰色。焼成は良好。三巴の文様で方向は左巻き。巴尾部は互いに接触する形をなす圏線である。周縁部には僅かに数条の直線を確認でき、繊維痕の可能性が考えられる。瓦当裏面にはナデ調整が確認される。周縁上半部分が欠損しており、接合 A と判断できる。

13 はⅡ層出土燻し瓦。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好。文様は三巴文を有し、巴方向は左巻き。 珠文は残存 14、推定 18。瓦当面は劣化が著しい。瓦当裏面はナデ調整が施される。また、接続面には 弧状の刻みが施され、接合 B の痕跡が確認される。

14 はⅡ層出土燻し瓦。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好。文様は三巴文。巴方向は左巻き。珠文は残存 10、推定 14。瓦当裏面はナデ調整が施される。僅かではあるが、周縁部に数条の線が確認される。周縁上半部が欠損していることから、丸瓦部は瓦当上半部分まで達しており、接合 A と判断できる。

15 はⅡ層出土燻し瓦。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好。文様は三巴文。巴方向は左巻き。巴頭部は平坦になっており、断面はカマボコ形を呈する。文様全体は掘りが深い印象がする。周縁幅は瓦当全体に比して狭い。周縁から文様の角度は直角になっておらず、瓦当成形時に笵ずれをおこした可能性も考えられる。瓦当裏面はナデ調整が確認される。また、周縁上半部分が欠損していることから、13 同様接合 A であることがいえる。

16 は試掘調査出土燻し瓦。色調は暗青灰色を呈す。焼成は良好。小破片ではあるが、文様は三巴文で方向は左巻き。調整等は不明。接合 B の痕跡が確認される。

17 は試掘調査出土の燻し瓦。色調は暗青灰色を呈す。焼成は良好。文様は三巴文で、巴の方向は左巻き。珠文は9。珠文のほとんどに笵ずれの跡がみられる。巴頭部はナデによる調整を受けており、断面がカマボコ形になっている。瓦当裏面は指ナデ調整が施される。丸瓦部凸面はヘラ状工具によるナデ調整が施される。凹面は模骨痕・布目痕および吊り紐痕が確認される。また、コビキBの痕跡も確認される。

18 はⅡ層出土燻し瓦。色調は暗青灰色。焼成は良好。文様は三巴文。方向は左巻き。珠文は残存で5,推定9。文様全体がずれていることから、笵ずれの可能性も考えられる。また、瓦当文様にキラコの付着が確認されることから、瓦当成形時はキラコの使用が考えられる。瓦当裏面は指ナデ調整。丸瓦部は欠損しているため調整等は不明。

19 は SD01 覆土出土燻し瓦。色調は暗青灰色。焼成は良好。文様は三巴文。巴方向は左巻き。珠文は9。文様自体に笵ずれが確認される。巴頭部は調整しており、断面がカマボコ形になっている。瓦当内面は指によるナデ調整。丸瓦部は欠損により調整等不明。ただし、接合痕は確認される。丸瓦部先端は瓦当上半の裏面にまで達する接合 B である。

20 はⅡ層出土。色調は暗青灰色の燻し瓦。焼成は甘い。文様は三巴文。巴方向は左巻き。周縁を中

心に剥落が著しい。珠文は9。巴頭部の断面はカマボコ形となっている。瓦当裏面は指ナデ調整。丸 瓦部は欠損のため調整等不明。また、瓦当裏面に接合B痕および弧状の刻みが確認される。

21 は SV06 出土燻し瓦。色調は暗青灰色を呈し、焼成はやや甘い。文様は三巴文で巴方向は左巻き。 周縁幅が広いため、文様は他に比して小さくみえる。焼成が良くないためか、周縁の剥落が著しい。 珠文は 10。瓦当裏面はナデ調整。丸瓦部は欠損により調整等不明。

22 は SD01 覆土出土燻し瓦。色調は暗青灰色。焼成は良好。文様は三巴文を有し、巴方向は左巻き。 珠文は9。巴頭部の断面はカマボコ形である。周縁には数条の線が確認されるが調整等は不明。巴・ 珠文は丁寧に仕上がっている。瓦当裏面は指ナデ調整が確認される。丸瓦部は欠損のため調整等不明。 また、瓦当上半部の裏面に接合痕が確認されることから、丸瓦部先端は周縁まで達していない。

図		-1-77	na le	珠	文		巴		接合	
図版番号	出土地点	直径 (cm)	周縁幅 (cm)	直径 (cm)	数(推定)	頭直径 (cm)	方向	圏線		備考
1	TP	16.4	2	0.9	9(16)	0.7	L	有	В	コビキA
2	3 II	16.4	2.6	1.2	11	1.2	L	有	_	
3	3 II	15.3	2.5	0.7	10	1.2	L	有	В	
4	3 II	15.8	2.5	1.2	9	1.2	L	有	В	
5	3 II	16	2.3	0,8	4(-)	1.5	L	有	_	
6	3 II	15.4	1.8	0.6	14	1.8	L	有	A	
7	TP	_	1.5	0.8	4(-)	2.1	L	有	В	
8	SV01	14.9	1.7	1	6(10)	1.2	R	有	В	
9	1 Ⅱ	15	2.1	0.8	18	1.6	L	無	_	コビキA
10	3 II	15.6	2.2	0.8	11(17)	1.7	L	無	В	
11	SV06	15.5	1.9	0.8	16	2	L	有	В	
12	TP	15	2.2	0.7	13(18)	1.6	L	無	A	
13	3 II	16	1.9	0.8	7(18)	0.8	L	有	В	
14	3 II	17.5	2.9	0.8	11(14)	1.6	L	無	A	
15	3 II	15	1.8	0.7	16	1.8	L	無	A	
16	TP	_	_	0.6	_	_	L	無	В	小破片
17	TP	16.2	2.5	0.9	9	1.7	L	無	_	
18	3 II	16	2.6	0.9	6(9)	1.6	L	無	_	
19	SD01	15.5	1.5	0.9	9	1.7	L	無	В	
20	3 II	15.7	2.4	0.8	9	1.6	L	無	В	
21	SV06	15	2.9	0.9	10	1.2	L	無	В	
22	SD01	16	1.5	0.8	9	1.8	L	無	В	
23	3 II	15.3	3	0.9	9	1.3	L	無	_	
24	TP	16	2.4	0.8	9	1.9	L	無	A	
25	3 II	16.2	2.3	1.2	5(9)	1.3	R	無	В	
26	3 II	15.1	2.3	0.9	5(9)	1.2	L	無	В	
27	3 II	13.3	2.8	0.8	9(12)	0.6	L	無	В	

第2表 軒丸瓦観察表①

23 は II 層出土燻し瓦。色調は暗灰白色。焼成は甘い。周縁幅が広いため文様が小さくみえる。文様は三巴文を有し、巴方向は左巻き。珠文は9。瓦当裏面は指ナデ調整。丸瓦部は欠損のため、調整等不明。また接合痕も不明。

24 は試掘調査出土燻し瓦。色調は暗青灰色。焼成はやや甘い。文様は三巴文を有す。巴方向は左巻き。珠文は9。珠文数は17・18・19・20と同様になる。瓦当裏面はナデ調整。丸瓦部は欠損しているため、調整等は不明。また、周縁上半部分が欠損していることから、接合Aによって瓦当部と丸瓦部は接合されていたことがわかる。

25 は II 層出土燻し瓦。色調は明灰色。焼成はやや甘い。文様は三巴文を有し、巴方向は左巻き。周縁と文様の高低差は少なく、また若干の笵ずれが確認される。珠文は現存で 5、推定で 9。瓦当裏面は指ナデ調整。丸瓦部は欠損のため調整等不明。

26 は II 層出土燻し瓦。色調は青灰色。焼成は良好。文様は三巴を有し、巴方向は左巻き。周縁と文様との高低差は高く、また文様にも笵ずれは少ない。珠文は残存で 5、推定 9。瓦当裏面は指ナデ調整が確認される。丸瓦部は欠損により調整等不明。また、部分的に弧状の接合痕が確認されていることから、接合 B によって瓦当部と丸瓦部は接合されている。

27 はⅡ層出土。色調は明灰色を呈し、焼成は良好。文様は三巴文。方向は左巻き。珠文は残存9、推定12。瓦当は他に比して小さい印象がする。すなわち周縁幅が広いことがいえる。瓦当裏面はナデ調整が施される。また、瓦当・丸瓦部は接合 A の痕跡が確認される。

#### 軒平瓦(28~43)(第44図,第3表,図版20)

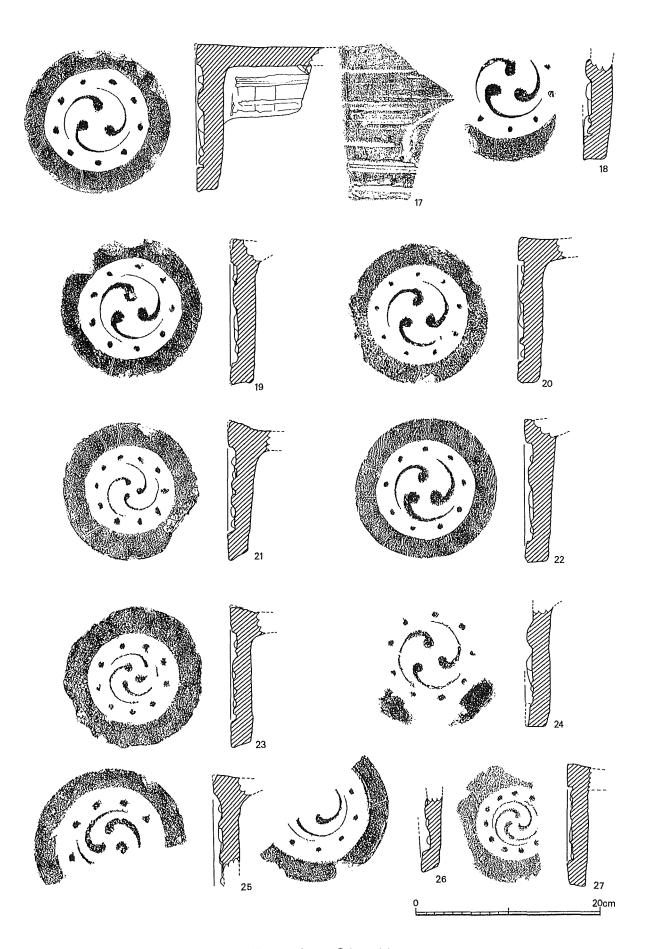
28 は試掘調査出土燻し瓦。色調は暗青灰色。焼成は良好。文様は均整唐草文。中心飾りは部分的に残る。このことから三葉の中心飾りである。唐草は左右2転しているが、本来左右3転展開していたものと思われる。笵の両端を切り落として造られた文様である。また、断面から接合痕も確認できる。平瓦部の先端が瓦当部の周縁上半部分に達する接合Aである。調整は瓦当部・平瓦部ともに指ナデ調整が施されている。

29 はⅡ層出土の燻し瓦。色調は暗青灰色。焼成は良好。文様は均整唐草文を有し、中心飾りは三葉となる。唐草は左右3転展開している。唐草の線は細く、先端の巻きは強い。顎の断面は角張っている。接合は平瓦部先端が周縁上半部分まで達する接合Aとなる。全体的に丁寧な仕上げとなる。

30 はⅡ層出土燻し瓦。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好。文様は均整唐草文。中心飾りは三葉。 唐草は左右2転。唐草先端の巻きは強い。文様そのものは磨滅している。瓦当全体からすると、文様 は小さい印象がする。顎の断面は角張っていない。調整はナデが施されている。2と同様に接合Aで ある。

31 はⅡ層出土燻し瓦。色調は暗青灰色。焼成は良好。均整唐草文の文様を有す。三葉の中心飾りをもち、唐草は左右2転展開する。文様は全体的に小さい印象がする。顎の断面は角張っており、調整は全体にナデが施される。平瓦部先端は瓦当部周縁にまで達し接合Aが確認できる。

32 はⅡ層出土燻し瓦。色調は暗青灰色。焼成は良好。文様は均整唐草文を有す。三葉の中心飾りをもち、唐草は左右に2転展開する。また、文様の両端に珠点をもつ。文様を含め全体的に磨滅している。調整はナデが施される。顎の断面から、平瓦部先端は周縁にまで達する接合 A が確認できる。



第43図 軒丸瓦②(S=1/4)

33 は試掘調査出土燻し瓦。色調は暗青灰色。焼成は良好。文様は均整唐草文をもち、中心飾りは三葉である。三葉はそれぞれ3本の線で表現している。唐草は左右に3転展開している。調整はナデが施される。平瓦部先端は瓦当周縁部にまで達する接合Aが確認できる。

34 はⅡ層出土の燻し瓦。色調は暗青灰色。焼成は良好。均整唐草文を有し、中心飾りは三葉と推定することができる。中心飾りは33と同様、唐草は左右2転展開する。唐草の巻きは強い。調整はナデが確認される。

35 は試掘調査出土。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好。文様は均整唐草文。五葉の中心飾りを有し、唐草は左右2転展開する。調整は全体的に指ナデ調整で仕上げている。唐草は簡略されており、短線で仕上げている。顎の断面は角がないため、なだらかにみえる。

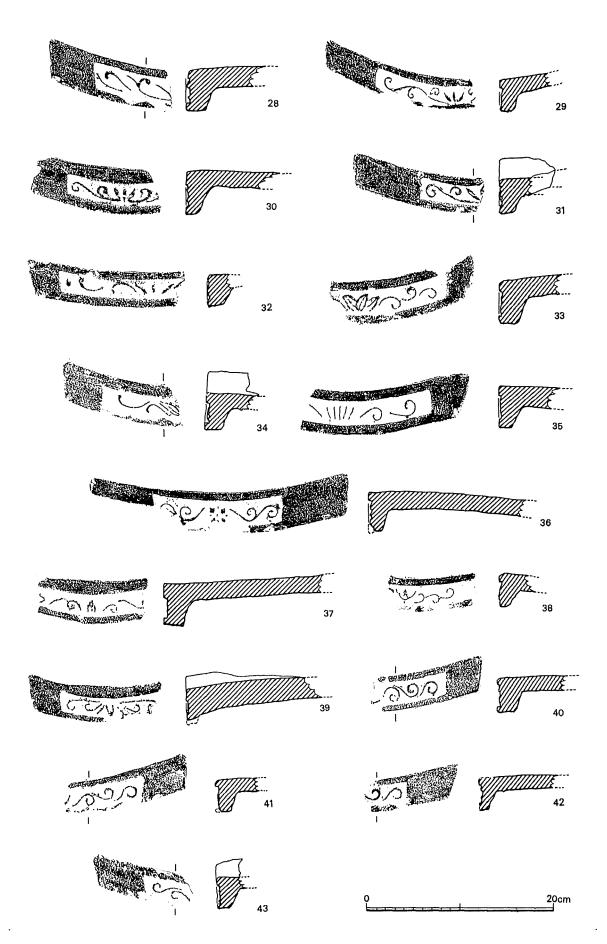
36 はⅡ層出土燻し瓦。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好。均整唐草文を瓦当にもつ。中心飾りは四弁花。唐草は左右2転展開する。文様は瓦当全体の中では小さい印象がする。調整は全体的に指すデ調整を行っている。瓦当部の接合は、平瓦部先端が瓦当周縁に達する接合Aが確認できる。

37 はⅡ層出土燻し瓦。色調は暗青灰色。焼成は良好。文様は均整唐草文。中心飾りは宝珠文。文様は全体的に磨滅が著しい。唐草は欠損のため不明であるが、おそらく2あるいは3転展開するものと思われる。調整はナデが全体に施される。瓦当部は平瓦部先端が瓦当周縁にまで達する接合Aが確認できる。

38 は II 層出土燻し瓦。色調は暗青灰色を呈し、文様は均整唐草文。中心飾りは三葉を有し、唐草は左右3 転展開する。中心飾りの三葉の下に珠点が確認される。調整はナデが施され、周縁上半部分と平瓦部凹面先端部の間は面取りが確認できる。

図	Щ	幅 (cm)	高さ (cm)	文 様 区				唐  草					接	瓦当面		
版番	図版番号 出土層位			中心		幅(	高さ	反転数	線種	巻き	連続性	子葉の	合	上面の 面取り	備	考
万	11/.			<del>                                     </del>	線種	( cm )	(cm)					有無		囲れり		
28	TP	27.7	4	三葉	太	18	2.8	2.5	太	弱	1連	有	Α	無		
29	3 II	28.4	3.3	三葉	細	16.7	2	3	細	強	1~3連	無	A	有		
30	3 II	_	4.5	三葉	細	12.6	2.1	2	細	強	連続	無	A	有	面取り	)小
31	3 II	28.4	3.6	三葉	太	13	1.9	2	太	強	連続	無	A	有		
32	3 II	27	3.5	三葉	太	20.5	2	2	細	弱	不連	無	A	有	珠点	
33	TP	26	4.2	三葉	細	20	2.5	3	細	強	不連	無	A	有	面取り	)大
34	3 II	26~	3.9	三葉	細	17	2	2	細	弱	不連	無	A	有	面取り	)小
35	TP	28	4.5	五葉	細	20	2.5	2	細	強	不連	無		有	面取り	)小
36	3 II	27.7	4.3	四弁花	台形	14	2.6	2	細	強	連続	無	A	有	面取り	)小
37	3 II	-	4.4	宝珠	細	12~	2.3	3	細	強	不連	無	A	有	面取り	)小
38	3 II	_	3.3	三葉	太	14~	1.9	3	細	弱	連続	無	A	有	面取り	力大
39	3 Ⅱ	18~	3,8	三葉	細	11	2	2	細	強	連続	無	A	有		
40	3 II	26~	3.6	三葉	細	18	2.3	3	細	強	不連	無	A	有		
41	TP	28	3.6	三葉	細	18	2.2	3	細	強	不連	無	A	有		
42	3 II	WARRING .	3.4	_	_	_	1.9	3	細	強	不連	無	A	無		
43	TP	_	3.3	_	-		1.9	2	細	強	不連	無	A	有		

第3表 軒平瓦観察表①



第44図 軒平瓦①(S=1/4)

39 はⅡ層出土燻し瓦。色調は暗青灰色。焼成は良好。文様は均整唐草文となる。中心飾りは三葉となるが、葉は垂下する形をとる。唐草は中心飾りを基準に左右2転展開する。調整は全面にナデが確認できる。平瓦部凹面は部分的に模骨痕と思われる跡が確認される。接合は基本的に平瓦部先端が瓦当周縁に達している接合Aであるが、その後瓦当裏面に粘土を貼り顎幅を肥厚させている。

40 はⅡ層出土燻し瓦。色調は暗青灰色を呈す。焼成は堅緻。文様は均整唐草文。中心飾りは、残存が悪いが、おそらく三葉と考えられる。唐草は左右3転展開する。唐草の巻きは強く、円形に近いものとなっている。瓦当接合は平瓦部先端が瓦当周縁にまで達する接合Aが確認できる。調整は全面にナデ調整が施される。

41 は試掘調査出土。色調は暗青灰色。焼成は良好。文様は均整唐草文。中心飾りは三葉と思われる。 唐草は左右3転展開する。線は細く、巻きも強い。接合不明。調整は全面にナデが施される。

42 はⅡ層出土燻し瓦。色調は暗青灰色。焼成は良好。文様は均整唐草文。中心飾りは欠損のため不明。唐草は左右2あるいは3転展開するものと考えられる。唐草の巻きは強く、円形に近い仕上げとなっている。接合は不明。調整は全体的に指ナデ調整となる。

43 は表土出土燻し瓦。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好。文様は均整唐草文。中心飾りは不明。 唐草は2あるいは3転展開しているものと思われる。全面指ナデによる調整が施される。接合は不明。

## 丸瓦(44~46)(第45図,図版22)

44 はⅡ層出土燻し瓦。色調は灰白色。焼成は良好。先端部は欠損している。凸面はヘラ状工具での調整が施され、その後丁寧なナデ仕上げが確認できる。また、玉縁部も同様の仕上げである。スタンプは楕円に十字の文様が押されている。凹面は布目・模骨痕およびコビキBが確認できる。丸瓦の長側辺は面取りが玉縁まで施されている。

**45** は  $\Pi$  層出土燻し瓦。色調は暗青灰色。焼成は良好。先端部は欠損している。凸面はヘラ状工具による調整が確認される。その後ナデによる調整が施される。1 よりもナデ調整は弱い。凹面は布目・模骨が確認される。コビキは A が確認される。面取りも 1 同様,玉縁部まで施されている。また,瓦を固定するための釘穴が確認され,凸面から凹面方向に向かって穿孔されている。

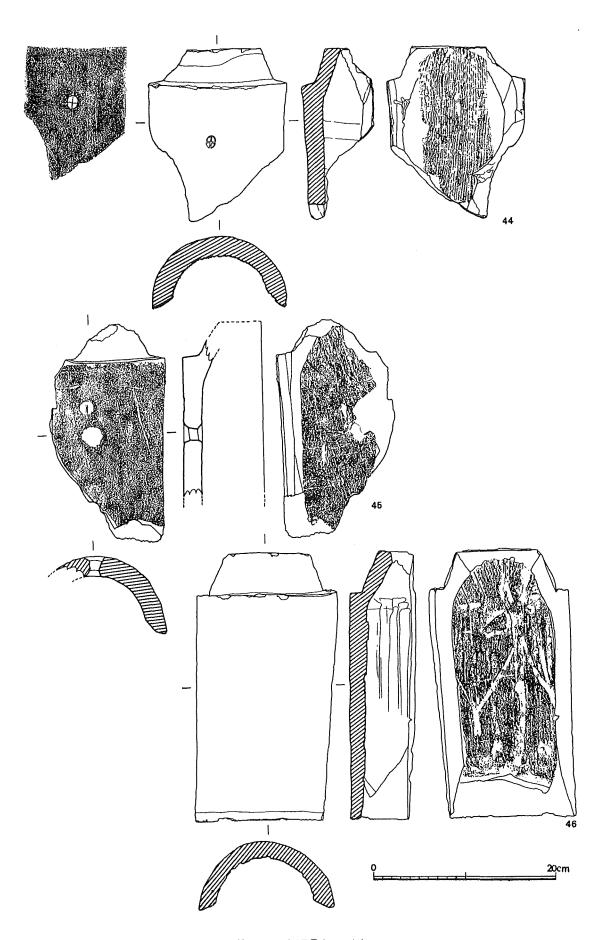
46 は SH01 内出土丸瓦である。長さ 29cm, 頭(幅) 14cm, 高さ 7cm, 玉縁長さ 4.5cm, 尻(玉縁) 9cm となる。直径 14cm 前後の軒丸瓦が先端にくるものと思われる。凸面はヘラ状工具による調整後ナデ 調整が行われていた可能性が高い。玉縁は横方向ナデが施される。凹面は布目・模骨・コビキ B 痕が 確認される。また吊り紐の痕跡も確認される。凹面の周囲はすべて面取りが施される。

#### 鬼瓦 $(47 \sim 49)$ ,塀(目板)瓦 $(50 \cdot 51)$ (第 46 図,図版 24)

47 は試掘調査出土燻し瓦。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好である。部分的ではあるが、扇の一部が確認される。松平家家紋の可能性が考えられる。調整はナデが施される。

48 はⅡ層出土燻し瓦。色調は暗黄橙色。焼成は良好。1同様部分的なものである。おそらく扇の位置・裏面の引掛位置から中央に位置するものと思われる。扇は7本の骨格をもち、1枚あるいは2枚の扇が考えられる。調整はナデによって仕上げられている。

49 は試掘調査出土燻し瓦。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好である。部分的ではあるが、扇が確



第45図 丸瓦①(S=1/4)

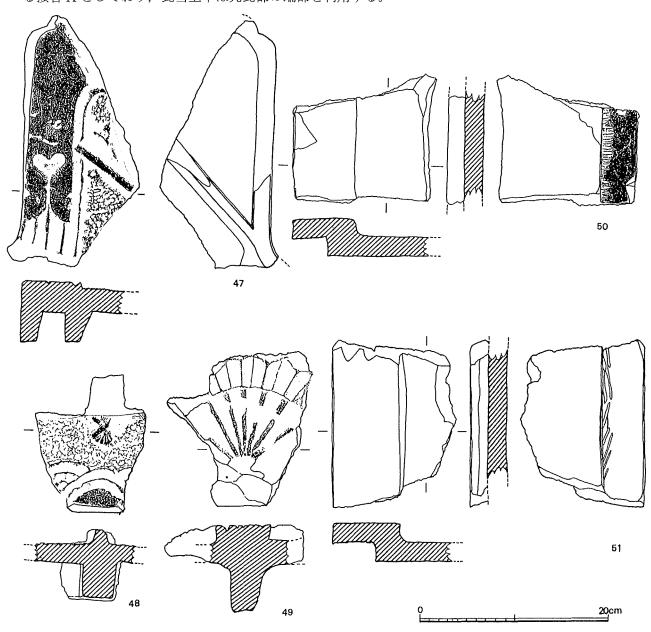
認される。これも 47・48 同様松平家家紋であると考えられる。扇の位置は鬼瓦の中心から下に位置するものと考えられる。また扇の周辺は針状工具で施文しており、その下には青海波状の文様を施文している。調整はナデが施される。

 $50 \cdot 51$  は塀瓦(目板瓦)。50 はII層,51 は試掘調査出土の燻し瓦。色調は暗青灰色を呈し,焼成は良好。桟の接合面には刻みをつけた痕跡が確認されるが,桟だけではなく両方に刻みをつけていた可能性が考えられる。調整はナデが施されており, $50 \cdot 51$  の大きさには差異はないものと思われる。

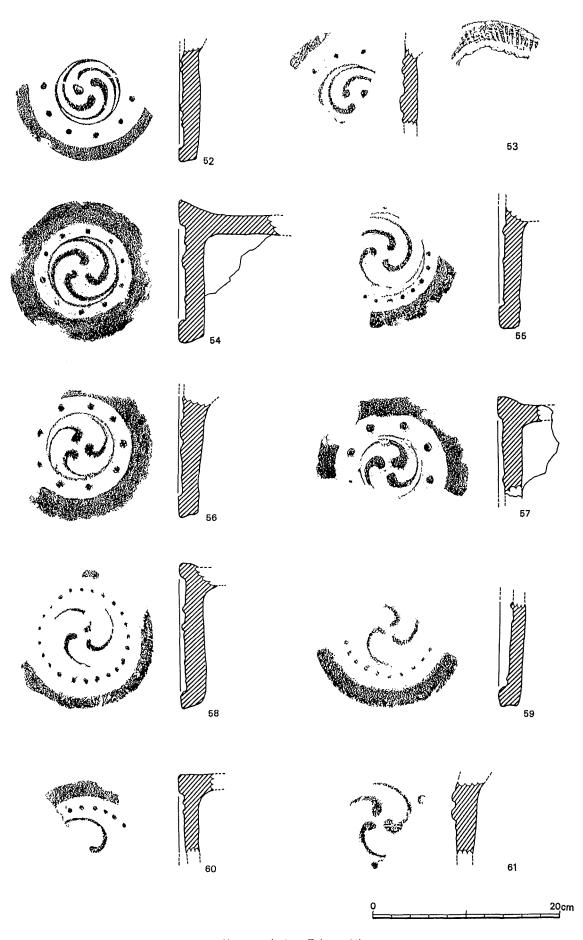
### **軒丸瓦(52~66)** (第 47·48 図, 図版 18·19)

平成 12 年度出土瓦は 52 ~ 114 である。

52 は9 G II 層出土で丸瓦部を欠損する。暗褐色を呈して、焼成は良好。右巻きの三巴文で圏線をもつ。珠文は6残り、推定で10。巴頭部断面は台形、尾部は半円形。円筒状の丸瓦部に、瓦当部を当てる接合 A をしており、瓦当上半は丸瓦部の端部を利用する。



第46図 鬼瓦①, 堀(目板)瓦(S=1/4)



第47図 軒丸瓦③(S=1/4)

53 は9 G II 層出土で丸瓦部を欠損する。暗青灰色を呈し、焼成は良好。右巻きの三巴文で圏線をもつ。珠文は残存3、推定で10。巴頭部断面は台形、尾部は半円形で長くのび圏線に接する。52 と同笵である可能性が高い。瓦当部背面に丸瓦部を当てる接合 B を行っている。その際に瓦当部背面に放射状の刻目を入れ、接合の便をはかる。

54 は表土出土の燻し軒瓦でほぼ完全に瓦当部分が残る。暗青灰色で焼成は良好。左巻の三巴文で、 圏線をもつ。珠文は 10。巴は尾部からくびれ部にかけて断面台形であるが、なでられており、稜線は 明確ではない。尾部は長くのび圏線に接する。丸瓦部凸面調整は長軸方向に刷毛を施し、瓦当部背面 はナデ調整である。凹面はコビキ B→布目痕→接合部に横ナデ。凹面長側辺は面取りされたあと、ナ デ調整。瓦当部背面に丸瓦部を当て接合している。

55 は SD04 出土の燻し軒丸瓦である。暗青灰色で焼成は良好。左巻の三巴文で圏線をもつ。珠文8 残存で、推定で 28。巴頭部平面形は正円ではない。巴頭部断面は台形、尾部はカマボコ形。周縁幅は約 2.2cm。丸瓦部欠損。瓦当部背面に丸瓦部を押し当て接合している。背面には弧状に刻目を施し、接合の便をはかる。

56 は試掘調査出土の軒丸瓦である。青灰色で焼成良好。左巻の三巴文で圏線をもつ。珠文9, 巴頭部は円形で断面台形, 尾部断面はカマボコ形。周縁幅は約2.2cmを測る。丸瓦部は欠損。瓦当部背面に丸瓦部を押し当て接合する。

57 は8 G 表土出土の瓦当下半分を失う軒丸瓦である。青灰色で焼成はやや甘い。左巻の三巴文。珠文は残存 6,推定で 8。巴頭部は断面台形,尾部はカマボコ形,尾部は接合せず,圏線をなさない。 凸面の調整はヘラおよび刷毛により,玉縁から瓦当面方向に行われる。凹面にはコビキ B が確認されるほか,瓦当部との接合による強いナデがみられる。瓦当部背面に丸瓦部を当て接合している。

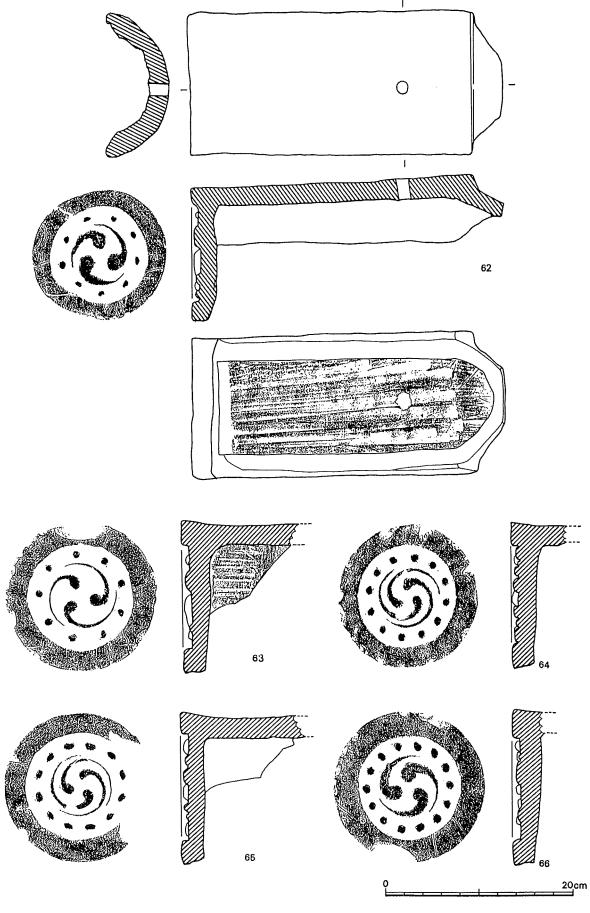
58 は SD04 出土燻し軒丸瓦である。左巻の三巴文で圏線はなさない。色調は暗青灰色、焼成良好。 珠文は 23 を数え、巴は細く短く、頭部は小さく近接する。断面は当部尾部ともに高いカマボコ形であ る。周縁幅は 1.7cm を測る。凸面の調整はヘラ、凹面にはコビキ B がみられる。瓦当部背面に丸瓦を 押し当て接合する。

**59** は SD04 出土。色調は暗青灰色で、焼成ややあまい。**58** と同タイプの三巴文で残存 10、珠文数推定 23。瓦当上半欠損。周縁幅は  $1.6 \sim 1.7$ cm。

60 は SD04 出土。色調は暗青灰色で、焼成はややあまい。左巻の三巴文で、58 と同タイプである。 周縁幅は 1.7cm ほど。凸面は長軸方向のナデ。瓦当部背面に丸瓦部を当て接合している。

61 は SD04 出土。燻し軒丸瓦であるが、焼成悪く、褐色を呈し、内部は暗青灰色である。三巴文は 巴頭部が密接し、尾部にかけて細くなるタイプ。頭部は断面台形、尾部は断面は角の取れた三角形で ある。珠文は残存で3、推定9である。周縁・丸瓦部などは欠損。瓦当部に丸瓦部を当て接合してい る。

62 は燻し焼成の軒丸瓦の完形品で、表採資料である。長さ 29.9cm、玉縁長 3.4cm、頭幅 14.7cm、尻幅 15.0cm を測る。色調は暗青灰色、焼成は極めて良好。文様は左巻きの三巴文で、頭部は大きく尾部は短い。珠文数は 9。丸瓦部凸面の調整は、瓦当面接合後に長軸方向に細い面取りを行い、瓦当面接合部分周辺に接合時のヨコナデが確認される。凹面にはコビキ B 痕の上に布目痕が残り、玉縁部分から瓦当面にかけて、長軸方向に幅約 1 cm の板状工具によるタタキに近いオサエが約 12 本確認できる。



第48図 軒丸瓦④(S=1/4)

瓦当部背面に丸瓦を当てる接合で、接合後は凹面凸面とも丁寧にヨコナデを行う。凹面長側辺の面取りは瓦当部接合前に瓦当面から玉縁方向で行われる。

63 は SD04 出土の燻し軒丸瓦片である。色調は暗青灰色、焼成は極めて良好。文様は左巻きの三巴文で、珠文数は9。丸瓦部凸面は瓦当面接合後に長軸方向の面取り調整が行われる。凹面はコビキ B 痕の上に布目痕、そして幅約 1 cm ほどの瓦当部方向への板状工具によるオサエが確認できる。瓦当部の接合は1と同様で、凹面長側辺は鋭い刃物での面取りのあと、ナデ調整が行われる。瓦当部背面の接合部分は丹念にナデられる。

64 は表採の燻し軒丸瓦片である。色調は暗青灰色、焼成は極めて良好。文様は右巻きの三巴文で頭部はくびれが曖昧である。珠文数は12。丸瓦部凸面の調整は、瓦当面接合後に長軸方向に細い面取り。凹面にはコビキB痕の上に布目痕を確認、ヘラ調整などの痕跡は丸瓦部の残存率が低いため確認できなかった。接合は1と同様である。

65 は9 G 表土出土の燻し軒丸瓦片である。色調は暗青灰色、焼成は極めて良好。文様は右巻きの三 巴文で頭部は丸く密接し、尾部が長い。珠文数は12。丸瓦部凸面は幅の広い面取りが行われ、その後 丁寧にナデ調整が施される。凹面はコビキB痕、布目痕、瓦当方向への長いナデが確認できる。

66 は7 F 表土出土の燻し軒丸瓦片である。暗青灰色を呈し、焼成は良好。右巻きの三巴文で、圏線は無い。巴は頭部・尾部ともに断面カマボコ形で丸みがあり太い。珠文数は14。珠文をつける際に笵ずれを起こして、楕円形となるものがある。凸面は長軸方向の面取りが行われているようだが、丁寧にナデ消される。接合は瓦当部背面に丸瓦を当てるタイプである。

図		士⁄▽	田台市	珠	文	E				
図版番号	出土地点	直径 (cm)	周縁幅 (cm)	直径 (cm)	数(推定)	頭直径 (cm)	方向	圏線	接合	備考
52	9G II	15	1.6	0.8	6(10)	1.2	R	有	A	
53	9G II	15	1.4	0.9	3(10)	1.2	R	有	В	
54	表土	15.2	2.5	0.8	10	1.2	L	有	В	
55	SD04	16	2.3	0.5	8(24)	1	L	有	В	
56	TP	15.6	2.4	1	9	1.2	L	有	В	
57	8G 表土	16	2.3	1	6(9)	1.2	L	無	В	
58	SD04	15.3	1.8	0.8	23	0.8	L	無	В	
59	SD04	16	2	0,6	10(23)	0.7	L	無	i	
60	SD04	16	1.8	0.8	7(23)	0.7	L	無	В	
61	SD04	_	_	1	_	1.2	L	無	_	
62	攪乱	14.5	2.1	0.8	9	2.1	L	無	В	
63	SD04	16	2.7	0.9	9	1.8	L	無	В	
64	攪乱	15.3	2.5	1.2	12	1.8	R	無	В	
65	9G 表土	16	2.6	1.7	12	1.7	R	無	В	
66	7F 表土	16	2.8	1.5	14	1.9	R	無	В	

第4表 軒丸瓦観察表②

## 軒平瓦(67~87) (第49回, 図版21)

67 は SD04 南裏込め出土の軒平瓦で、色調は燻し瓦であるため表面は黒色、内部は青灰色である。 焼成は良好である。中心飾りは三葉、左右に展開する均整唐草文は3転し、3転目は独立しており巻きが甘い。唐草の巻きは1転目が上へ、2転目は下へ3転目は上へ展開する。唐草は細く展開し、1・2転目は長く、断面は馬の背状に細く高く盛り上がる。瓦当上面は文様区幅のみに面取りが行われ、緩く傾斜する。顎は端部幅約1.8cm、接合部幅2.5cmを測り、しっかりとした台形を呈する。平瓦頭部下面に顎を直角に張り付け接合される。

68 は SD04 表土出土の軒平瓦で、残存部が少なく平瓦部厚 1.6cm を測る。色調は暗青灰色、焼成は良好である。中心飾りは三葉、均整唐草文は 2 転し、中心飾り下部から 67 同様上巻きから展開する。 唐草の巻きはしっかりしている。唐草は幅広く断面カマボコ形に近い。瓦当面上面には面取りが施されるが、角を取る程度のものである。顎の接合は平瓦頭部下面に直角に張り付けられるが、後部から粘土を充填している。

69 は表土出土の軒平瓦で、平瓦部厚は約1.4cm を測る。色調は明褐色、焼成は普通。中心飾りは三葉、均整唐草文は右に1転のみが残る。中心の一葉をのぞいて先端部が外に折れ曲がる。唐草は1点目が下に巻き、67・68 とは展開が異なる。顎の接合は67 と同様で、後部への粘土の充填は少ない。顎の厚さは約1.2cm を測り薄いつくりである。

70 は SD04 裏込め内出土の軒平瓦。中心飾りは三葉と思われ、均整唐草は2転し、珠文が1点付随する。唐草の展開は1転目が下へ巻き、2転目は上へ巻くが、どちらも巻きは弱い。瓦当面上面には幅広い面取りがみられ、瓦当幅全体にわたりほぼ垂直に切り落とされている。周縁は側縁幅3 cm高さ3.5cmを測り、周縁上幅が1.3cmと広くなり下幅は0.3cm程度で極端に狭い。顎の接合は平瓦頭部下面に溝が刻まれ、面に対して直角に当てられる。顎は断面方形に近くしっかりしたつくりである。

71 は SD04 北裏込め出土の軒平瓦。色調は明るい灰色で、焼成は良好、内部は暗灰色となる。中心飾りは残らないが、均整唐草文に三葉の瓦当であろう。展開は下巻きから始まり、2 転目は上へ3 転目は再び下へ大きく巻いている。巻きが大きく特徴的である。瓦当面上面の面取りは確認できず、顎下部の幅が極端に狭くなり、断面は三角形に近い。接合は平瓦部に対して直角に顎を接合する。

72 は顎と平瓦部との接合法のよくわかる 1 点を取り上げた。瓦当面上面に面取りは見られず、色調や焼成は 69 に近い。接合溝は横位に四本刻まれたあと、波状に三本が刻まれる。SD04 表土出土。

73 は SD04 北裏込め出土の燻し瓦で、色調は暗黒褐色内部は灰色で、焼成良好。中心飾りは上からナデが入っており何葉か不明で、均整唐草文は左右に3転する。唐草は71 同様下から展開し、2 転目の巻きが弱いが、3 転目は大きく巻いている。周縁幅は上下ともに 0.6cm をはかり均等である。瓦当上面には瓦当面いっぱいに面取りが行われる。顎部分の接合は上記の軒平瓦同様に平瓦頭部下面に顎を当てる接合である。粘土の充填などはみられず、顎断面はほぼ方形を呈する。

74 は8 F 表土出土軒平瓦で、瓦当面のみの破片である。色調は明褐色、焼成は甘い。中心飾りは三葉で、均整唐草文は3 転確認できる。中心飾りは二本の線により表現され、中心の子葉は先端がつぶれる。唐草の展開は69 同様下から始まり、3 転目は上に巻き、いずれも強く巻いている。瓦当面上面には大きく面取りが行われている。接合は67 などと同様で、顎断面は方形に近い台形である。

75 は8 F 表土出土で、色調・焼成ともに73 に似る。瓦当上面の面取りや文様など近似しており、

中心飾りは五葉に復元でき、均等唐草は3転する。顎は若干薄く作られるが、接合に伴うナデは強く 行われ、73と同様な調整・成形を踏襲している。

76 は SD04 表土出土軒平瓦で, 色調は灰色を呈し, 焼成良好で内部は明灰色である。中心飾り, 均等唐草, 調整, 成形, 面取りなどは 73 や 75 を踏襲している。

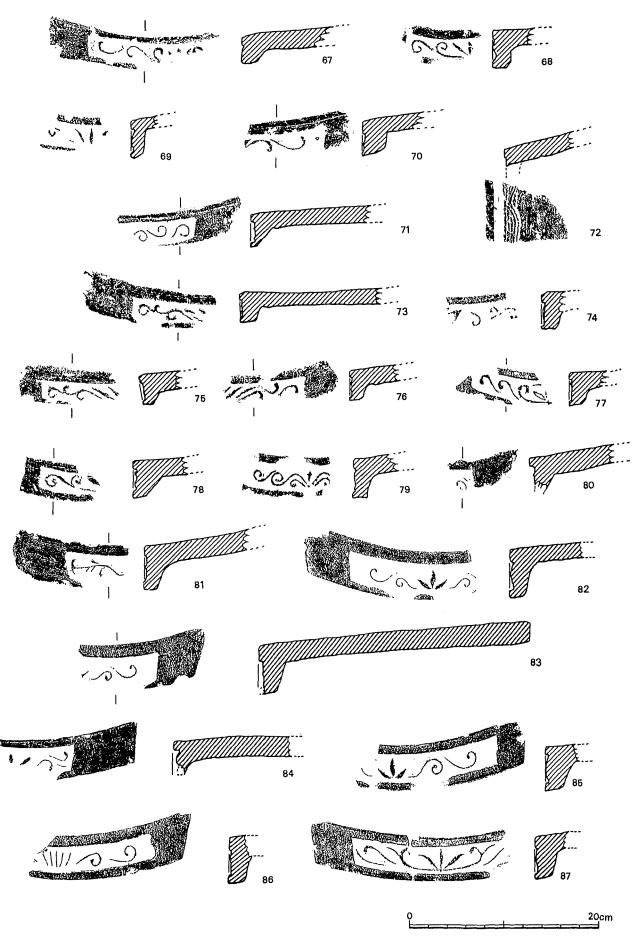
77 は試掘調査時出土。色調は暗灰色、焼成は良好で、内部は灰色である。中心飾りに三葉、左右に3 転する均等唐草をもつ。三葉の表現は74 と共通する。唐草の展開は1 転目は上に、2 転目以降は下に展開する。1 転目先端が二股に分かれていることが特徴で、68 と同様に太い線である。文様幅は復元17cmを測り、縦幅は2.2cmである。顎断面は台形であり、平瓦頭部下面に顎を当て接合している。

78 は試掘調査時出土。色調は明茶褐色、焼成は普通である。文様・調整・面取りなどは 68 と共通 して、比較的太い線で唐草が表現される。

79 は SD04 表土出土。色調は青灰色、焼成は良好。中心飾りは先端が菱形を呈する一葉、左右に3 転する均整唐草をもつ瓦当片である。1・2 転目は中心飾り下部から延び、1 転目が下に展開するのに対して、2・3 転目は上に展開する。周縁幅は上幅が広く下幅が狭い。瓦当上面は細く面取りされている。顎の接合は平瓦部下面に当てており、顎後部に粘土は充填されず、断面方形を呈する。

図	出土	,tiet	-tt-		文格	兼 区				ŧ	草		接	瓦当面	
図版番号	土層位	幅 (cm)	高さ (cm)	中心		幅	高さ	反転数	線種	巻き	連続性	子葉の	合	上面の	備考
号	位			文様	線種	(cm)	(cm)	人和级	ルバ生		XE/1961_1_	有無		面取り	
67	SD04 II	27.6	3.3	三葉	太	19	2.3	3	細	弱	不連	無	A	有	
68	SD04 I	15 ~	3.4	三葉	太	13.6	2	2	太	強	1~2連	無	A	有	面取り小
69	表採	-	3.4	三葉	太	_	2.4	$2\sim3$	太	強	不連	_	A	無	
70	SD04 II	$24 \sim$	3.5	三葉	細 2	16.8 ~	1.9	2	細	弱	不連	無	A	有	
71	SD04 II	26~	3.3	_	_	16~	2.1	3	細	強	不連	無	A	無	
73	SD04 II	29	3.1	五葉	太	17	1.9	3	細	弱	不連	無	A	有	
74	8F I	_	3.5	三葉	細2	16~	2.2	3	細	強	連続	無	A	有	
75	SX01	22	3.1	五葉	太	17	1.8	3	細	強	連続	無	A	有	
76	SD04 I	27	3.1	五葉	太	17	2	3	細	弱	連続	無	A	無	
77	TP	_	3.4	三葉	細2	17	2.2	3	太	強	不連	無	A	有	
78	TP	16~	3.7	三葉	太	14	2.2	2	細	強	連続	無	A	有	
79	SD04 I	_	4.2	一葉	細1	14	2.3	3	細	強	連続	有	A	有	面取り小
80	8F I	_	_	_	-	_	_		_	_	不連	_	A	有	笵切り
81	7F I	14~	4.5	_	_	12.4 ~	2.6	_	-	-	不連	有	A	有	<b>范切り</b>
82	TP	28	4.8	三葉	太	18	3	2	細	強	不連	無	A	無	
83	7F I	28	4.8	三葉	太	18	2.8	2	細	強	不連	無	A	有	面取り小41と同2
84	8F I	27	4.3	三葉	太	13	2.6	2.5	細	弱	不連	無	A	無	笵切り
85	9G I	29	4.7	三葉	太	22	2.7	2	細	強	不連	無	A	無	
86	7F I	29	4.7	五葉	細	20	2.6	2	細	強	不連	無	A	無	
87	SD04 I	29	4.2	三葉	細	19	2.7	2.5	太	弱	連続	有	A	有	面取り小、笵切り

第5表 軒平瓦観察表②



第49図 軒平瓦②(S=1/4)

81以下は上記と比べ瓦当面が大きいものである。81は7F表土出土。暗灰色を呈し、焼成の良好な燻し瓦である。笵を切っており、文様先端部分の表現は失われている。文様の全容は不明であり、唐草の一種としておきたい。顎の接合は上記と同様に、平瓦頭部下面に当てるタイプであるが、顎後部に粘土を充填し、接合部は緩やかに立ち上がる。67のような顎後部に対する強い横ナデはみられない。

82 は試掘調査時出土の燻し瓦である。色調は暗褐色、焼成は良好である。中心飾りは三葉で、左右に2転する均整唐草を有する。中心の三葉の断面は丸く盛り上がる三角形で、左右対称で非常に整っている。唐草の展開は下から始まり、2転目は上で巻いている。2転目の巻きは1転目より強いが、先端部の巻きは弱くなる。

83 は7 F 表土出土の燻し瓦。色調は明灰色を呈し、焼成は良好である。残存率が高く、平瓦部長さは28.5cm を測る。文様や周縁などは82 を踏襲する。凹面凸面ともに長軸方向のナデが加えられたあと、最終的には幅2 cm 以上の横ナデが施される。顎の接合は平瓦頭部下面に当てる接合であるが、顎後部は強い刷毛目(幅1.2cm 細目の刷毛)が見られる。

84 は8 F 表土出土の燻し瓦である。桟瓦の平瓦部と思われ、色調は暗褐色、焼成良好で、内部は灰色を呈する。中心飾りは三葉、3 転する均整唐草文をもつが3 転目は笵の切断によって失われる。唐草は下から展開し、2・3 転目は上に展開している。

85 は9 G 表土出土の燻し瓦である。色調は明灰色で焼成良好、内部は灰色である。中心飾りは三葉で、断面は半円に近いカマボコ形である。均整唐草文は細く、巻きが大きい。唐草の展開は1 転目が下に、2 転目は上に強く巻く。顎の接合は83 と同様であるが、顎後部に粘土を充填しており、断面は台形である。顎背面には83 同様強い刷毛目が残る。

86 は7 F 表土出土。色調は暗灰色で内部は明灰色、焼成良好である。中心飾りは五葉で直線的な表現である。均整唐草文の展開は1 転目が下に、2 転目は上に巻き、大きく巻き込んでいる。平瓦部下面に顎を当て接合しており、顎後部には83 や85 同様に横位の弱い刷毛目がみられる。

87はSD04南表土出土。色調は灰色で、焼成良好。中心飾りは三葉で左右の葉は端部が外に広がる。唐草の展開は1転目が中心飾り下部から連なり上に展開し、先端部に子葉が延びている。2転目は下に展開し、3転目は笵の切断によって失われる。顎は同様に平瓦部に当てて接合されており、断面は方形である。

## **丸瓦(88~100)** (第50~54 図, 図版22)

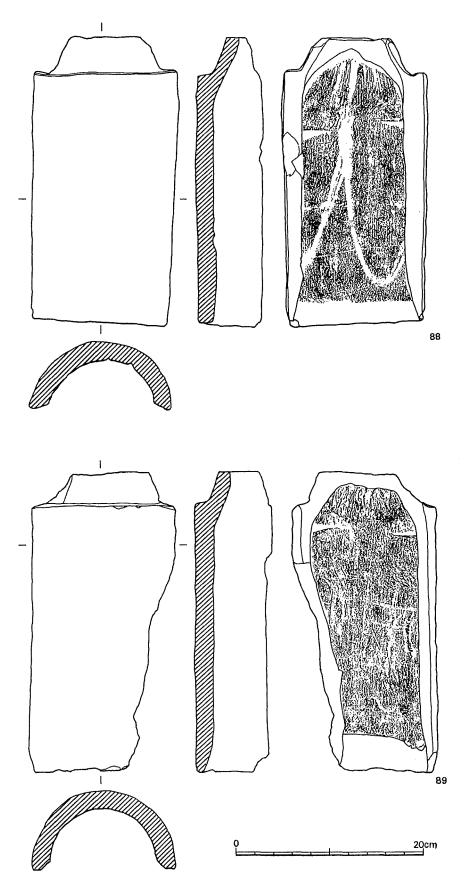
88 は 7 F 表土出土の燻し丸瓦の完形品である。長さ 26.2cm, 玉縁長 4.7cm, 頭部幅 14.5cm, 尻部幅 15.3cm を測る。暗青灰色で、焼成良好であり、尻端部には離れ砂がみられる。凸面はヘラ状工具により長軸方向に調整が行われ、頭部尻部ともにヘラにより細く面取りされ角が落とされている。凹面はコビキ B 痕の上に布目痕が見られ、中心から左右に吊り縄の深い痕跡がみられる。吊り縄上部は布目痕内部に縫い込んでおり、玉縁部分では細い溝ができその内部に布目痕が観察できる。粘土板の接合の甘い部分が中央左に横位で観察できる。凹面長側辺の面取りはヘラ状工具により一気に行われ、長側辺端部のみは角を取る目的で細く面取りが施される。玉縁部凹面および側縁の面取りも行われる。頭部凹面の面取りは右から左へ幅広く行われる。

89 は SA02 北 Ⅱ 層出土の完形に近い燻し丸瓦片である。長さ 27.8cm, 玉縁長 3.2cm, 頭部幅 15.3cm を測る。焼成は良好で暗青灰色を呈する。凸面の調整や端部の面取りは 88 と同様である。凹面はコビ

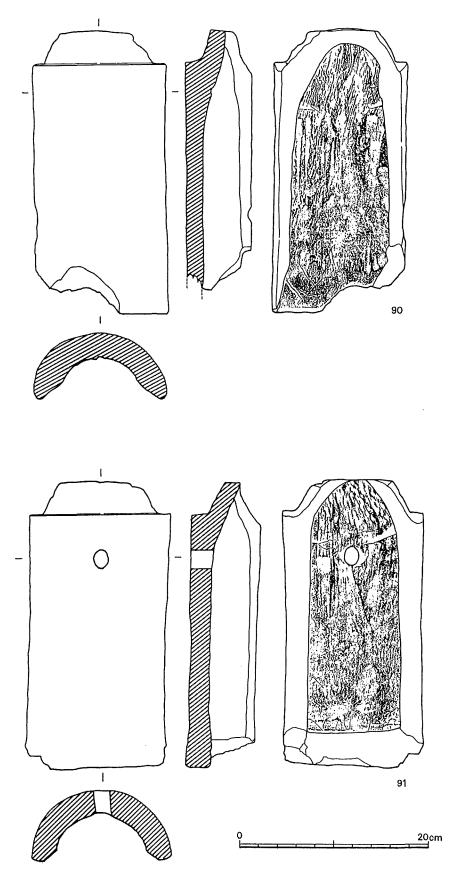
キB痕の上に布目痕がみられ, その上に部分的に荒いナデ調整が施される。凹面長側辺の 面取りは玉縁部分まで一気に 行い,その後長側辺のみをも う一度面取りしている。頭部 凹面の面取りは右から左へ幅 広く行われる。

90は7F試掘坑出土でこれ も完形に近い燻し丸瓦である。 長さ26.3cm, 玉縁長3.5cm, 頭 部幅 14.1cm を測る。88 と同様 な調整・面取りであるが、吊 り縄がみられず,端部の丸い 板状工具によるオサエが施さ れている。88・89と異なり、 玉縁側辺と丸瓦部長側辺上部 を同時に幅広く面取りし, そ の後凹面長側辺の面取りを行っ ている。この点は91~95 に ついても同様である。また, 焼成があまく硬質でなく,色 調は表面は燻しにより黒褐色 に近いが, 内部は灰色を呈す る。頭部凹面の面取りは左か ら右へ幅広く行われる。

91 は7 F II 層出土の軒丸瓦 片で, 瓦当部は失われる。長 さ26.3cm, 玉縁長3.5cm, 頭部 幅14.1cm, 尻部幅14.9cm を測 る。接合は瓦当背面に丸瓦部 を当てるタイプの接合で, 丸 瓦部側の接合面に弧状に溝が 刻まれている。色調は90と同 じく, 焼成も燻しにより黒褐 色に近く, 内部が灰色を呈し, やや軟質である。調整・面取



第50図 丸瓦②(S=1/4)



第51図 丸瓦③(S=1/4)

りは90と同様であるが、凹 面内部釘穴付近に板状工具 による長さ7cmほどのオサ エ痕が2本残る。釘穴は凸 面側から穿孔されている。

92 は SA02 北 II 層出土燻 し丸瓦片である。色調・焼 成・調整・面取りは 89 を基 本的に踏襲している。凹面 には吊り縄・ヘラ調整など の痕跡は見られず,コビキ B痕による切り離しのあと, 布等をかぶせた模骨によっ て形成している。頭部凹面 の面取りは右から左へ幅広 く行われる。

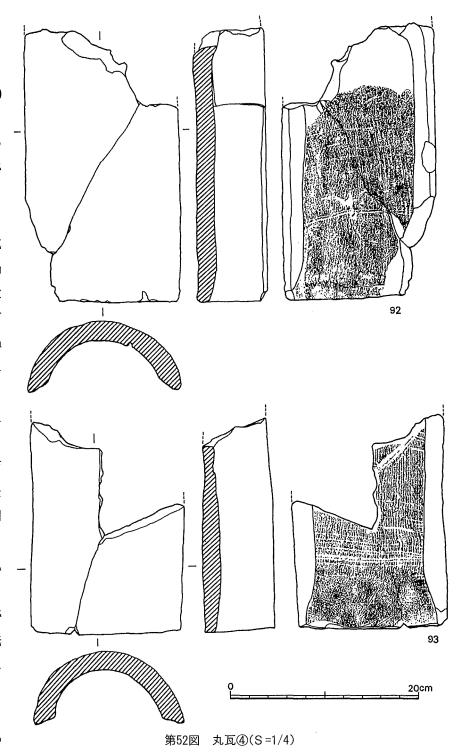
93 は9 G Ⅱ層出土燻し丸 瓦片である。尻部幅 15.9cm を測る。色調・焼成・調整・ 面取りなどは 88 を基本的に 踏襲している。しかし,コ ビキA痕が深く数が多く, 吊り縄は上半にみられる。 頭部凹面の面取りは右から 左へ幅広く行われる。

94 は7 F 試掘坑出土燻し 丸瓦片で,色調・焼成とも に90 同様である。頭部幅 13.5cm,玉縁長23cmを測る。 凸面・凹面の調整や凹面長 側辺の面取りも基本的には 90 を踏襲する。凹面内部は 釘穴以下に幅15cmほどの板 状工具でのオサエ痕が中心 部を主として行われる。

95 は7 F 試堀坑出土燻し 丸瓦片である。頭部幅 13.6 cm, 玉縁長 2.4cm を測る。 色調・焼成ともに 90 同様, 調整・面取りは基本的に 90 を踏襲している。しかし, 凹面内部では幅 1.5cm ほどの 板状工具によるオサエ痕が 全面に確認される。

96 は7 F試掘坑出土燻し 丸瓦片である。色調・焼成 は88・89と同様である。凸 面調整は長軸方向のヘラ状 工具による面取り調整,釘 穴脇に長軸4.3cm,幅1.7cm の刻印が押される。刻印に は押印後にヘラやナデによっ て調整が行われ一部が消え ており,判読不明である。 釘穴は隅丸の円形で,凸面 側から穿孔される。凹面長 側辺の面取り調整は89と同 様に2 段階で行われる。

97 は9 G表土出土燻し丸 瓦片である。色調・焼成と もに88・89 と同様であるが やや明るい。接合部には浅 い櫛状の工具により弧状に 溝が刻まれる。凹面には吊り 縄がみられその左右では布目 痕の状況が異なり、布の合わ せ目と思われる。



98 は丸瓦玉縁付近出土で、色調は黒褐色、焼成は良好である。凸面の調整は長軸方向のナデ調整、 凹面はコビキ B 痕の上に布目痕および縄による編みが確認できる。凹面長側辺から玉縁にかけて一気 に面取りする。99・100は98と同様の色調・焼成・調整・成形を踏襲し、布目痕や縄目なども近似する。

## 平瓦(101) (第54回, 図版23)

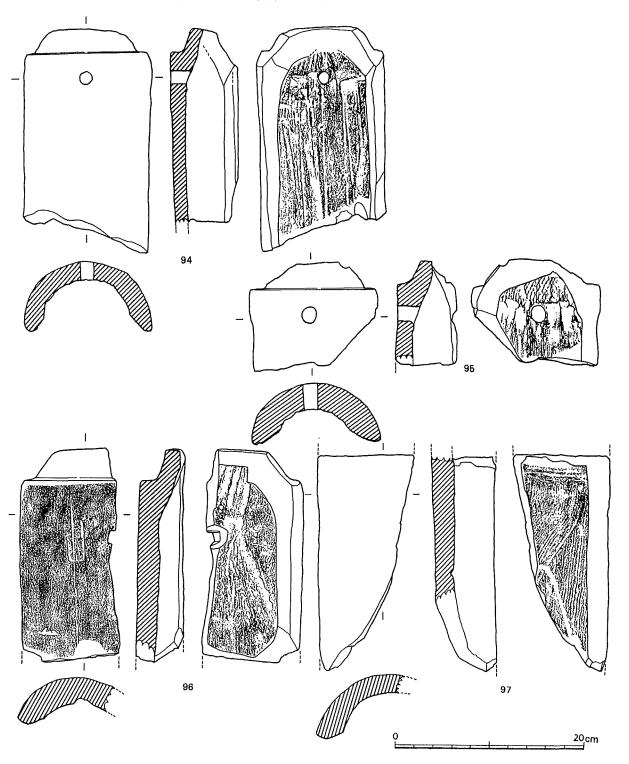
**101** は平瓦で長さ 28.7cm, 幅は復元で約 24cm を測る。凹面・凸面とも調整はナデによる。側面には面取りの痕跡がみられる。

## 鬼瓦(102・103), 輪違い瓦(104) (第54図, 図版23・24)

**102** は鬼瓦端部で幅 1 cm の断面 V字の沈線がみられる。内面の調整は幅 2 cm ほどの板状工具により、長軸方向を主として調整される。

103 は鬼瓦脚部の「かえり」部である。厚さが 4.5cm を測り、内面調整は指ナデである。

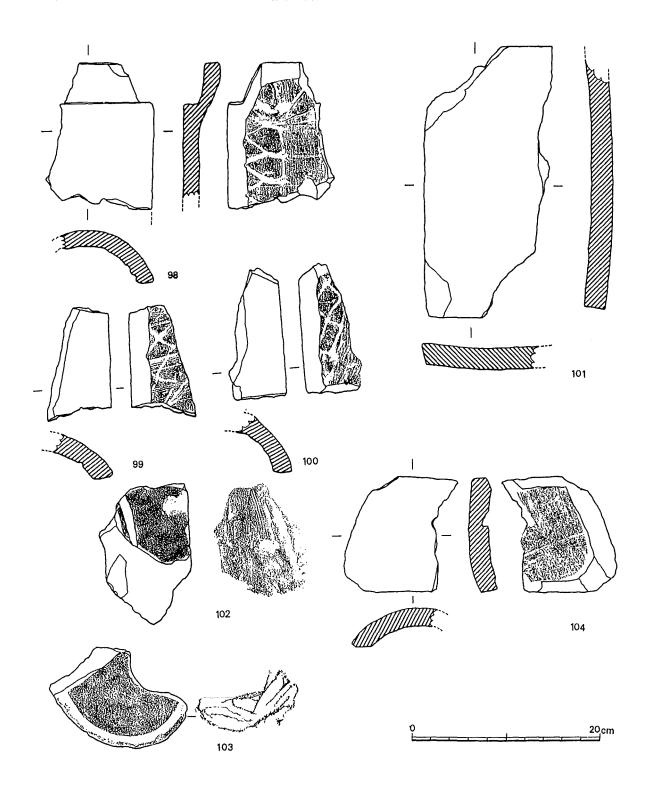
104 は輪違い瓦で、平面は平行四辺形である。凸面の調整は指ナデ、凹面の調整はコビキB痕の上に布目痕が確認できるが、指ナデにより曖昧になる。



第53図 丸瓦⑤(S=1/4)

## 刻印付き瓦(105~114)(第55図,図版23)

105 は丸瓦で凸面に刻印が1つ押される。106 以下は桟瓦片と思われ,106~108 は表面に,109~113 は側面に刻印が押されている。刻印の大きさは107が1辺1.5cmの方形でもっとも大きく「臨」とある。105・106・108 などは小さく,110・111・113 は菊花で113 は半分のみ顔を出している。109 は「本家」と判読できる。114 は平瓦左端の結合部分である。



第54図 丸瓦⑥, 平瓦, 鬼瓦②, 輪違い瓦(S=1/4)

## まとめ

#### A 軒丸瓦の分類

軒丸瓦については、圏線の有無により分類される。  $1 \sim 8$  (第 42 図) や  $52 \sim 56$  (第 47 図) は圏線を有し、 $9 \sim 27$  (第  $42 \cdot 43$  図) や  $57 \sim 66$  (第  $47 \cdot 48$  図) は圏線を持たない。前者を有圏群、後者を無圏群と大雑把に分類しておく。以下は珠文数や巴の形状を基準に整理したものである。

## 有圈群

有圏-1 (第 42 図 8, 第 47 図 52・53): 珠文径が小さく10を数えるもので、巴頭部径が小さく線が細く、尾部が長い。右巻きの三巴。直径は15cmを超えず、三巴文直径は7.3cmを測る。周縁幅は1.7cm以下を測る。

有圏-2(第42図**1・6**, 第47図**55)**: 珠文径が小さく, 数が多く, 巴頭部径が小さく, 頭部との 境が明瞭ではない。

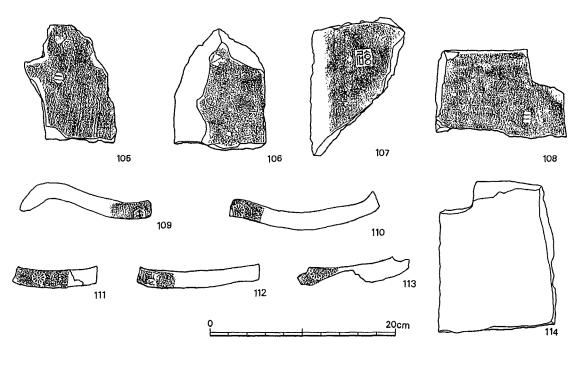
有圏-3 (第 42 図  $2\sim7$  ,第 47 図  $52\cdot54$ ):珠文数は 10 前後あり,直径は 1 cm を超えるものもある。三巴は頭部径が大きく,尾部が細くなるもの。

## 無圏群

無圏-1(第 47 図 58  $\sim$  60): 珠文径は 1 cm 以下,数は 20 を超え,頭部径が小さく尾部にかけ細い。 無圏-2(第 42 図 9  $\sim$  12  $\cdot$  14  $\cdot$  15): 珠文径は 1 cm 以下,数は 17 前後を数え,巴頭部径が小さく, 尾部にかけて細い。

無圏-3(第 43 図  $17 \sim 26$ , 第 47 図 57): 珠文径は1 cm 以下,数は9 前後を数え,巴頭部径が大きく,頭部との境がはっきりしている。

無圏-4(第 48 図  $62 \sim 66$ ): 珠文径が 1 cm を越え、数は 10 を超え、頭部径が 1.5cm を越え、線が太く、頭部との境がはっきりしている。



第55図 刻印付き瓦(S=1/4)

コビキ A 技法が 1 および 9 で確認されており,有圏 -2 群および無圏 -2 群は相対的に古く位置づけられる。有圏 -2 及び無圏 -2 群は珠文数が 14 以上を数え,頭部径が小さく尾部との境が明瞭ではない。無圏 -4 群は出土量がもっとも多く,巴頭部と尾部との境がはっきりしており,残存率が良好な破片が多いため,出土品中もっとも新しい時期に位置づけておく。

三巴の形状を基準として整理すると、巴頭部径が小さい一群から巴頭部径が大きくなり、尾部が短くなるという形態的な変遷が大きな流れとして想定でき、有圏-1群から無圏-4群までを相対的な流れとしてとらえることが可能である。

#### B 軒平瓦の分類

軒平瓦については瓦当面の大きさと均整唐草の形態を基準として以下に分類を試みた。瓦当幅及び高さが大きな部類(第IV群:第44図28,第49図81~87)と小さい部類(第I~III群:第44図29~34・37~43,第49図67~79)とがある。中心飾りは三葉が多く,宝珠文,一葉,五葉などは少ない。均整唐草の形態の形態的特徴を整理すると,以下の4群に分類される。

I 群:均整唐草が基本的に3転するもの。

- I-1(第44図41⋅42, 第49図71):巻きの強い均整唐草が3転し、不連続であるもの。
- I-2 (第 44 図 33, 第 49 図 67): 巻きが弱い均整唐草で、3 転し、不連続であるもの。
- I-3(第44図29, 第49図73·75):巻きの弱い均整唐草が連続して3転するもの。
- I-4(第49図74·76·77):均整唐草に崩れがみられるが、連続して3転するもの。

Ⅱ群(第 44 図 32, 第 49 図 70):巻きの弱い均整唐草で、連続せず、3 転目が無く珠文となるもの。 Ⅲ群(第 44 図 30・31, 第 49 図 68・78)巻きの弱い均整唐草で、連続し2 転するもの。

Ⅳ群: 瓦当面が大きくなる部類で、唐草の展開は2転を基本とする。

IV-2(第49図82・83・85):均整唐草が不連続で2転で終わるもの。

瓦当片の顎の断面形態はⅠ群などは断面方形に近いが、Ⅲ群やIV群では断面台形に近づいており、 文様のみの変遷ではなく形態的変遷も兼ね備えた分類であろう。相対的な変遷としては、Ⅰ群からIV 群への流れを想定しておく。

## C 創建時代の瓦

上記の分類から、創建時代(1617年~1667年)の三ノ丸屋瓦として、丸瓦は有圏-1群、平瓦はI-1群を想定しておきたい。桟瓦の出現は1715年であり、三ノ丸では明確な桟瓦の資料が確認できないために、採用時期の判断および近似する瓦の状況を把握できない。また、創建時代の瓦生産の状況については、日野江城跡や原城跡などの資料が整い次第より具体的に整理していきたい。

#### 参考文献

森田克行編 1984 『摂津 高槻城 本丸跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会 市本芳三「瓦」1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 森郁夫 2001 『瓦』ものと人間の文化史 100 法政大学出版局

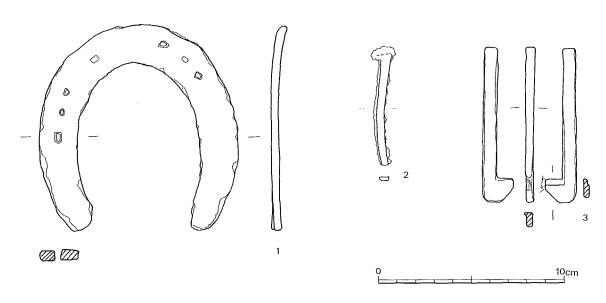
## 5 鉄製品・銅製品(1~3) (第56図)

1は鉄蹄で、最大幅 10.5cm、長さ約 10.9cm、厚さ最大 0.5cm、重量約 150g を測り、側面展開図では上半が緩やかに反っている。釘穴は7カ所確認され、いずれも方形で実測図前面から打ち込んだものと思われる。腐食が激しく、その他の釘穴は未確認である。SD04 覆土出土品で、廃城に伴い混入したものであろう。

2 は断面方形を呈する鉄釘で、1 の鉄蹄とともに馬具として利用されていた可能性がある。同様な形状の鉄製品は複数本 SD04 覆土から出土しているが、1 点のみを図示した。残存長約 7 cm、先端は折れている。頭部は小さく方形を呈して、先端にかけてやや細身となる。

**3** は銅製の門金具で完形品である。長さ 8.3cm,幅 0.7cm,厚さ約 0.4cm を測り,重量は約 17g である。軸部は実測図の断面で確認できるように端部が反っている。先端部はL字に直角に曲がり,側面に方形の切り込みがみられる。L字部の先端は擦痕が確認される。

この他に図示出来なかった遺物で注目すべきものは弥生中期丹塗り土器片、須恵器大甕片などがみられる。



第56図 鉄製品・銅製品(S=1/2)

# 第4章 まとめ

森岳城跡の発掘調査は今回が初めてである。これまで絵図面等でしか窺えなかった城内の構造が、 具体的なカタチで姿を現した。ここでは調査で確認された遺構と遺物について簡単なまとめを行い、 全体を総括していくことにする。なお、調査の過程で判明した森岳城の城割や占地、城下町の変遷に ついては、第5章で詳細に検討を加えることにした。

調査が行われた三ノ丸は現在文教施設が大半を占め、堀で明確に区別された本丸や二ノ丸とは遺構の残存状況が全く異なる。地図上で三ノ丸の範囲は特定できるものの、藩主屋敷の外回りについては島原高等学校正門付近の石垣をもって想定するしか術がなかった。今回調査の最大の成果は堀石垣を確認できたことにある。

築城当初三ノ丸に堀はなかったようで、寛永12年に描かれた『島原城之図』にもみられない。この頃 松倉氏は内枡形を多用した本丸に居を構えていたのであろう。旧来有馬氏の支配下にあった島原へ入 封するのに際し、在地勢力とは無縁の存在である松倉氏は求心力の強い城郭プランを持ち込むことで、新しい権力者としての威光を示そうとしたことが窺える。千田嘉博氏の言葉を借りれば、「統一政権の権威を背景に、独力ではなしえなかった中世的慣行や家臣の自立性や在地性を打破していった」松倉氏の施政を「必然的に大名が居住した主郭を頂点にした求心的な城郭・城下町プランに結実した」(千田2000)森岳城の築城にみることができよう。

三ノ丸に堀が築かれた記事は『深溝世紀』(巻八烈公中)にみられる。「延宝元年(寛文十三年)七月八日, (中略)寛文中月城外に大洿を穿つ。或るひと之を幕府に讒して曰く,主殿頭九国監察の寵を恃み,其の居る所に隍を穿ち以て城壁に擬すと。」とあり,高力隆長に代わって福知山から入封した松平忠房治世中のこととされる。これ以降の絵図ではどれも三ノ丸の東辺と南辺に堀が描かれていることから信憑性は高い。堀の幅は六間といわれている。

調査で検出された堀石垣(SD01)は三ノ丸東辺のもので、南北にのびる。全体規模は知り得ないが、長さは30m以上、幅は10m以上はあったと思われる。ただし本丸や二ノ丸を囲む堀のように地中深く掘り下げるのではなく、浅い簡易なものであったのだろう。調査でも地山を深く掘り下げた形跡は全くなかった。築石に用いた石材が堀内部からはほとんど出土せず、堀石垣はそれほど高い石積みではなかったと考える。絵図では石垣の上に漆喰の白塗り壁が取り付くようである。

堀が東と南に設けられた理由については、地形的に南東方向へ緩く傾斜していることと、大手門や 先魁門、田町門からの動線を意識したものと考える。外から入城する者に対して視覚的に正面性を印 象づける「ヴィスタ」(堀田 1995)の理念を取り入れたのではなかろうか。

堀の中にある SP01・SP02 については橋脚と考えた方が妥当であろう。『深溝世紀』(第九烈公下)には「元禄四年六月三日月城前門外の板橋の修造成る。酒井太郎左衛門をして初めて度らしむ。(中略)初め月城に火あるや(延宝五年) 巳に殿閣屏墻を営み、其の後溝渠を浚えて以て橋を建つ。是に至って西邊に柵を植て其の形状を壮大にす。」との記事がみえる。三ノ丸には複数の橋が架けられており、どの橋の記録かは不明ながら今後検討に値する史料といえる。

検出された石組み遺構については、江戸の遺跡調査例等から穴蔵のひとつと考えられる。古泉弘は 地中に部屋を設けた遺構を「地下室」と呼び、大きく五群に分類しているが、石組みの穴蔵は第V群に 相当する(古泉 1990)。使用目的は不明なものが多いが、土蔵のように器物や穀物の収蔵保管には用いないとされ、大名藩邸内の穴蔵は災害時の非常用施設として用いられた可能性を示唆している。なお、石組みの壁面に常設の階段はなく、穴蔵への昇降には梯子が用いられていたと考えられる。

上屋の存在については、具体的な遺構の検出に至らず言及できない。本遺構と主軸方位を同じくする礎石列(SA01)が 2.3m 東側にあり、関連性をうかがわせるものの推測の域を出ない。穴蔵は庭や中庭、土間など床のない部分に配置されていたという事例もあるようで(古泉 1990)、今後の検討を要する。考古学的には地下室の年代は十七世紀後半以降と推定される例が多いとされ、本遺跡の場合も、遺構の出土遺物からみて妥当な年代観といえよう。

今回検出した主要遺構の主軸方位を図表に示した(第 57 図)。これを見ると、大きく 2 つの傾向がうかがえる。 1 つは古丁筋・鉄砲町筋と主軸方位を同じくするグループで、SV09、SD01・02、SA01、SH01 が相当する。古丁筋は真北から N18°30′W をとり、森岳城外郭線の主軸と同一である。築城当初の城割の計画線であり、時期的に 17 世紀前半代と考えられる。

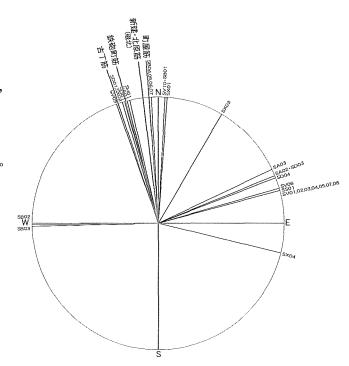
鉄砲町筋は松平忠房入封時に造営されたと伝えられ、N14°30′Wをとる。第58図はこの時の主軸方位を基準に6 m(20尺)単位で細分化したもので、遺構の大半がこの地割線をもとに構築されていると推察される。時期的には17世紀後半以降になる。また、これを東へ90°振幅させたSA02・03、SD03・04、SV06、SS01、SV01 ~ 05・07・08 も基本的には同じと考える。

2つめは真北から N 3°30′W をとるグループである。森岳城から大手川を挟んだ南側は中世期の在地土豪・島原氏が居を構えた「浜の城」があったところで,古くから町屋が営まれていた。SB04~07はその町屋筋に近似した主軸方位をとり,これから西に 90°振れた SB02・03もほぼ同様のことがいえる。SB02~07は中世の掘立柱建物跡であり,町建てがほぼこの主軸線に沿って行われていたと仮定すれば非常に興味深い。松倉氏は入封に際し,中世・島原氏の拠点に独自の城割を持ち込むことで人心の一新と在地性の封じ込めを行ったのではないだろうか。

出土した遺物のピークは概ね3時期あり、それぞれ15世紀後半~16世紀前半と16世紀後半~17世紀初頭、17世紀後半以降に比定される。三ノ丸の殿舎は延宝5年(1677)の火災で焼失したと記録にあり、検出された遺構の大半はその後再建されたものという見方をとりたい。個々の遺構に多少の先後関係はあるものの、17世紀後半以降の年代が与えられよう。

16世紀後半~17世紀初頭は在地土豪・島原氏に係わる遺構・遺物と考えられる。掘立柱建物跡群がこれに相当し、ごく限定された短期間のうちに建て替えられていたようである。天正12年(1584)には沖田畷の戦いがあり、島津・有馬連合軍は森岳に本陣を構えて龍造寺隆信を迎え撃ったとされることから、そのことも視野に入れておく必要が有ろう。

15世紀後半~16世紀前半は有馬氏の全盛期にあ



第57図 主要遺構の主軸方位

たり、有馬貴純・晴純が肥前国全体に版図を拡大していた頃である。文明6年(1474)には島原半島の 在地勢力を従えて大村へ侵入を果たしたとされ、その中に島原純延の名もみえる。三ノ丸の北辺(島原 高等学校北門に隣接する民家)には天文年間の銘を刻んだ石塔があり、出土遺物からもこの一帯の歴史 が戦国時代初期まで遡ることがわかる。

紙面の都合で全体総括には程遠い内容となったが、後日改めて稿を起こし、その責を果たしたい。

## 引用・参考文献

入江清 1972 『島原の歴史 藩政編』島原市役所

古泉弘 1990 『江戸の穴』 栢書房

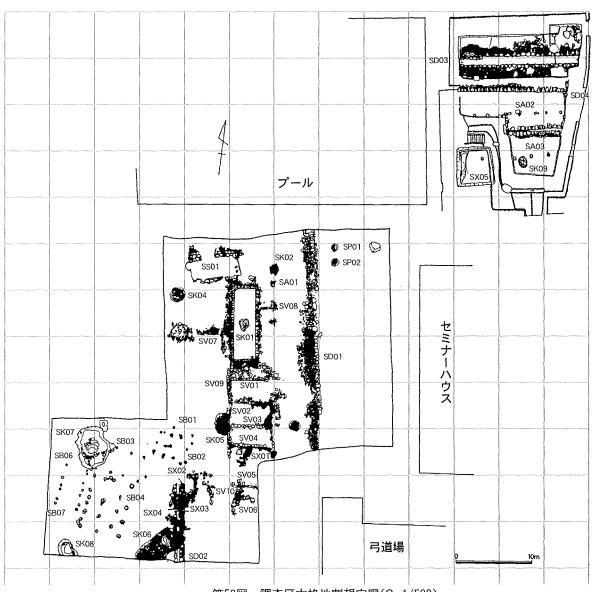
外山幹夫編 1980 『日本城郭大系』17 長崎・佐賀 新人物往来社

千田嘉博 2000 『織豊系城郭の形成』東京大学出版局

林銑吉編 1954 『島原半島史』長崎県南高来郡市教育会

堀田浩之 1995 「城郭の空間特性と表現手法に関する一考察」 [塵界] 兵庫県立歴史博物館紀要第8号

宮武正登 1998 「肥前名護屋城に見る豊臣秀吉の築城観」『城郭研究室年報』Vol.8 姫路市立城郭研究室



第58図 調査区方格地割想定図(S=1/500)

	主	西暦	年号	月	日	森 岳 城 関 連 事 項	歴史事項
		1584	天正 12	3	24	沖田畷戦で森岳の丘を有馬・島津軍の本陣とした	慶長 5 関ヶ原の戦
	1		慶長 19		21	有馬直純 日向延岡に転封	オランダ船リーフデ号豊後漂着
_	-+			6	<u> </u>	領主として松倉重政 入封	慶長17 キリシタン禁止 (直轄領)
		1616	元和2		20	中国以外の外国来航,長崎と平戸に限定	後戌17 イリングン示止 (世特限)
	-	1618	元和 4	0	40	森岳城築城に着工	
ļ	重政			-			
. (	以	1624				島原城(森岳城)完成	
松		1627	寛永 4		3	キリシタン信者 16 人を雲仙地獄に投じる	
松倉		1630	寛永 7	L		マニラを攻撃するため偵察船二隻を派遣	
		1635	寛文 12		3	島原城之図	
1	<b></b>			10		島原の乱勃発で九州諸大名に動員令(幕府)	寛永 14 漢訳キリシタン書籍の輸入禁止
- [	重次	1637	寛永 14	10	25	島原の乱(~ 1938)	(御禁書)
İ						天草・島原の一揆(五人組による取り締まり強化)	
				2	28	原城陥落	
		1638	寛永 15	4	12	松倉重次氏の所領没収	寛永 16 ポルトガル船来航禁止
l				11		領主として高力忠房 入封	寛永 18 オランダ商館,出島へ移す
	忠		4			幕府九州諸藩に対し、石高に応じて島原半島への農民移	
高	忠房	1642	寛永 19	5		住を命ずる	
別	0	1649	慶安4	-		幕府四国小豆島の住民を島原半島に移住させる	
7,		1650	慶安5			島原小浜村に櫨が移植される	
1	17.52	1000		0	_		
ĺ	隆長	1668	寛文8	6	0	高力隆長仙台に追放される	
-	区		<del> </del>	b	8	領主として福知山から松平忠房入封	
Ì		1674	延宝2	2	1	桜町の大火(三の丸一部残し焼失)	
1			1	6	4	諫早田町二門の瑣籥を以てその闔闢を監せしむ	
		1675	延宝3			島原領内に悪疫流行	
		1684	貞享元			肥前国嶋原城絵図	
1	rta l	1689	元禄2	7	10	肥前国島原城石垣破損所図	元禄1 唐船の長崎来航を70隻に制限
	忠房	1691	元禄4			島原藩で小浜村に初めて甘藷を栽培	
ļ	<i>D</i> 5	1692	元禄5	6	3	城前門外の板橋の修造成る	元禄3ケンベル(ドイツ人)出島商館医来崎
						公第邸を田屋敷(田町)に営み大いに園地を鑿ち,退養	
		1693	元禄 6	7	20		
			70,44	'		屋敷と名づく	
		1695	元禄8	5	11	肥前国島原城石垣破損所図	
松平				1	3	肥前国嶋原城石垣崩修覆願図	
平		1700	元禄 13	-	10	島原城外曲輪石垣崩修覆願ノ添図	
ı		1706	空永 3	10	21	嶋原城堀石垣崩所之絵図	
	忠	1700		10	21	島原藩が2年にわたり領内検地を実施し『大概様子書』	
	雄	1707	宝永 4			一方の金がる中にわたり原門仮地を美地し『八城塚丁音』 を作製	
			7771/ 4		i		
	,		ŀ	2		自居った田市仲が却えて	
		1719	享保 4			島原で渋川事件が起きる	支に「 よりっし 世の かる かっかっかっ
		1719 1720	享保4			島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出	享保5 キリスト教以外の洋書輸入許可
		1719 1720 1737	享保 4 享保 5 元文 2	6		島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる	享保5 キリスト教以外の洋書輸入許可
		1719 1720 1737 1744	享保 4 享保 5 元文 2 延亨元	6 8		島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩領内に櫨樹10万本を植える	享保5 キリスト教以外の洋書輸入許可
	忠刻	1719 1720 1737 1744	享保 4 享保 5 元文 2	6 8		島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる	享保5 キリスト教以外の洋書輸入許可
	忠刻	1719 1720 1737 1744 1746	享保 4 享保 5 元文 2 延亨元 延亨 3	6 8		島原藩製の蝋 2 万 1864 斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩領内に櫨樹 10 万本を植える 島原藩で 5 ヶ年の倹約令を出す	享保5 キリスト教以外の洋書輸入許可
		1719 1720 1737 1744 1746 1749	享保4 享保5 元文2 延亨元 延亨3	6 8		島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩領内に櫨樹10万本を植える 島原藩で5ヶ年の倹約令を出す 島原藩松平氏と宇都宮藩戸田氏と所領入れ替え	享保5 キリスト教以外の洋書輸入許可
	忠刻 忠祗	1719 1720 1737 1744 1746	享保 4 享保 5 元文 2 延亨元 延亨 3	6 8		島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩領内に櫨樹10万本を植える 島原藩で5ヶ年の倹約令を出す 島原藩松平氏と宇都宮藩戸田氏と所領入れ替え 島原藩 藩札6種類を発行	享保5 キリスト教以外の洋書輸入許可
戸田	忠刻 忠祗 忠	1719 1720 1737 1744 1746 1749	享保4 享保5 元文2 延亨元 延亨3 寛延2	6 8	23	島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩領内に櫨樹10万本を植える 島原藩で5ヶ年の倹約令を出す 島原藩松平氏と宇都宮藩戸田氏と所領入れ替え	享保5 キリスト教以外の洋書輸入許可
戸田	忠刻 忠祗 忠	1719 1720 1737 1744 1746 1749	享保4 享保5 元文2 延亨元 延亨3	6 8		島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩領内に櫨樹10万本を植える 島原藩で5ヶ年の倹約令を出す 島原藩松平氏と宇都宮藩戸田氏と所領入れ替え 島原藩 藩札6種類を発行	享保5 キリスト教以外の洋書輸入許可
戸田	忠刻 忠祗 忠寛	1719 1720 1737 1744 1746 1749 1767	享保4 享保5 元文2 延亨3 寛延2 明和4	6 8 7	23	島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩領内に櫨樹10万本を植える 島原藩で5ヶ年の倹約令を出す 島原藩松平氏と宇都宮藩戸田氏と所領入れ替え 島原藩 藩札6種類を発行 幕府島原藩預りの肥前彼杵郡・高来郡のうち7ヶ村を長 崎代官に付属させる	享保5 キリスト教以外の洋書輸入許可
戸田	忠刻 忠祗 忠寛	1719 1720 1737 1744 1746 1749 1767 1768	享保4 享保5 元享元 延享3 寛延2 明和4 明和5	6 8 7 1 6	23	島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩領内に櫨樹10万本を植える 島原藩で5ヶ年の倹約令を出す 島原藩松平氏と宇都宮藩戸田氏と所領入れ替え 島原藩 藩札6種類を発行 幕府島原藩預りの肥前彼杵郡・高来郡のうち7ヶ村を長 崎代官に付属させる 島原藩戸田氏と宇都宮藩松平氏と所領入替	享保5 キリスト教以外の洋書輸入許可
戸田	忠刻 忠祗 忠	1719 1720 1737 1744 1746 1749 1767 1768 1774 1789	享保4 享保5 元文享3 寛延2 明和4 明和5 家政元	6 8 7 1 6	23	島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩領内に櫨樹10万本を植える 島原藩で5ヶ年の倹約令を出す 島原藩松平氏と宇都宮藩戸田氏と所領入れ替え 島原藩 藩札6種類を発行 幕府島原藩預りの肥前彼杵郡・高来郡のうち7ヶ村を長崎代官に付属させる 島原藩戸田氏と宇都宮藩松平氏と所領入替 島原藩の救民儲毅法定まる	享保5 キリスト教以外の洋書輸入許可
戸田	忠刻 忠祗 忠寛 忠恕	1719 1720 1737 1744 1746 1749 1767 1768 1774 1789 1792	享保4 享保5 元文2 元享3 寛延2 明和4 安改4	6 8 7 1 6	23 14 8	島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩領内に櫨樹10万本を植える 島原藩で5ヶ年の倹約令を出す 島原藩 藩札6種類を発行 幕府島原藩預りの肥前彼杵郡・高来郡のうち7ヶ村を長 崎代官に付属させる 島原藩戸田氏と宇都宮藩松平氏と所領入替 島原藩の救民儲穀法定まる 雲仙普賢岳噴火,眉山崩落	享保5 キリスト教以外の洋書輸入許可
戸田	忠刻 忠祗 忠寛 忠恕 忠	1719 1720 1737 1744 1746 1749 1767 1768 1774 1789 1792 1793	享保4 享保5 元文2 延享3 寛延 2 明和 4 安政政政 寛政 4 5 寛政 4	6 8 7 1 6 4 9	23	島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩領内に櫨樹10万本を植える 島原藩で5ヶ年の倹約令を出す 島原藩松平氏と宇都宮藩戸田氏と所領入れ替え 島原藩 藩札6種類を発行 幕府島原藩預りの肥前彼杵郡・高来郡のうち7ヶ村を長崎代官に付属させる 島原藩戸田氏と宇都宮藩松平氏と所領入替 島原藩の救民儲穀法定まる 雲仙普賢岳噴火,眉山崩落 島原藩校稽古館設立	
戸田	忠刻 忠祗 忠寛 忠恕 忠憑	1719 1720 1737 1744 1746 1749 1767 1768 1774 1789 1792 1793 1819	享保45 字保5 元享2 延享至 2 明和 3 東 2 明和 3 京政政政政政政政政政政政2 2	6 8 7 1 6 4 9 5	23 14 8	島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩領内に櫨樹10万本を植える 島原藩で5ヶ年の倹約令を出す 島原藩 藩札6種類を発行 幕府島原藩預りの肥前彼杵郡・高来郡のうち7ヶ村を長崎代官に付属させる 島原藩 戸田氏と宇都宮藩松平氏と所領入替 島原藩の救民儲穀法定まる 雲仙普賢岳噴火,眉山崩落 島原藩校稽古館設立 島原藩主松平主殿頭,長崎港の番所等を巡視	文化元 ロシア使節レザノフ長崎に来船
<b>111</b>	忠刻 忠祗 忠寛 忠恕 忠憑 忠	1719 1720 1737 1744 1746 1749 1767 1768 1774 1789 1792 1793 1819 1826	享保45 字保5 元享3 寬 和 4 明和 永政政政政政政政政政政政政政 9	6 8 7 1 6 4 9 5 4	23 14 8	島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩領内に櫨樹10万本を植える 島原藩で5ヶ年の倹約令を出す 島原藩 藩札6種類を発行 幕府島原藩預りの肥前彼杵郡・高来郡のうち7ヶ村を長崎代官に付属させる 島原藩 戸田氏と宇都宮藩松平氏と所領入替 島原藩の救民儲穀法定まる 雲仙普賢岳噴火,眉山崩落 島原藩を稽古館設立 島原藩主松平主殿頭,長崎港の番所等を巡視 島原藩 フグを食すことを禁ず	文化元
	忠刻 忠祗 忠寛 忠恕 忠憑 忠侯	1719 1720 1737 1744 1746 1749 1767 1768 1774 1789 1792 1793 1819 1826 1831	享保45 字保52 延9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9	6 8 7 1 6 4 9 5 4	23	島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩領内に櫨樹10万本を植える 島原藩で5ヶ年の倹約令を出す 島原藩 藩札6種類を発行 幕府島原藩預りの肥前彼杵郡・高来郡のうち7ヶ村を長崎代官に付属させる 島原藩戸田氏と宇都宮藩松平氏と所領入替 島原藩の救民儲穀法定まる 雲仙普賢岳噴火,眉山崩落 島原藩を稽古館設立 島原藩主松平主殿頭,長崎港の番所等を巡視 島原藩 フグを食すことを禁ず 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止	文化元
	忠刻 忠祗 忠寛 忠恕 忠憑 忠侯 忠	1719 1720 1737 1744 1746 1749 1767 1768 1774 1789 1792 1793 1819 1826 1831 1843	享保45 字保52 延9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9	6 8 7 1 6 4 9 5 4	23	島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩でちヶ年の倹約令を出す 島原藩 でちヶ年の倹約令を出す 島原藩 藩札6種類を発行 幕府島原藩預りの肥前彼杵郡・高来郡のうち7ヶ村を長崎代官に付属させる 島原藩戸田氏と宇都宮藩松平氏と所領入替島原藩の救民儲穀法定まる 雲仙普賢岳噴火,眉山崩落 島原藩を稽古館設立 島原藩主松平主殿頭,長崎港の番所等を巡視 島原藩 フグを食すことを禁ず 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩の済衆館で九州初の死体解剖	文化元 ロシア使節レザノフ長崎に来射 文化5 フェートン号事件 文政6 オランダ商館医シーボルト来崎
田	忠刻 忠祗 忠寛 忠恕 忠憑 忠侯	1719 1720 1737 1744 1746 1749 1767 1768 1774 1789 1792 1793 1819 1826 1831 1843	享保45 完保5 完好5 完好5 完好5 完好5 是好5 是好5 是好5 是好5 是好5 是好5 是好5 是	7 1 6 4 9 5 4	23	島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩でちヶ年の倹約令を出す 島原藩 でちヶ年の倹約令を出す 島原藩 藩札6種類を発行 幕府島原藩預りの肥前彼杵郡・高来郡のうち7ヶ村を長崎代官に付属させる 島原藩戸田氏と宇都宮藩松平氏と所領入替島原藩の救民儲穀法定まる 雲仙普賢岳噴火,眉山崩落 島原藩を稽古館設立 島原藩主松平主殿頭,長崎港の番所等を巡視 島原藩 フグを食すことを禁ず 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩の済衆館で九州初の死体解剖 島原藩千々石村の小作人ら,打ち毀しを行う	文化元 ロシア使節レザノフ長崎に来角 文化5 フェートン号事件 文政6 オランダ商館医シーボルト来幅 文政7 シーボルト長崎郊外に鳴滝塾を開く
田	忠刻 忠祗 忠寛 忠恕 忠憑 忠侯 忠誠	1719 1720 1737 1744 1746 1749 1767 1768 1774 1789 1792 1793 1819 1826 1831 1843	享保45 字保52 延9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9	7 1 6 4 9 5 4	23	島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩でちヶ年の倹約令を出す 島原藩 でちヶ年の倹約令を出す 島原藩 藩札6種類を発行 幕府島原藩預りの肥前彼杵郡・高来郡のうち7ヶ村を長崎代官に付属させる 島原藩戸田氏と宇都宮藩松平氏と所領入替 島原藩の救民儲穀法定まる 雲仙普賢岳噴火,眉山崩落 島原藩を稽古館設立 島原藩主松平主殿頭,長崎港の番所等を巡視 島原藩 フグを食すことを禁ず 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩の済衆館で九州初の死体解剖 島原藩がつりました。打ち毀しを行う 島原藩が島原海岸の測量図を作成	文化元 ロシア使節レザノフ長崎に来射 文化5 フェートン号事件 文政6 オランダ商館医シーボルト来幅 文政7 シーボルト長崎郊外に鳴滝塾を開く 文政11 シーボルト事件
戸田松平	忠刻 忠祗 忠寛 忠恕 忠憑 忠侯 忠誠 忠	1719 1720 1737 1744 1746 1749 1767 1768 1774 1789 1792 1793 1819 1826 1831 1843 1847	享保45 享保52 元延延 寛 明 明 安寛寛寛文文天天弘嘉 第 明 和 永政政政政政保保化永 3 元45 2 2 2 3 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	7 1 6 4 9 5 4	23	島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩でちヶ年の倹約令を出す 島原藩でちヶ年の倹約令を出す 島原藩 藩札6種類を発行 幕府島原藩預りの肥前彼杵郡・高来郡のうち7ヶ村を長崎代官に付属させる 島原藩戸田氏と宇都宮藩松平氏と所領入替 島原藩の救民儲穀法定まる 雲仙普賢岳噴火,眉山崩落 島原藩を稽古館設立 島原藩主松平主殿頭,長崎港の番所等を巡視 島原藩 フグを食すことを禁ず 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩の済衆館で九州初の死体解剖 島原藩がらたでは、打ち毀しを行う 島原藩が島原海岸の測量図を作成 八年の歳月をかけた薬園が完成した	文化元 ロシア使節レザノフ長崎に来射 文化5 フェートン号事件 文政6 オランダ商館医シーボルト来幅 文政7 シーボルト長崎郊外に鳴滝塾を開く 文政11 シーボルト事件 嘉永6 米使ペリー艦隊を率いて浦賀に来航
	忠刻 忠祗 忠寛 忠恕 忠憑 忠侯 忠誠 忠精	1719 1720 1737 1744 1746 1749 1767 1768 1774 1789 1792 1793 1819 1826 1831 1843 1847 1849	享保45字元延延 寬 明 明 安寬寬宜文文天天弘嘉 嘉 和 4 5 3元45字文文天 3 2 4 4 5 3元45字文文天 5 4 5 4 5 6 5 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6	7 1 6 4 9 5 4	23	島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩でちヶ年の倹約令を出す 島原藩でちヶ年の倹約令を出す 島原藩 藩札6種類を発行 幕府島原藩預りの肥前彼杵郡・高来郡のうち7ヶ村を長崎代官に付属させる 島原藩戸田氏と宇都宮藩松平氏と所領入替島原藩の救民儲毅法定まる 雲仙普賢岳噴火,眉山崩落 島原藩を稽古館設立 島原藩主松平主殿頭,長崎港の番所等を巡視 島原藩 フグを食すことを禁ず 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩の済衆館で九州初の死体解剖 島原藩がの精キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩がらかけた薬園が完成した (現在国指定史跡旧島原藩薬園跡)	文化元 ロシア使節レザノフ長崎に来射 文化5 フェートン号事件 文政6 オランダ商館医シーボルト来崎 文政7 シーボルト長崎郊外に鳴滝塾を開く 文政11 シーボルト事件 嘉永6 米使ペリー艦隊を率いて浦賀に来航 ロシア使節プチャーチン長崎に来航
<b>111</b>	忠刻 忠祗 忠寛 忠恕 忠憑 忠侯 忠誠 忠精 忠	1719 1720 1737 1744 1746 1749 1767 1768 1774 1789 1792 1793 1819 1826 1831 1843 1847 1849 1853	享保任52元延延 寬 明 明 安寬寬宜文文天天弘嘉 嘉 嘉 永 7	6 8 7 1 6 4 9 5 4 10	23	島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩でちヶ年の倹約令を出す 島原藩でちヶ年の倹約令を出す 島原藩 藩札6種類を発行 幕府島原藩預りの肥前彼杵郡・高来郡のうち7ヶ村を長崎代官に付属させる 島原藩戸田氏と宇都宮藩松平氏と所領入替島原藩の救民儲毅法定まる 雲仙普賢岳噴火,眉山崩落 島原藩を稽古館設立 島原藩主松平主殿頭,長崎港の番所等を巡視 島原藩 フグを食すことを禁ず 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩の済衆館で九州初の死体解剖 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が高原海岸の測量図を作成 八年の歳月をかけた薬園が完成した (現在国指定史跡旧島原藩薬園跡) 島原藩海岸部三ヶ所に砲台を築く	文化元 ロシア使節レザノフ長崎に来射 文化5 フェートン号事件 文政6 オランダ商館医シーボルト来幅 文政7 シーボルト長崎郊外に鳴滝塾を開く 文政11 シーボルト事件 嘉永6 米使ペリー艦隊を率いて浦賀に来航 ロシア使節プチャーチン長崎に来航 安政2 アメリカ総領事ハリス下田に上
<b>111</b>	忠刻 忠祗 忠寛 忠恕 忠憑 忠侯 忠誠 忠精	1719 1720 1737 1744 1746 1749 1767 1768 1774 1789 1792 1793 1819 1826 1831 1843 1847 1849 1853	享字元延延 寬 明 明 安寬寬文文天天弘嘉 嘉 嘉文久 3 元 4 5 3 元 4 5 2 9 2 2 7 天 3 2 8 3 2 9 2 1 4 4 2 8 3 2 9 2 1 4 5 2 9 2 2 1 4 7 3 2 9 1 2 9 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1	6 8 7 1 6 4 9 5 4	23	島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩でちヶ年の倹約令を出す 島原藩でちヶ年の倹約令を出す 島原藩 藩札6種類を発行 幕府島原藩預りの肥前彼杵郡・高来郡のうち7ヶ村を長崎代官に付属させる 島原藩戸田氏と宇都宮藩松平氏と所領入替 島原藩の救民儲穀法定まる 雲仙普賢岳噴火,眉山崩落 島原藩を稽古館設立 島原藩主松平主殿頭,長崎港の番所等を巡視 島原藩 フグを食すことを禁ず 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩の済衆館で九州初の死体解剖 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が高原海岸の測量図を作成 八年の歳月をかけた薬園が完成した (現在国指定史跡旧島原藩薬園跡) 島原藩海岸部三ヶ所に砲台を築く 島原藩が農民の制を設け,小浜・加津佐・有馬に置く	文化元 ロシア使節レザノフ長崎に来射 文化5 フェートン号事件 文政6 オランダ商館医シーボルト来幅 文政7 シーボルト長崎郊外に鳴滝塾を開く 文政11 シーボルト事件
田	忠刻 忠祗 忠寛 忠恕 忠憑 忠侯 忠誠 忠精 忠	1719 1720 1737 1744 1746 1749 1767 1768 1774 1789 1792 1793 1819 1826 1831 1843 1847 1849 1853	享享元延延 寛 明 明 安寬寬宜文文天天弘嘉 嘉 嘉文元治	6 8 7 1 6 4 9 5 4	23	島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩でちヶ年の倹約令を出す 島原藩でちヶ年の倹約令を出す 島原藩 藩札6種類を発行 幕府島原藩預りの肥前彼杵郡・高来郡のうち7ヶ村を長崎代官に付属させる 島原藩戸田氏と宇都宮藩松平氏と所領入替島原藩の救民儲毅法定まる 雲仙普賢岳噴火,眉山崩落 島原藩を稽古館設立 島原藩主松平主殿頭,長崎港の番所等を巡視 島原藩 フグを食すことを禁ず 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩の済衆館で九州初の死体解剖 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が高原海岸の測量図を作成 八年の歳月をかけた薬園が完成した (現在国指定史跡旧島原藩薬園跡) 島原藩海岸部三ヶ所に砲台を築く	文化元 ロシア使節レザノフ長崎に来射 文化5 フェートン号事件 文政6 オランダ商館医シーボルト来幅 文政7 シーボルト長崎郊外に鳴滝塾を開く 文政11 シーボルト事件 嘉永6 米使ペリー艦隊を率いて浦賀に来航 ロシア使節プチャーチン長崎に来航 安政2 アメリカ総領事ハリス下田に上
松平	忠刻 忠祗 忠寛 忠恕 忠憑 忠侯 忠誠 忠精 忠和	1719 1720 1737 1744 1746 1749 1767 1768 1774 1789 1792 1793 1819 1826 1831 1843 1847 1849 1853	享字元延延 寬 明 明 安寬寬文文天天弘嘉 嘉 嘉文久 3 元 4 5 3 元 4 5 2 9 2 2 7 天 3 2 8 3 2 9 2 1 4 4 2 8 3 2 9 2 1 4 5 2 9 2 2 1 4 7 3 2 9 1 2 9 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1	6 8 7 1 6 4 9 5 4	23	島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩でちヶ年の倹約令を出す 島原藩でちヶ年の倹約令を出す 島原藩 藩札6種類を発行 幕府島原藩預りの肥前彼杵郡・高来郡のうち7ヶ村を長崎代官に付属させる 島原藩戸田氏と宇都宮藩松平氏と所領入替 島原藩の救民儲穀法定まる 雲仙普賢岳噴火,眉山崩落 島原藩を稽古館設立 島原藩主松平主殿頭,長崎港の番所等を巡視 島原藩 フグを食すことを禁ず 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩の済衆館で九州初の死体解剖 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が高原海岸の測量図を作成 八年の歳月をかけた薬園が完成した (現在国指定史跡旧島原藩薬園跡) 島原藩海岸部三ヶ所に砲台を築く 島原藩が農民の制を設け,小浜・加津佐・有馬に置く	文化元 ロシア使節レザノフ長崎に来射 文化5 フェートン号事件 文政6 オランダ商館医シーボルト来幅 文政7 シーボルト長崎郊外に鳴滝塾を開く 文政11 シーボルト事件 嘉永6 米使ペリー艦隊を率いて浦賀に来航 ロシア使節プチャーチン長崎に来航 安政2 アメリカ総領事ハリス下田に上
松平	忠刻 忠祗 忠寛 忠恕 忠憑 忠侯 忠誠 忠精 忠和	1719 1720 1737 1744 1746 1749 1767 1768 1774 1789 1792 1793 1819 1826 1831 1843 1847 1849 1853 1854 1864 1867	享享元延延 寛 明 明 安寬寬寬文文天天弘嘉 嘉 <u>嘉文元明</u> 明 安寬寬寬文文天天弘嘉 嘉 <u>嘉文元明</u> 明 安寬寬寬文文天天弘嘉 嘉 <u>嘉文元明</u>	6 8 7 1 6 4 9 5 4 10	23   14   8   1   1	島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩でちヶ年の倹約令を出す 島原藩 でちヶ年の倹約令を出す 島原藩 藩札6種類を発行 幕府島原藩預りの肥前彼杵郡・高来郡のうち7ヶ村を長崎代官に付属させる 島原藩戸田氏と宇都宮藩松平氏と所領入替 島原藩戸田氏と宇都宮藩松平氏と所領入替 島原藩の救民儲毅法定まる 雲仙普賢岳噴火,眉山崩落 島原藩を稽古館設立 島原藩を移古館設立 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩の済衆館で九州初の死体解剖 島原藩の済衆館で九州初の死体解剖 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が高原海岸の測量図を作成 八年の歳月をかけた薬園が完成した (現在国指定史跡旧島原藩薬園跡) 島原藩海岸部三ヶ所に砲台を築く 島原藩が農民の制を設け、小浜・加津佐・有馬に置く 島原藩 第一次長州征伐に出兵	文化元 ロシア使節レザノフ長崎に来射 文化5 フェートン号事件 文政6 オランダ商館医シーボルト来幅 文政7 シーボルト長崎郊外に鳴滝塾を開く 文政11 シーボルト事件 嘉永6 米使ペリー艦隊を率いて浦賀に来航 ロシア使節プチャーチン長崎に来航 安政2 アメリカ総領事ハリス下田に上
	忠刻 忠祗 忠寛 忠恕 忠憑 忠侯 忠誠 忠精 忠和	1719 1720 1737 1744 1746 1749 1767 1768 1774 1789 1792 1793 1819 1826 1831 1843 1847 1849 1853 1854 1863 1864	享享元延延 寛 明 明 安寬寬宜文文天天弘嘉 嘉 嘉文元治	6 8 7 1 6 4 9 5 4 10	23   14   8   1   1   16   14	島原藩製の蝋2万1864斤 大坂へ移出 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩で百姓一揆おこる 島原藩でちヶ年の倹約令を出す 島原藩でちヶ年の倹約令を出す 島原藩 藩札6種類を発行 幕府島原藩預りの肥前彼杵郡・高来郡のうち7ヶ村を長崎代官に付属させる 島原藩戸田氏と宇都宮藩松平氏と所領入替島原藩戸田氏と宇都宮藩松平氏と所領入替島原藩の救民儲毅法定まる 雲仙普賢岳噴火,眉山崩落 島原藩を稽古館設立 島原藩主松平主殿頭,長崎港の番所等を巡視 島原藩 フグを食すことを禁ず 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩が砂糖キビの栽培を禁止 島原藩の済衆館で九州初の死体解剖 島原藩がらかけた薬園が完成した (現在国指定史跡旧島原藩薬園跡) 島原藩海岸部三ヶ所に砲台を築く 島原藩が農民の制を設け、小浜・加津佐・有馬に置く 島原藩 第一次長州征伐に出兵 明治維新	文化元 ロシア使節レザノフ長崎に来射 文化5 フェートン号事件 文政6 オランダ商館医シーボルト来幅 文政7 シーボルト長崎郊外に鳴滝塾を開く 文政11 シーボルト事件 嘉永6 米使ペリー艦隊を率いて浦賀に来航 ロシア使節プチャーチン長崎に来航 安政2 アメリカ総領事ハリス下田に上

第6表 森岳城関連年表

# 第5章 森岳城の歴史

## 第1節 研究史

森岳城は元和四年に松倉重政が築城して以降,諸氏15代にわたり営まれてきた近世城郭である。現在でもその地割は島原市街に大きな影響を与えている。本丸・二ノ丸を囲繞する堀,外郭を巡る石垣などは周辺の地形や町筋に制約を与え,現在もなお城下としての町並みをよく残している。

森岳城に関する先駆的な研究は林銑鉄氏の『島原半島史』<sup>(1)</sup>が挙げられる。林氏による文献資料を主とした整理では城郭規模および藩士屋敷地の拡幅を以下のように整理している。林氏の整理は膨大な文献資料をもとにしており、県史・市史など各方面で基本的な資料として、現在でも森岳城のみでなく、島原の歴史を伝えるものとして豊かな内容をもっている(第6表)。

#### ○森岳城の規模 (林編 1954 による)

外郭東西 190.5 間 南北 660.5 間 内郭本 丸 東西 86 間 南北 107.5 間 城門 7 平櫓 33二ノ丸 東西 68 間 南北 65 間 三ノ丸 東西 84.5 間 南北 165 間

城下町島原に対する林氏の下級藩士屋敷3期区分案は、考古学的な検証が行われていない分野である。氏の整理では古町・中ノ丁・下ノ丁などは築造時に建設され、上新丁・下新丁・新建は松平氏封入の1669年頃に、江戸丁については江戸藩士が帰国した1864年の建設としている。(第61図)現在残る武家屋敷の軸線は林氏の指摘するようにそれぞれ異なり、城下町の拡張を知ることのできる資料でであり、今後、考古学的事象とつき合わせて検証されていかねばなられない。

近年では、直線的なラインを多用する森岳城を、「元和型城郭の典型例で、大砲戦を意識した日本的な変化であったと位置づけ」、中世から近世への一つの転換点として千田義博氏<sup>(2)</sup>は理解している。千田氏の整理は虎口の分類を主としているが、内郭のみではなく外郭、城下町をも含めた視点でもある。中世から近世への城下町づくりの歴史のなかでも、森岳城に採用された地割は大きな位置を占めてくるのではないだろうか。

また、土橋氏は外郭ラインの踏査を行い、外郭の依存状況を整理し、特に東の塁線は幅が広く、西の塁線は東に比べ高いが、幅が狭いことを報告している<sup>(3)</sup>。また、地形上の特徴も整理し、築城には扇状地という傾斜地を上手く利用し、本丸や二ノ丸には労力を集中し、三ノ丸および外郭には労力を惜しんでいると指摘している。さらに外郭石塁が大手門から東側にかけて高く、それ以外は低くつくられることを指摘し、その理由として①地形 ②城下町や港からの眺望の意識 ③敵の誘導を挙げている。港として利用された大手門前広場からの威容、ぬかるむ水田を堀として利用する外郭ライン、長い直線を用いた城郭構造などが森岳城には備わっているという。土橋氏の見解は現地踏査による一歩つっこんだ観察であり、築城の目的にせまる論功として大きく評価される。

このように森岳城に関する考古学的整理は土橋氏により鏑矢を放たれたばかりであり、過去の研究は少なく、発掘調査も今回が初めてである。そこで本稿では現地踏査および地形図(島原市発行1/2500島原市街図)を基本資料として、今回三ノ丸の発掘調査で得られた資料を参考にしながら、森岳城の規模・地割などを復元し、城と城下町の造成がどのようにしてなされたのかを整理していきたい。

## 第2節 森岳城周辺の地形

#### 1 扇状地と森岳城 (第59図)

第59図は2m間隔の等高線を強調した図である。24m等高線までは扇状地地形の曲線がよく残るが,22m等高線以下は外郭線に沿った直線的な等高線が確認できる。以下,各等高線が森岳城築城にともなって,どの程度改変されているのかを詳細に観察していく。

10m 等高線は大手門石垣周辺から北へ直角に曲がり東虎口門跡に至り、先魁門で東に曲がり、田町門付近では方形に膨らみ、外郭北東隅付近に至り東に膨らみ、諫早門以北に広がる水田に入り込む。

12m 等高線は城外郭南西隅付近から直線的になり、外郭線に沿い東進し、大手門手前で本丸堀内部に直角に曲がり入り込む。堀内部を巡ったあと、二ノ丸東で再び地表面に現れ北に進み、田町門付近で大きく東に膨らみ、再び北進し、外郭北辺に至り再び東に膨らみ、水田面に入り込んでいる。

14m 等高線は外郭南西隅付近から城内に入りすぐに堀を周り、二ノ丸に架かる土橋を通り三ノ丸前の通路を東進し、三ノ丸東隅近くで直角に曲がり北に進む。その後田町門から西に上る通路付近で東に膨らみ、三ノ丸北東隅で西に曲がり、以北は曲線をまじえながら北門に至る。

16m 等高線は新建町筋に平行するラインを保ちながら、城内に入り、長崎県立島原商業高等学校のグラウンド内を北進し、鐘楼前西から三ノ丸に入り込んで島原市立第一小学校・長崎県立島原高等学校に残る三ノ丸石垣をつたい、今回調査地点の石垣を通過する。三ノ丸北端では西に曲がり、中央を走る道筋沿いに北進し、外郭北辺で東に方形に膨らみ水田に入り込む。

18m 等高線は新建町筋に平行するラインを保ちながら、県立島原商業高校西辺をつたい、西虎口門で東に直角に曲がり、鐘楼を過ぎて、北に曲がり三ノ丸西辺を通り、外郭北辺までほぼ一直線にのび、東に方形に膨らんで、水田に入り込んでいる。

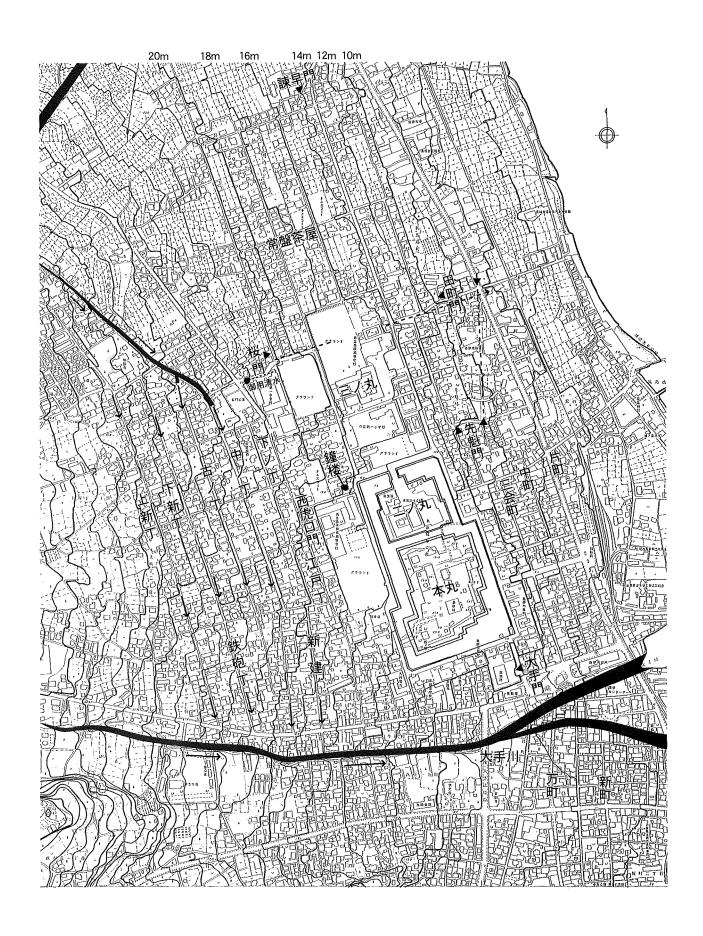
20m 等高線は新建町筋に平行するラインをとりながら新建を抜け、下ノ丁(武家屋敷)町筋に平行するラインに変化し、下ノ丁を抜け城内に入り込む。城内に入り込んだ先は現在テニスコートとして整地され、それを抜けて外郭線に沿うようにして島原市立第一中学校グラウンドを巡り、桜門付近からほぼ直線に北進していく。その等高線は城外を抜ける前に西に方形に張り出し、水田面に残る扇状地曲線に繋がっている。

22m 等高線は扇状地曲線を残しながら鉄砲町筋を通過し、下新町(武家屋敷)に入り急激に直線的なラインに強制され西虎口門跡を過ぎたあたりで城内に入り、ほぼ直線に北進し外郭北西隅で扇状地曲線が再び現れる。

24m~32mの等高線は城外西に広がる武家屋敷を通るラインで、基本的には22m等高線と同じく、 大手川周辺では扇状地曲線を呈するが、武家屋敷に入ると町筋に平行する直線に置き換わり、武家屋 敷北辺(下ノ丁~上新丁)に至ると扇状地曲線が復活する。

34m以上の等高線は扇状地地形の典型ともいえる曲線を呈しており、旧地形がよく残る。

以上の2 m 間隔等高線の整理によると、旧地形である扇状地は現在の三ノ丸付近にその中心が復元でき、城主の居城となったこの部分がもっとも安定した水はけのよい土地であることが理解できる。さらに本丸及び大手門の位置する周辺は扇状地曲線から突出した位置にあり、飛び出した山状の地形に復元でき、森岳城の名称の由来となった森岳いう小山があったことが想定される。三ノ丸北側の家臣屋敷地は扇状地が緩やかに平地化する部分にあたり、ここも扇状地地形の中でも特に安定した広い



第59図 森岳城跡周辺地形図(S=1/7,500)

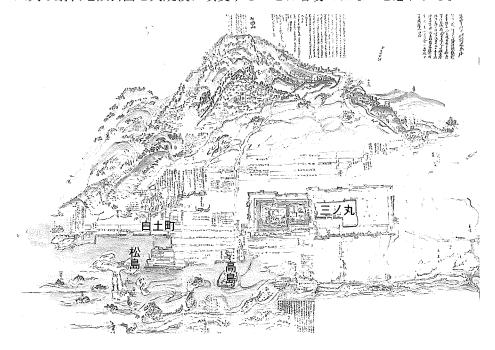
土地であったと思われる。このように森岳城は扇状地先端部の平坦面とその南端に位置する小山をうまく利用し、築城に際して地形的側面と平面プランとの問題を解決している。やはり土橋氏の指摘通り、扇状地という地形を上手く利用しながら三ノ丸・外郭をつくっていることが予想される。しかし、本丸から大手門付近にかけては小山を利用しながらも、比較的労働力を集中させ高い石垣を築いたことが理解できる。

また、城内は標高 10m から 22m のなかに入り、10m 等高線は外郭東辺を、22m 等高線は外郭西辺に接しており、高さにおいても厳格な基準のもとに設計されたことが理解できる。緩やかに傾斜する扇状地を利用しつくられた城郭であるため、各道筋の中での整地地業が必要であり、2m 等高線をみても、それらが行われたことが理解できる。特に三ノ丸の内外ではその整地のあり方が異なり、三ノ丸全体を覆うような整地と三ノ丸外では道筋ごとに階段状の整地とが行われている。

また,外郭北辺で確認された等高線の東への方形の飛び出しは,外郭北辺に築かれた石塁もしくは 土塁の影響であり,西辺と同様に幅広い石塁が巡らされていたのであろう。

城外に目を向けると武家屋敷では道筋ごとに階段状の整地面が確認でき、ここでは三ノ丸城内のような大区画ではないが、小区画の整地が行われていることが理解される。城内北側での各等高線の直線的な部分での東西間隔は、 $22m \sim 18m$  との間隔が約85m,  $18m \sim 16m$  との間隔が約88m,  $20m \sim 22m$  との間隔が約40m を測る。城外の武家屋敷内での直線的な部分での東西間隔は、 $30m \sim 28m$  との間隔が約66m,  $28m \sim 26m$  との間隔が約66m,  $24m \sim 26m$  との間隔が約62m,  $22m \sim 20m$  との間隔が約52m となる。城内外での直線的な等高線の間隔が異なっており、地割の基準が城内と武家屋敷とで異なることが確認される。地割の問題については次項以下でも検討を加えていく。

以上,地形図をもとに等高線を中心に旧地形との比較を試みたが,直線的な線をもって築城された城郭であることが理解できたかと思われる。高さの基準や,長さの基準などの築造段階で打破せねばならない問題は多いのであろうが,見事に解決され城郭を完成させている。また,南北約1.5km,東西0.5kmの広大な扇状地傾斜面を大規模に改変することは容易ではないと思われる。



第60図 森岳城図(島原図書館松平文庫蔵)

約7年という期間が築城に最低限必要な期間であったのか。今後どの程度の労働量が復元されるのか、考古学的データの蓄積をまって整理されねばならないであろう。

#### 2 城下町の水路 (第2・59図)

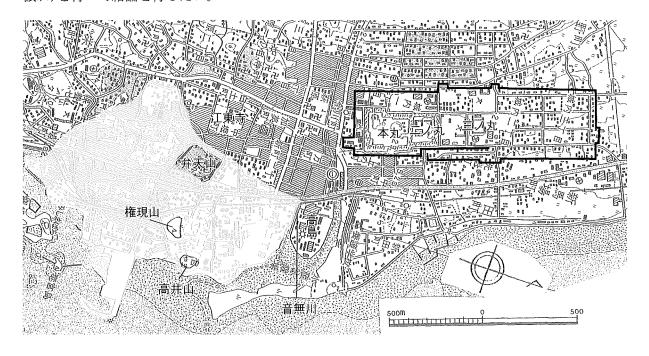
観光地島原の風景として水路と武家屋敷が有名である。以下に、現地踏査を中心として水の確保・ 処理に関して整理を試みたい。

扇状地地形特有の天井川・湧水を利用し水を確保していることはある程度想定できる。現在、武家屋敷に引かれている水路は、六ツ木町付近から諫早門北まで流れる河川から確保していると思われる。その水路は現在は下ノ丁に残るのみであるが、おそらくすべての町筋に引かれていたのであろう。町筋ラインに沿って、直線的に通路中央を流され町筋の生活を潤していたものと思われる。その排水処理は大手川へ行われていたものと思われる。

さて、大手川上流は六ツ木町付近にあたり、諫早門の北に流れる河川と源流は同じくするものと思われ、大手川が架け替えられた可能性が高い(第2図)。

大手川以南は、湧水などを主に利用していたと思われ、森岳城・武家屋敷などのように大規模で計画的な水の確保は行われた痕跡は管見ではみられない。

城内の用水確保は桜門西に位置する「御用清水」より城内に取り込んだものと思われる。その「清水」は三ノ丸城内、三ノ丸堀などを中心に城内を潤し、田町門から城外の田へ流されている。絵図でみると三ノ丸内部に2~3の井戸が確認でき(第65図)、非常用水の確保も行われていたようである。三ノ丸東に鉤の手に掘られた堀は、三ノ丸焼失(延宝2年)を期に整備された可能性も否定できない。今回の調査で得られた堀石垣(SD01)の方位は、林によって下新丁・上新丁などと同じ松平忠房入封時の建設と整理された鉄砲町筋方位と外郭石垣方位との間にあり、延宝2年に整備された可能性も示唆できる。今後、森岳城全域を覆う調査区(世界座標系国土座標)に基づく精密な調査の結果(特に真北からの振れ)を待って結論を待ちたい。



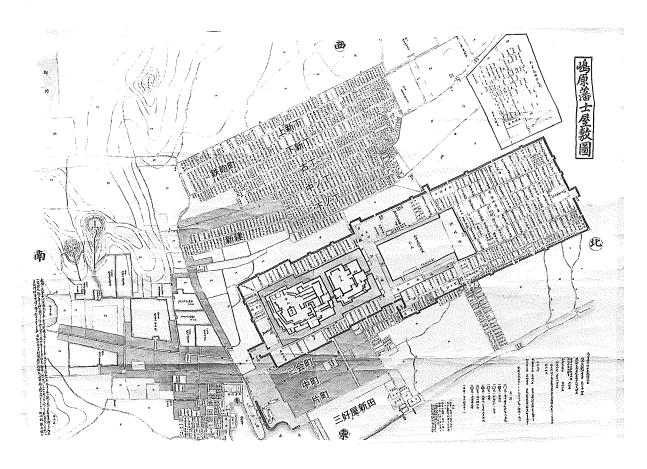
第61図 島原市街地形図(S=1/20,000)

#### 3 森岳城を中心とした町筋 (第59~62図)

森岳城は六ツ木町から諫早門北まで流れる河川により形成された扇状地扇端部南端に位置し、南は大手川流域に接している。音無川以東は寛政四年、雲仙岳噴火による眉山崩壊以後陸地化しているため、松倉時代には内湾であったと思われる部分である(第60・61図)。音無川以東の町筋は曲線を交えており、松平時代の復興政策により形成された新しい町並みである。眉山崩壊以前は大手門前に広がる港は高島や大手浜と呼ばれる砂州に挟まれた広い湾を配した波の穏やかな良港であったと思われる。

現在の音無川の流路は絵図で見る旧海岸線に沿っており、音無川より西に位置する部分は平均的に 土地が高く、旧湾にあたる部分は土地が低い。特に眉山崩壊前の絵図にみえる松島は、現在は弁天山 と呼ばれる小高い丘になり、音無川沿いに旧海岸線があることが復元できる(第61図)。

森岳城外郭ラインはおよそ長軸で N-18°30′-W<sup>(4)</sup>を測り、それに平行する道筋・町筋は城郭外では、下級藩士の屋敷地、田町門から東にのびる道筋、先魁門南に広がる三会町・中町・片町で確認される。同じ武家屋敷でも鉄砲町筋は N-14°30′-W、新建・北原筋は N-6°-Wを測り、城郭ラインよりも真北寄りで、時期が異なることを示している。おそらく鉄砲町・新建などの町筋は森岳城築城当時の設計に合わせたものではなく、あらたに設定され形成されたものであろう。これらの相違は、屋敷地の設計に時期差が存在することを示しており、林氏の整理した築造当時(1625年頃)の藩士屋敷地(古丁・中ノ丁・下ノ丁)造成、松平忠房入封時(1667年頃)の藩士屋敷地(上新丁・下新丁)造成、江戸話藩士帰国時(1864年頃)の藩士屋敷地(江戸丁)造成との比較が重要となってくる。この点は次項以下で区画割りの復元を行い検討していきたい。



第62図 島原藩士屋敷図(島原図書館松平文庫蔵)

## 4 町民屋敷の町筋(第59図,図版1)

大手川以南に広がる町民屋敷の町筋ラインは、N-3°30′-W付近で、扇状地扇端部の線に沿ったラインに近い。このラインは森岳城とも異なり、より真北に近い軸となっており、森岳城築城以前にさかのぼる可能性もある。城外近くでは田町門西から先魁門付近にその痕跡が確認される(第59図に▲で示したライン)。このラインは小道と畑の境界に残るものであるが、残存長約250mでほぼ真北を測り、南に延長すると町筋ラインに平行する大手広場線にぶつかっている。その間は森岳城大手門から外郭東南ラインにより切られている。特に中世島原市の居城である浜の城は、松島の対岸に位置しており、現在は江東寺あたりに復元される。おそらく中世段階はこの浜の城周辺に広がり、軸を合わせて町が形成されていたものと思われる。今後、道筋や建物などの主軸の判明する中世段階の考古学的史料が検出された段階で具体的に検討していきたい。

## 第3節 森岳城の地割

#### 1 方格地割の基準 (第58・64 図)

現在本丸および二ノ丸は公園として整備が進み、"温泉の街"島原観光の中心として活躍している。三ノ丸は県立島原高等学校、第一小学校の敷地となり文教地区として利用されている。また、本丸・二ノ丸に行きつくためのアクセスとして、島原駅からのびる自動車用の幅広い路が東虎口門の南に造られ、外郭の一部が改変されている。これらの他にも改変が加わる部分は、明治以降の廃城に伴うものと、自動車普及による道幅拡大などによって年々増加し、創建時代の森岳城の姿は徐々にうすれつつある。しかし、広大な地形上に刻まれた設計理念は現在でも残り、武家屋敷や三ノ丸北側などには



第63図 森岳城周辺の様子(昭和22年:国土地理院)

創建当時の姿を見ることができる。ここでは、それらの地割にかかわる問題を検討していきたい。

表紙写真にみるように絵図との比較で三ノ丸北側の区割は残りがよいものと思われる。各種の絵図では二ノ丸を囲繞する堀は、三ノ丸東西を通る道筋の延長上に描かれる場合が多い。現地でもそのように確認できる。また、絵図では三ノ丸中央の北に常盤茶屋の前を通る道筋が諫早門まで通じている。この道筋も現在残る。これら三ノ丸北側にのびる3本の道筋の間隔は2500分の1地形図で約90mを測り、およそ300尺に復元できる。三ノ丸東を通る南北の道筋と外郭東辺ラインとの距離は地図上で約90mを測る。また、地形の項で検討したように等高線の間隔として計測された80mや40mという数字もこれに従うものであろう。このため本稿では、90m = 300尺という単位を方格地割の基準として利用していきたい。また、調査で得られた三ノ丸内部と堀とを地割する6m = 20尺という基準に準ずるものであり、三ノ丸内部の建築物に対して用いられた基準として想定できる(第58図)。

## 2 方格地割の検討(第64図,図版1)

第 64 図は 300 尺の方格を組み、森岳城に合わせたものである。主軸は N-18°30′-W(基準は真北)で、大手門、本丸北東櫓(現、民俗資料展示室)、二ノ丸東西の堀などを基準にし設定した。

合致する範囲は、城内、藩士屋敷(下ノ丁~上新丁)、田町門筋、三会町、仲町、片町である。また、地形図上での確認ではないが、昭和22年撮影の空中写真(図版1・上)では諫早門北にも300尺方格の田地が広がっている。300尺方格と合致する範囲は創建時代の森岳城であろうが、それにはどのような意図が働いているのであろうか。

大手川以北で、西に武家屋敷、東に町民屋敷を備え、北には外郭を広げる余地を残している。大手川からの眺めは、高石垣をもつ大手門や天守閣もそびえ立ち、最も勇壮で重厚な感を与える。北からの眺めは街道沿いに天守閣が望めるが、見上げるような高い位置にはなく目印的な役割をもっている。さらに北には外郭を広げる余地を残しており、南に広がる意図は少しも感じられない。明らかに大手川以南の町民屋敷もしくはそれ以南からの隔絶を意識した構造と思われる。

合致しない部分は新たに建設された武家屋敷で、三ノ丸内部で検出された建物の軸と一致する道筋もある。三ノ丸は1674年に起こった「桜町の大火」で一部を残して消失しており、再建された建物群が存在する。鉄砲町筋は上新丁・下新丁と方位を異にしており、「桜町の大火」以降の造成工事と考えられ、それらと方位を同じくする建物群は松平氏入封以降の建設であることが想定できる。「桜町の大火」の際に佐賀藩より瓦三万枚を贈呈された記事が残り、出土した瓦のなかでも有圏 I 群とした丸瓦、 I ー1 群とした軒平瓦には割れ口などに二次的な火を受けた個体が確認されている。「桜町の大火」によるものか今後の資料的な整理を必要とするが、創建時代瓦の追求に役立つものと思われる。

さらに新建・北原町、江戸町などの武家屋敷筋は現在の磁北とほぼ一致し、それらが比較的新しい時期に造成されたことが理解できる。三ノ丸内部の今回の調査区では、その方位と一致する建物群は 検出されておらず、三ノ丸は松平氏以降安定した時期を迎えていたと考えられる。

以上のように森岳城は非常に残りが良く、町割・城割の変遷が地形図上である程度復元できるほどである。しかし、現在の本丸内部も往時とは異なる部分が観察され、二ノ丸に至っては改変が著しい。 外郭も自動車の普及による直線道化などが発掘調査を経ずして強行されている。できるだけ早い段階に町割り等の資料収集を行ない、創建時代の森岳城のプランを復元しておく必要があろう。



第64図 森岳城跡方格地割想定図(S=1/7,500)

## 第4節 絵図にみられる調査区周辺の状況

## 1 調査区周辺の状況(第65図)

松平文庫所蔵の絵図に関して写真撮影の機会を得た。ここではそれらの絵図を参考にして、調査区で明らかになった三ノ丸東堀について整理していく。

第65図6は昭和22年頃の周辺の状況である。県立島原高等学校の前進である中学校校舎前面の石垣と平行にはしる南北方向のラインが確認される。このラインは現在でも側溝として利用されている。今回の調査では確認されなかったが、調査で得られた石垣(SD01)西面と対する東面石垣がこのラインに沿って存在することが理解されるであろう。絵図では三ノ丸の東に描かれた堀と理解できる。絵図では堀に二本の土橋が架かっており、現在の島原高等学校および第一小学校の正面玄関へのスロープに対応するものと思われる。

また、SD04の北側石垣の東への延長線上は田町門のやや南寄りに位置する(巻頭空中写真・下)。田町門から入る場合は筋違いに三ノ丸へ入るようになっており、その結果 SD04 の北側石垣の延長線は田町門とは直接結ばれないものと思われる。問題点は SD03 と SD04 の幅が異なることある。この相違は現在プールとなる地点の調査が進めば明らかになるだろうが、絵図を資料として整理してみたい。

## 2 絵図にみる調査区周辺(第65図1~5)

第65図1・2は寛政4年(1792)に噴火した雲仙岳に伴う眉山崩壊関係の絵図である。3~5は島原城内郭のみを描いた絵図で、城郭内部の様子や当時の城下町などが描かれる貴重な資料である。

1は寛政4年から文政2年(1819)の作成と推定されている島原市指定文化財「森岳城図」の部分である。三ノ丸東堀は割場東から北に伸び、三ノ丸の外郭線に合わせて東に直角に曲がり、門でとぎれている。それより東は蓋をもつ水路となり、田町門までのびている。

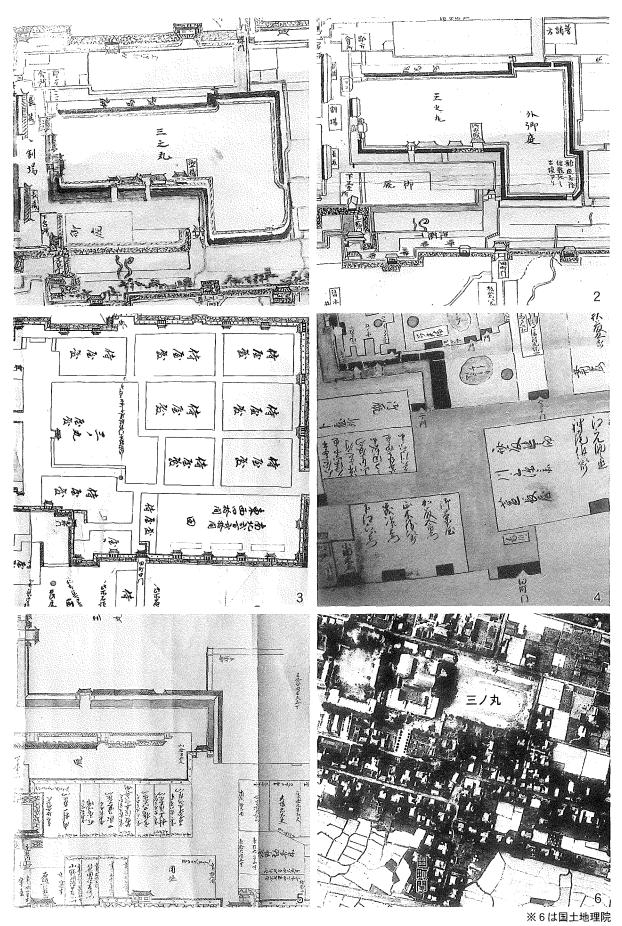
2は「大変前後図」で描かれた内容は上の「森岳城図」と共通し、これも寛政4年以降に描かれたものであることは確実である。三ノ丸南から堀が描かれており、「御土蔵」を超えてから東に直角に曲がって門までが堀である。それより先は蓋がつく水路で、田町門前で南に鈎の手に曲がり、門の南から城外へ流れている。1と比べ線が整っており、直線などは定規を使い描かれている。

二つの絵図に共通することは、「御厩」の平面プランである。北の土橋付近で広場状になっており**3**~**5**には見られない変化である。

3~5は森岳城郭内を描いた図で、寛文12年の銘をもつ3「島原城内外図」、戸田の名のある4・5「森岳城郭内図」である。3は三ノ丸内部の記載は見られず、堀に架かる土橋(橋)もみられず堀は1や2のように東に曲がらず三ノ丸敷地にぶつかり終わっている。1や2で堀からのびていた水路も表現されていない。また、田町門東北方向には「東西弐百弐拾間 東西四拾間 田」とあり、郭内でも藩士屋敷としての機能を果たしていない土地が描かれる。

それに対して4や5には東に曲がる鈎の手状の溝が描かれており、1や2と共通している。また、 3で田と表現された場所は屋敷としての利用が行われており、興味深い変化である。

以上の絵図の作成年代に積極的な根拠はみられない。しかし1と2は眉山崩壊の事実が語るように 寛政4年以降の作成であることが確実である。それに対して森岳城郭のみを描く $3\sim5$ に関してはそ れぞれにみられる書き付けにより、3は松平時代(寛文12年銘)、4は戸田時代の作である可能性があ



第65図 森岳城関連絵図(島原図書館松平文庫蔵)

るが断定できない。絵図の整理では寛政 4年の段階では 4などが示すように鈎の手の堀が巡り、それ以前については、3のようにL字に曲がるのみの堀であった可能性が指摘できる。また、寛文年間にはいまだ城内といえども田として利用される余分があったと判断される。そして  $1 \cdot 2$  と  $3 \cdot 5$  の相違より「御厩」に対して拡張もしくは縮小という行為がなされた可能性が高い。

## 3 調査区内の状況(第65図)

絵図では調査区周辺(三ノ丸東堀付近)は田町門・先魁門・諫早門からの通路が交差する交通の要衝である。今回の調査区のすぐ東に門があり、そこから三ノ丸へ近づくことができる。堀の東に通路があり、広場を持つ厩が存在し、三ノ丸の堀には二本の土橋がかけられていた様子である。今回の調査で得られたSD04南で確認された整地層は、堀東に沿って通る通路の舗装によるものと思われ、その下から検出された柱穴は厩北広場の整地の際に埋められたのであろう。

また、SD01 と交差する可能性の高い SD04 が確認されたが、その前後関係を示す積極的な資料はつかめていない。しかし、幅の違いにより、SD01 は SD04 と同時期ではないことが想定され、SD01 が築造当時の方格地割により近いことが理解される。SD04 は SD01 に後出し、比較的新しい時期の所産であろう。SD04 に先行する柱穴列 SA02・SA03 の間隔は 20 尺を測り、三ノ丸内部で確認された建物配置の基準に一致し興味深い。SD04 以前に何らかの構造物が存在したことを伺えるが、絵図では確認できない。以上の検討から、絵図 3 に描かれた堀は SD03 が設定される以前の状況を, $1 \cdot 2 \cdot 4 \cdot 5$  等は SD03 が設定された以降の状況を描いたものと判断したい。

三ノ丸屋敷内の建物配置の問題であるが、4以外は白壁により囲まれていること・南の正門・東の二門以外に内部の状況を示す積極的な描写はみられない。2には三ノ丸北に「外御庭」と墨書され、その辺りは外庭として利用されていたことが理解できる。1・2には「御土蔵」と描かれており、東の塀に沿って、土蔵がつくられていたことが理解できる。4では屋敷の概略図の他、池(タキリチイケ)の他、弓矢場、井戸(屋内2・屋外2)などが描かれている。SH01が絵図1や2で示す「御土蔵」とどの程度距離があるのか不明である。しかし、その構造的な面から弓矢場というよりは、土蔵などの保存・貯蔵用の地下施設と判断しておきたい。

## 註

- (1) 林銑吉編 1954 『島原半島史』長崎県南高来郡教育会
- (2) 千田嘉博 2000 『織豊系城郭の形成』東京大学出版会
- (3) 土橋啓介 2000 「島原城外郭遺構について」『西海考古』第3号-城館特集号- 西海考古同人会
- (4) 以下の方位については真北からの触れを使用している。

## 参考文献

島原市教育委員会 1994 『島原市の文化財』

入江清 1972 『島原の歴史 藩政編』島原市役所

第65図出典

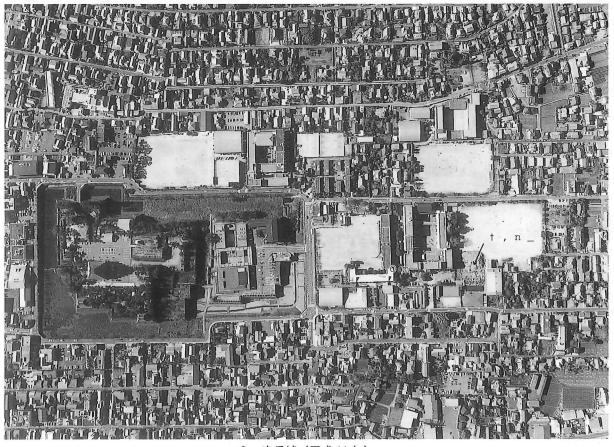
1~5:島原図書館松平文庫所蔵森岳城関連絵図

1「森岳城図」,2「島原大変図」,3「森岳城内外大図」,4「肥前南高来郡島原城図」,5「森岳城郭内図」 6:国土地理院所蔵昭和22年撮影航空写真

# 図 版



1 森岳城とその周辺(昭和22年:国土地理院)



2 森岳城(平成11年)



1 森岳城遠景



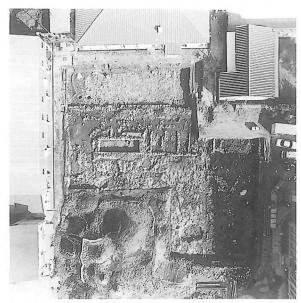
3 平成11年度調査区(東から)



5 平成12年度調査区(北から)



2 平成11年度調査区(北から)



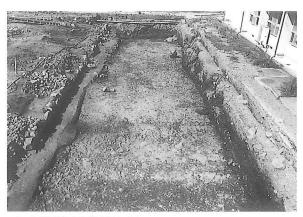
4 平成11年度調査区(西から)



6 平成12年度調査区(北から)



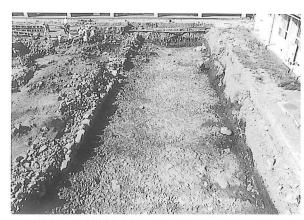
1 堀跡(SD01)作業風景



2 堀跡(SD01)①(南から)



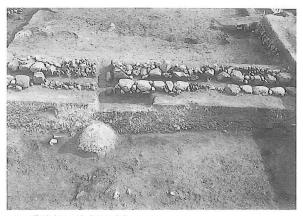
3 堀跡(SD01)積石状況(東から)



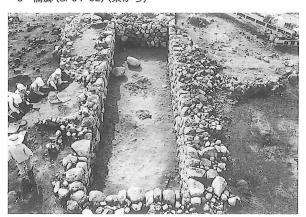
4 堀跡(SD01)②(南から)



5 橋脚(SP01·02)(東から)



6 溝跡(SD02)(西から)



7 石組み遺構(SH01)(北から)



8 石組み遺構(SH01)南壁(北から)

## 図版4



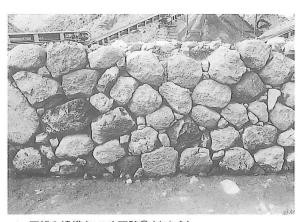
1 石組み遺構(SH01)東壁(西から)



2 石組み遺構(SH01) 北壁(南から)



3 石組み遺構(SH01)西壁①(東から)



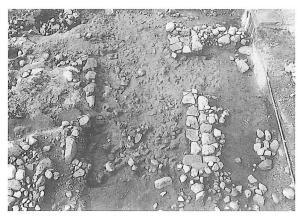
4 石組み遺構(SH01)西壁②(東から)



5 土坑(SK01)(北から)



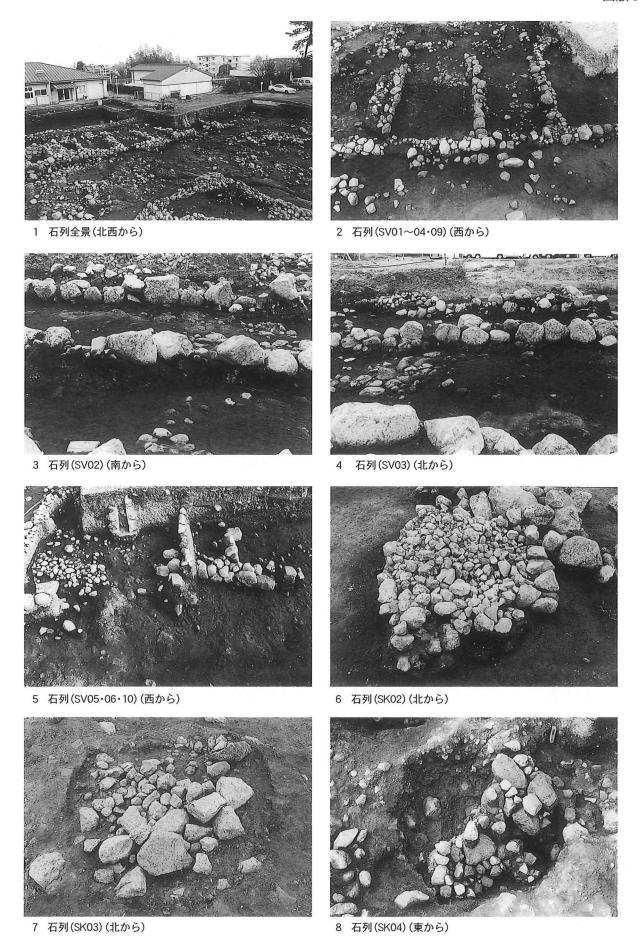
6 石組み遺構(SH01)内, 瓦出土状況(西から)

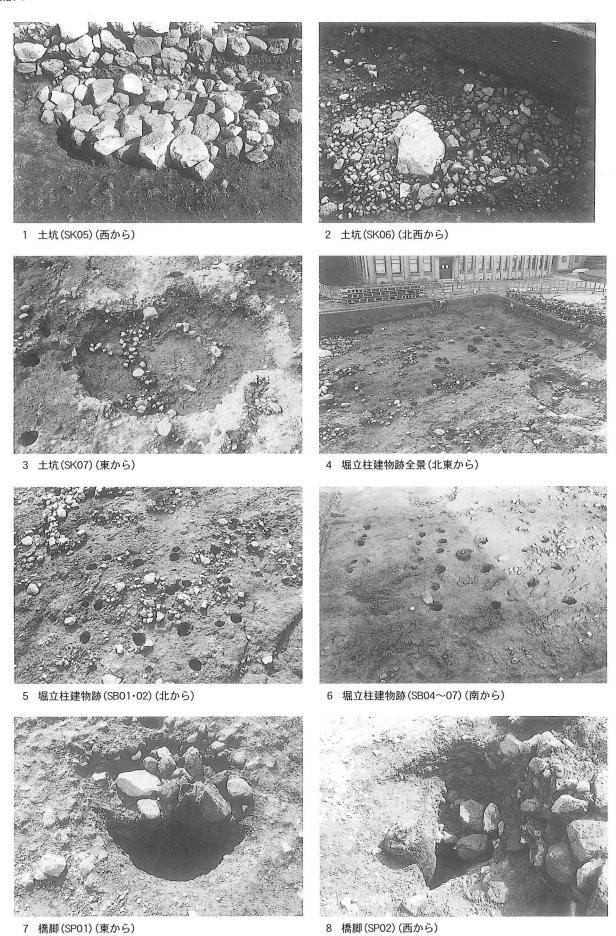


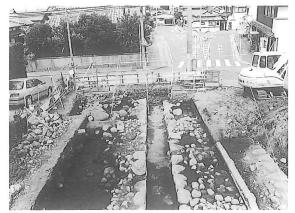
7 石敷き遺構(SS01)(東から)



8 石組み遺構(SS01)(南から)







1 溝跡(SD03)①(西から)



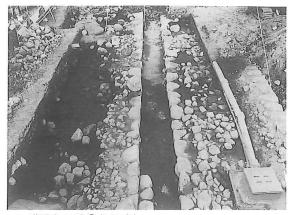
3 溝跡(SD03)③(南西から)



5 堀跡(SD04)①,柱穴列(SA02)①(西から)



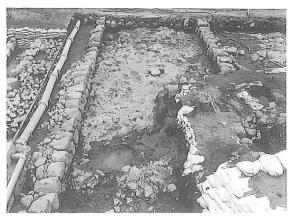
7 堀跡(SD04)北石列①(南から)



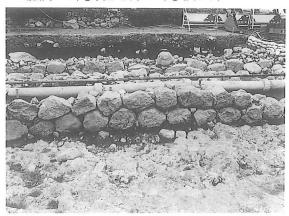
2 溝跡(SD03)②(西から)



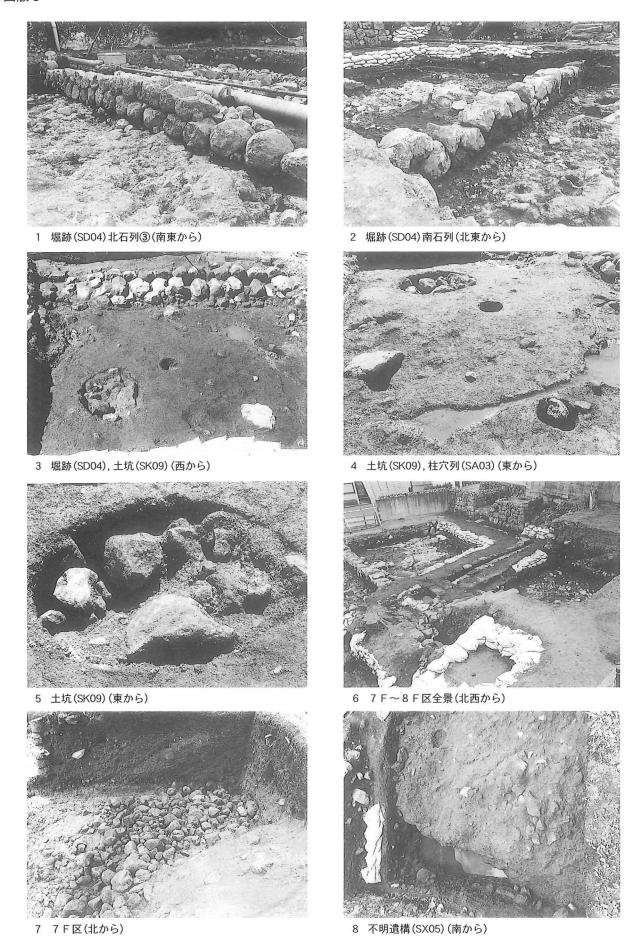
4 溝跡(SD03),堀跡(SD04)(西から)



6 堀跡(SD04)②,柱穴列(SA02)②(西から)



8 堀跡(SD04)北石列②(南から)





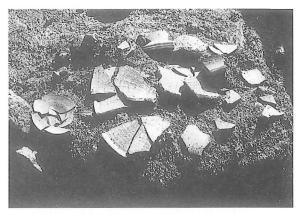
1 遺物出土状況①



2 遺物出土状況②



3 遺物出土状況③



4 遺物出土状況④



5 三ノ丸内,天文年間銘入りの石塔(手前)



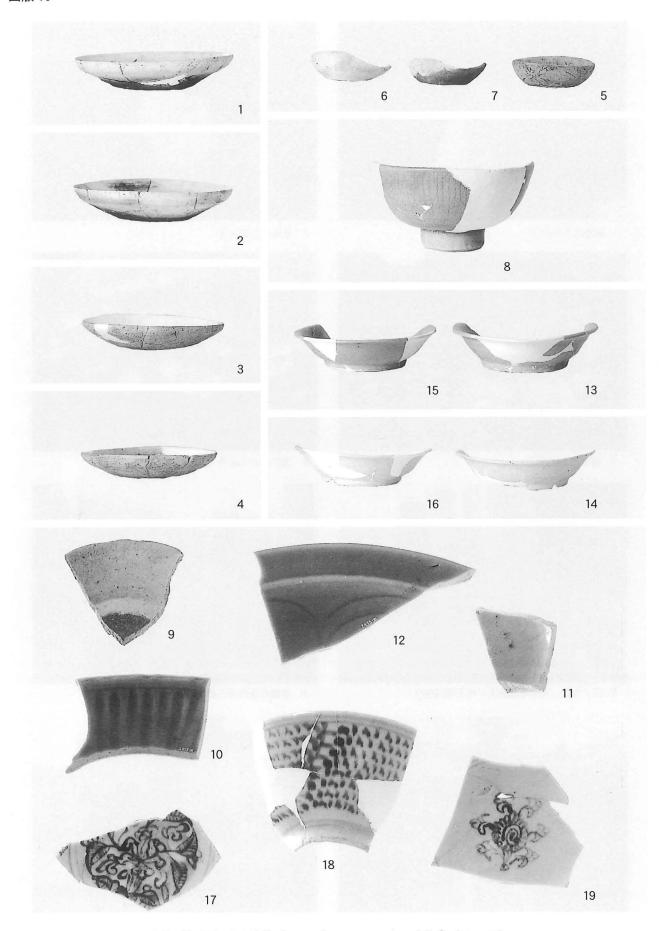
6 常盤茶屋付近の石塔群①



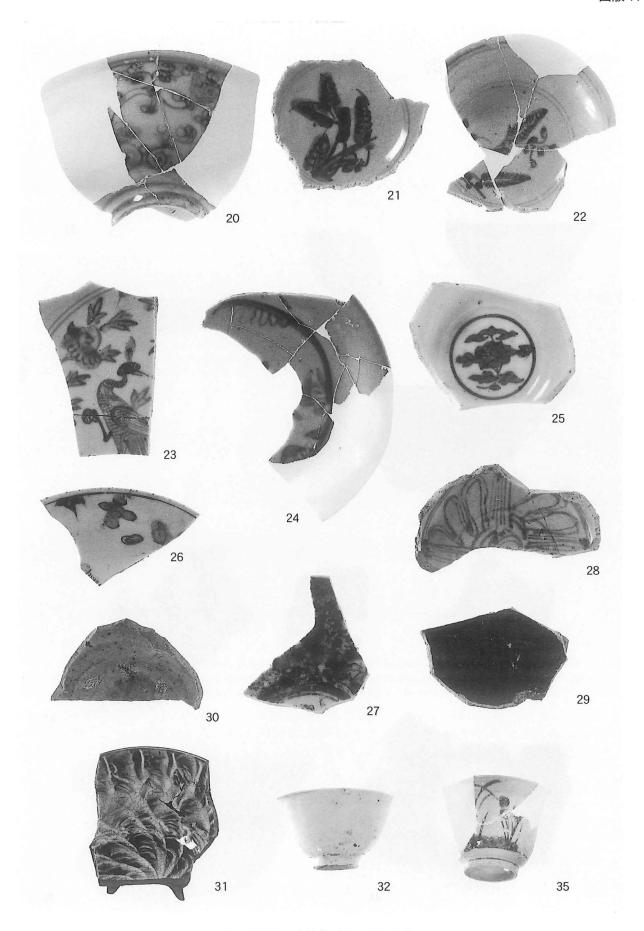
7 桜門付近の御用清水



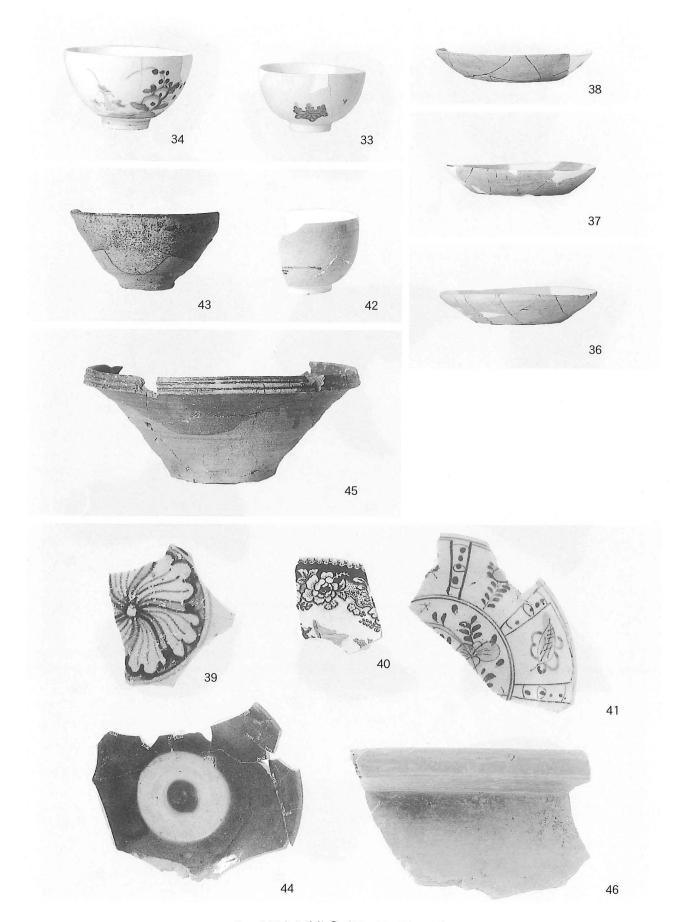
8 常盤茶屋付近の石塔群②



土坑 (SKO1) 出土遺物 (1~4), 2·3区出土遺物① (5~19)



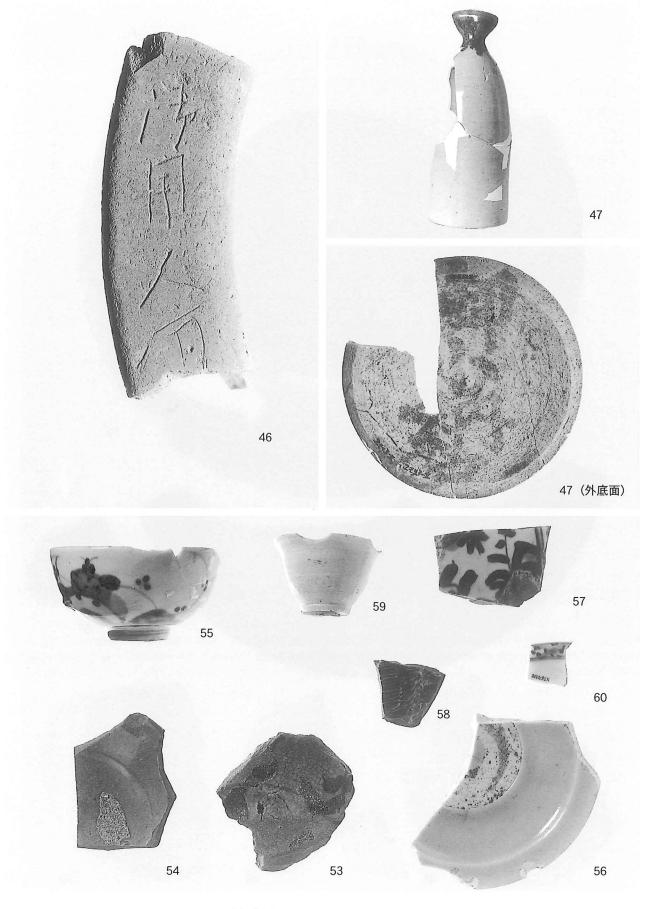
2 · 3区出土遺物②(20~32·35)



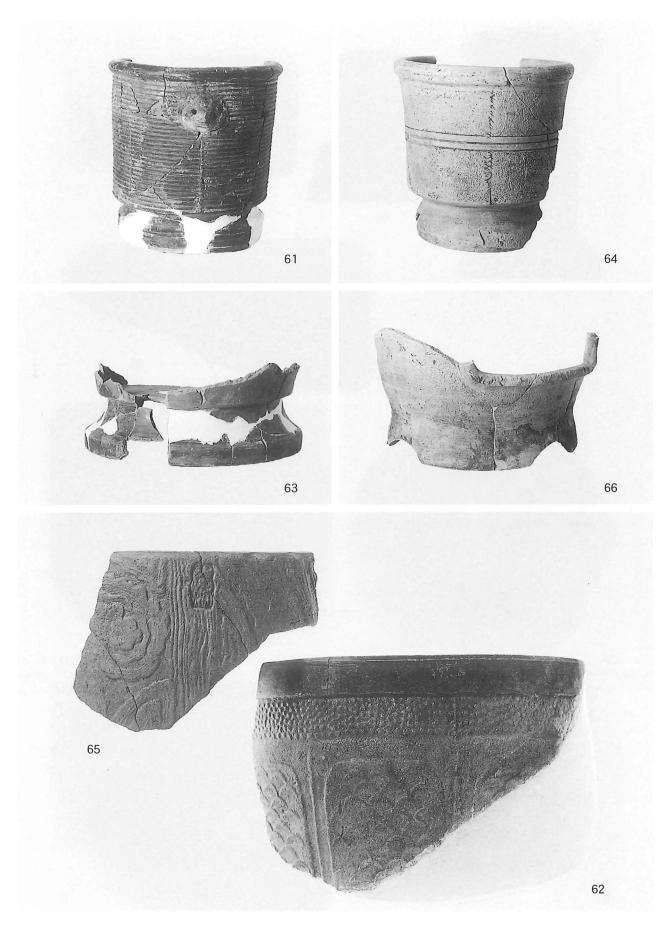
2 · 3区出土遺物③ (33 · 34 · 36 ~ 46)



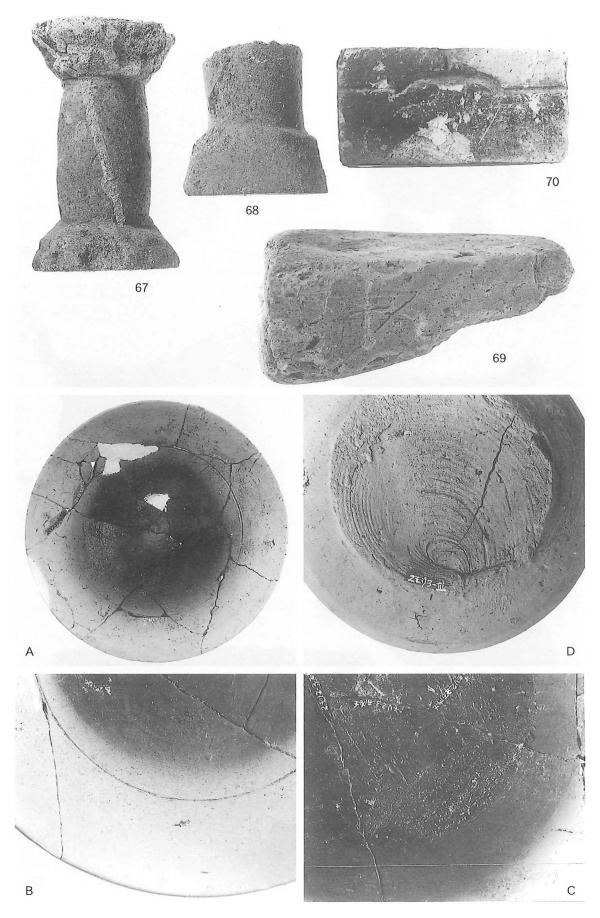
4・5区出土遺物(48~52)



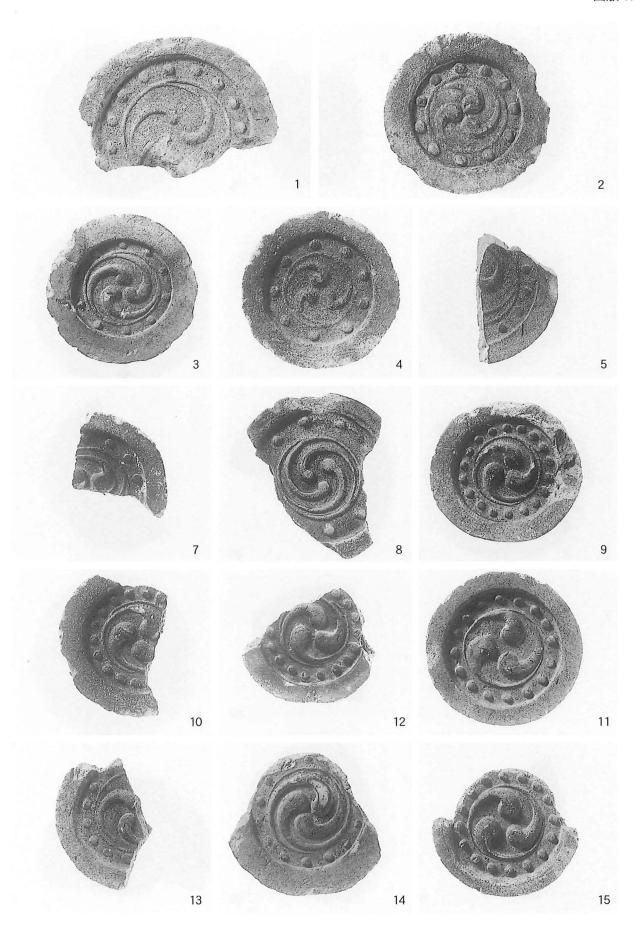
2 · 3 区出土遺物④ (46 · 47), 8 · 9 区出土遺物 (53 ~ 60)



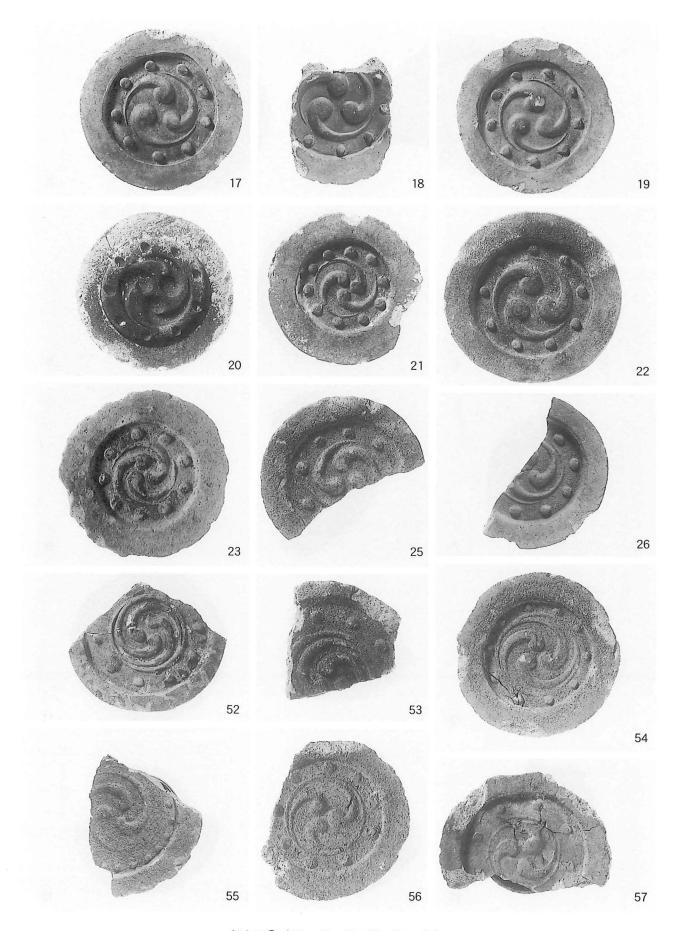
その他の出土遺物 (61~66)



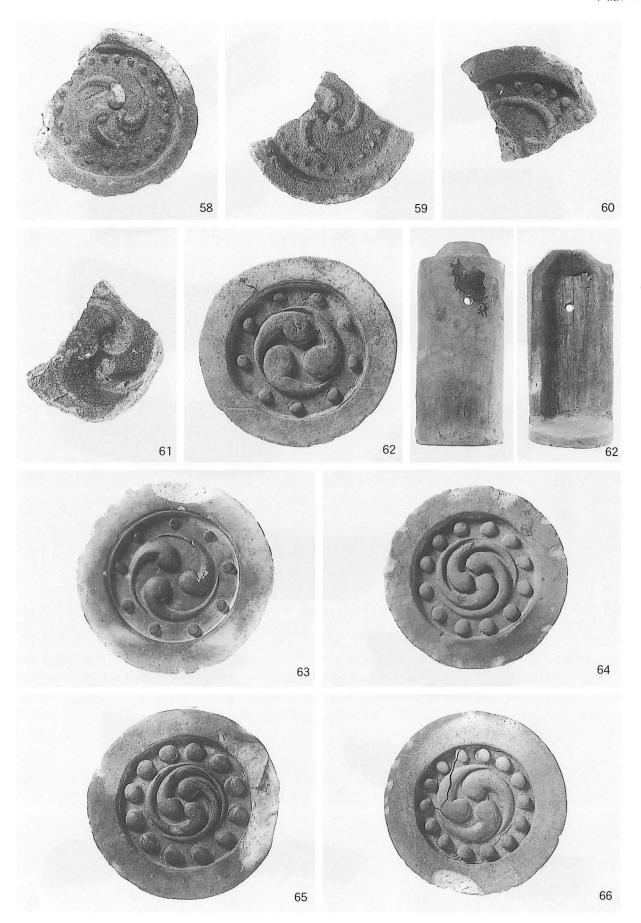
窯道具 (67·68), 石製品 (69·70), 土師器 (A·B: 見込外周の沈線, C: 外底部のヘラケズリ痕, D: 糸切り底)



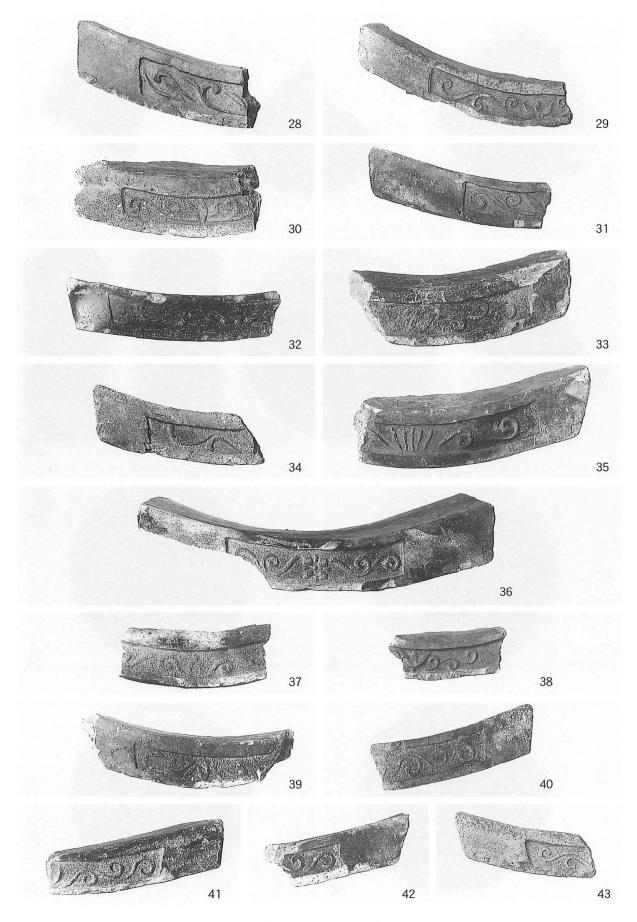
軒丸瓦① (1~5・7~15)



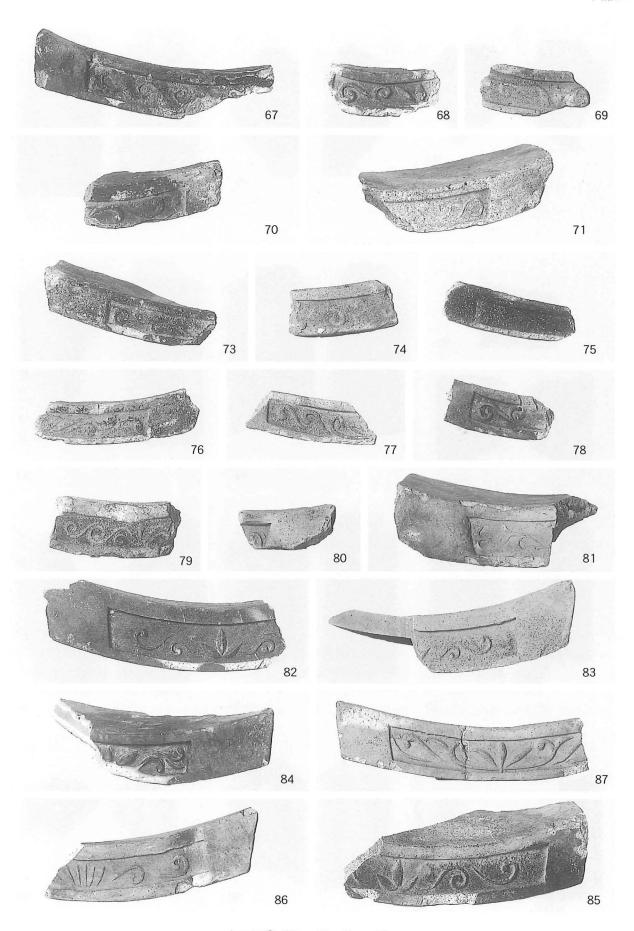
軒丸瓦② (17~23·25·26·52~57)



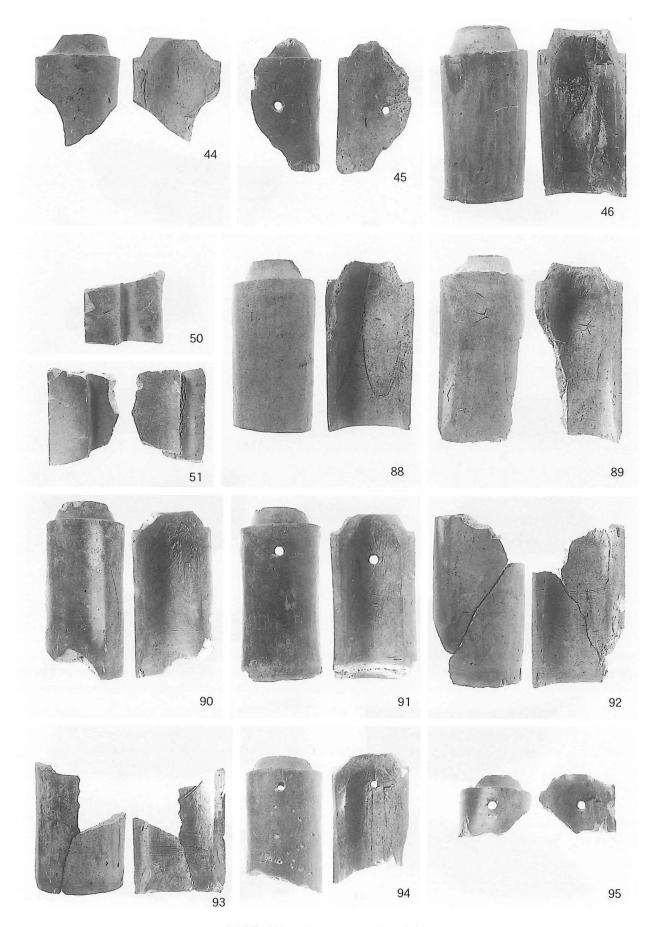
軒丸瓦③ (58~66)



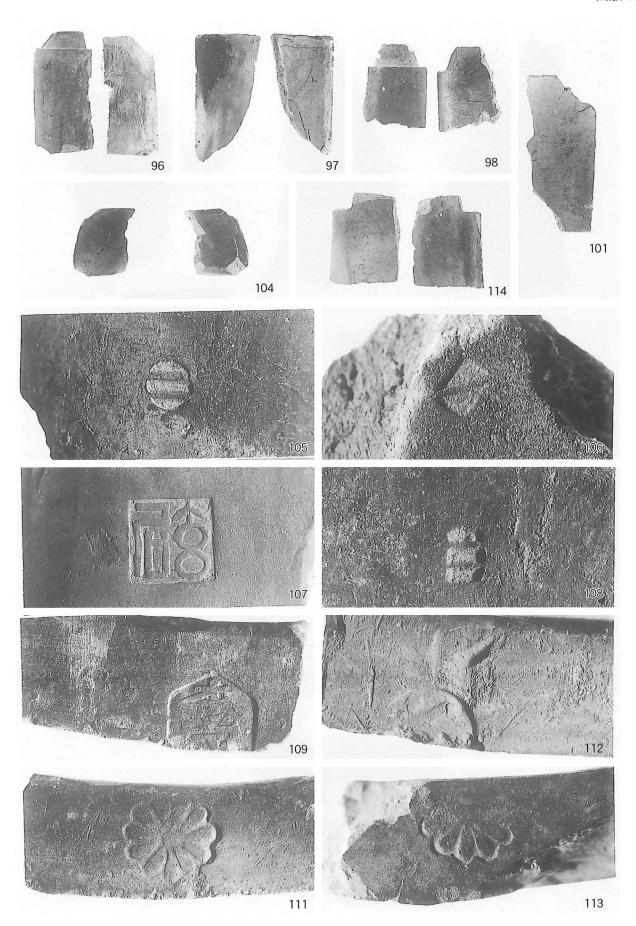
軒平瓦① (28~43)



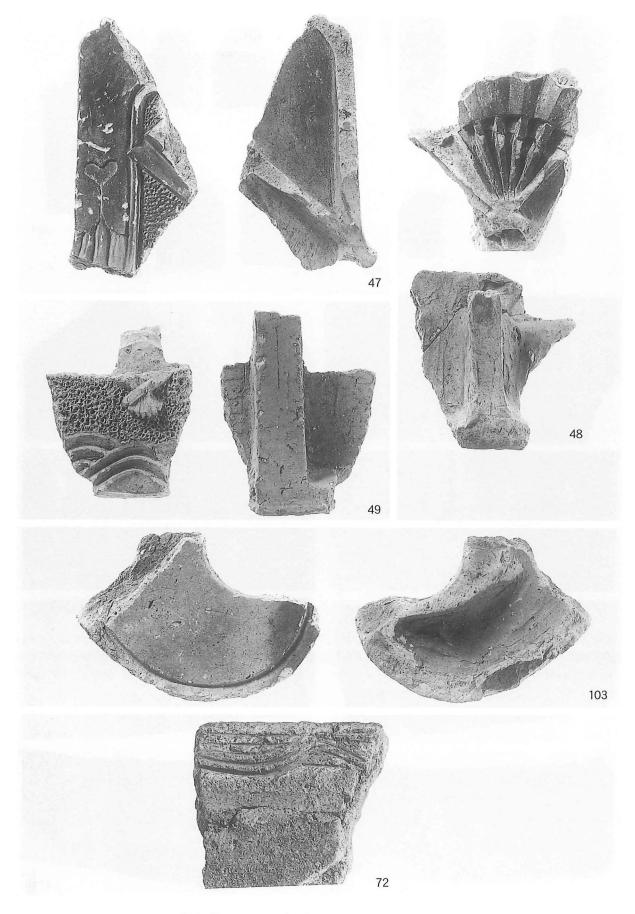
軒平瓦② (67 ~ 71 · 73 ~ 87)



丸瓦① (44~46・50・51・88~95)



丸瓦② (96  $\sim$  98), 平瓦 (101), 輪違い瓦 (104), 刻印付き瓦 (105  $\sim$  109・111  $\sim$  114)



鬼瓦 (47 ~ 49·103), 軒平瓦接合面拡大写真 (72)

## 報告書抄録

ふりがな	もりたけじょうあと								
書 名	森岳城跡								
副書名	県立島原高等学校体育館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告								
巻  次									
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書								
シリーズ番号	第 166 集								
編著者名	本田秀樹・竹中哲朗・川口洋平・東貴之								
編集機関	長崎県教育委員会								
所 在 地	〒 850-8570 長崎県長崎市江戸町 2 番 13 号 TEL095-824-1111								
発行年月日	西暦 2002 年 3 月 31 日								
所収遺跡名	所在地		市町村	ード 遺跡番号	北緯。//	東経。//	調査期間	調査面積 m²	調査原因
もりたけじょうねと 森岳 城 跡	ながさきけんしまばら 長崎県島原下 じょうないに ちょう a 城内 二丁		42381	3	32° 47′ 30″	130° 22′ 05″	20000705 { 20000730 20000920 { 20001210 20010703 { 20010913	1,998	県立島原 高等学館 体育館建
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	j	主な遺物		特記事項	
森岳城跡	城跡	中世近世		堀跡・溝跡 石組遺構・ 石敷遺構・ 石列・掘立 柱建物跡・ 土坑		近世陶磁器・瓦類輸入陶磁器・土師器		森岳城三ノ丸の堀跡	

長崎県文化財調査報告書 第166集

## 森岳城跡

平成 14 年 3 月 31 日

発 行 長崎県教育委員会 〒850-8570 長崎県長崎市江戸町2番13号 TEL 095-824-1111

印 刷 (株) クイックプリント 〒 850-0034 長崎県長崎市樺島町8番12号 TEL 095-827-1318